

B₁類 長胴甕

B₂類 小形甕

(2) 須恵器、須恵器には環、甕、壺、長頸瓶等の器種がある。ここでは数的に多い環に限定して分類した。

環、ロクロ成形で、外底部は回転糸切りの非再調整のものだけである。器形面でも差異はあまり認められない。したがって胎土の色調及び硬軟の相異から二分類した。

A類 色調が灰褐色を呈し、胎土が硬質のもの。

B類 色調が浅黄橙色、もしくはにぶい橙色を呈し、や、軟質のもの。

(3) その他の土器

環、土師器、須恵器の範疇に含まれない一群の土器を「その他の土器」として一括した。成形にロクロを用い、底部切り離しは回転糸切りで非再調整また内外とも黒色処理はほどこされず、胎土は精選され狭雑物を含まず緻密なものから、石英、雲母、小礫、砂粒などを含み器肌がざらざらして脆弱なものまで一様でなく、色調も茶褐色、浅黄橙色、灰白色など一律でない。ここでは一応器形をもとに次のように分類した。

A₁類 器高がわりあい高く、体部がふくらみをもって立ち上がり、口縁部が外反するもの。

A₂類 体部が丸味をもって立ち上がり、口縁部の外反しないもの。

A₃類 体部が直線的に外傾し、口縁部の外反がみられないもの。

B類 器高がわりあい低く、皿状に近い形態を呈するもの。

以上の分類基準をもとに集計したのが第1表の住居跡別出土土器一覧表である。ただしここでとりあげた個体数は、完形土器、復元土器、団上復元の土器に限り、その他の破片は含まなかった。

・B G53住居跡出土の土器は、土師器、須恵器、その他の土器に及ぶが、土師器以外は実測不能の細片のためここでは割愛した。土師器は環と甕の二器種で、環は回転糸切り非再調整のもので底部の調整は認められない。甕はA、B類とも出土したがA類は1点のみで他はロクロ成形、胴部ヘラケズリ調整、底部は回転糸切り、またはヘラケズリ調整のもので占められる。本住居跡は甕のB₂類が出土点数が多く特徴的と云える。

・C I50住居跡は二期にまたがる住居跡であるが土器からはその先後関係を示す有力な資料は得られなかった。土器類で最も多いのは「その他の土器」である。環は内外黒のものが破片も含め若干出土しており、A₂類、B₁類が少量みられる。甕は巻き上げ成形とロクロ成形の長胴甕が多く、また須恵器は焼成不良のものが目立つ「その他の土器」は全ての住居跡で見られるが皿状に近い環は本住居跡だけである。

・C E36住居跡、土師器環はA₁類も若干みられるがB₂類が圧倒的に多い。甕はロクロ成形の長

胴裳が特徴的でA類、B₂類がこれに次ぐ、他の住居跡に比べ須恵器の出土点数が多い。その他の土器においてはB類はみられない。

以上住居毎にその特徴を列挙したが以下出土土器を一括して若干の考察を加えてみたい。土師器の坏は全てロクロ成形により内外黒色処理、若しくは内黒処理を行ない。底部は手持ちヘラケズリ調整及び回転糸切りの非再調整のものである。この中でB₂類が圧倒的に多い。一方甕類はロクロ成形で口唇部を上下に挽き出し口縁帯をもったものが高率を示す。須恵器の坏は灰褐色を呈するものと、浅黄橙色を呈するものの二種類が混在する。浅黄橙色のものは、胎土にあまさがみられ須恵器の焼損的感を受ける。この類似品は北上市相去遺跡^(註1)等7地区の登窯跡出土のもの、同じく葛西壇遺跡^(註2)、上大谷地遺跡^(註3)に求められる。「その他の土器」の坏は器形上は土師器の杯と似るが、体部外面にロクロ成形時の凹凸が顕著にみられる。また法量は一般に小さい。このような土器は土器編年上「表杉ノ入式」に後続するものにとらえられる。高橋信雄氏の「ロクロ土師器の展開」によれば「ロクロ使用土師器は大きく三段階に分けられる」、本遺跡の出土遺物をこれに対比させると第二段階にはは該当しそうである。即ち「土師器、須恵器ともに糸切りの切り離して、前段階のヘラ切手法、ヘラケズリ再調整技法はほとんどみられなくなる」。坏のB₂類が総数の半を占めるがA₁、B₁類も若干出土し、第1段階に相当するヘラケズリ再調整のものがある。第3段階のロクロ水挽きで底部が回転糸切りの切り離し、色調が赤褐色あるいは白橙色の酸化炭焼成のものが数的に多い。したがってこれらの共伴関係から本遺跡の出土土器は第2段階から第3段階にまたがるものと考え大過ないものと思われる。

〔2〕遺構

本遺跡で発見された遺構は竪穴住居跡3棟、掘立柱建物遺構1棟である。このうち竪穴住居跡に限り、その構造をみると次のような共通性が認められる。

- ① 住居跡の平面プランが全て隅丸長方形を呈していること。
- ② かまどは全て東壁に付設され、や・南に偏在、煙道を屋外に伸ばし列り貫きの構造を呈しており、先端に向け傾斜、且つ煙出し部は一段掘り込まれていること。
- ③ いずれも柱穴を有し、コーナーの対角線上に位置することなく、南壁または西壁に片寄るものであること。
- ④ 各住居跡ともかまど付近に1個の貯蔵穴を有すること。

相異点は

- ① 大型住居と小型住居
- ② 貼り床の有無
- ③ 周溝施設の有無

④ ビットの数的ばらつき

以下これら3棟の住居跡構造について幾分の推論をまじえ考察を加えてみたい。3棟の竪穴住居跡でB G 53住居跡を除く他の2棟は、主柱穴の位置が南壁下または南壁線上に設けられる特異な様相を呈する。一方北壁寄りの柱穴は夫々住居跡コーナーの対角線上に位置するが南壁寄りのものはその線上からはずれる。かまど位置は、3棟とも東壁の中央や、南寄りに位置し、煙道の長軸方向が南に7度～9度の傾きをもち壁に直角には構築されない。この様な調査例を本地方に求めると北上市相去遺跡群の第8地区3号住居跡、4号住居跡が類似する。また鬼柳西裏遺跡^(注5)A C 15住居跡、A G 18住居跡、尻引遺跡^(注6)の第II期6号住居跡等も柱穴及びかまど位置に共通性がみられる。これらの住居跡に先行するものが西根遺跡と猫谷地遺跡^(注7)でロクロ未使用期の遺跡といわれ、かまど位置は壁中央に付設されるものを通例としている。本遺跡の場合は4本の主柱穴のうち2本が対角線上からずれて配置され、柱穴のプランは長方形を呈し変化がみられる。またこれらの住居跡に伴う遺物はロクロ土師器と須恵器を主体としている。以上から本遺跡の住居構造は、西根、猫谷地、尻引第I期に後続する新時期のものと考えられる。

〔3〕 降下火山灰

C E 36住居跡の降下火山灰についてみると、床面上にかなりの範囲で堆積しており、また各ビットの埋土上層にレンズ状の堆積が確認された。本住居跡は焼失家屋であり焼失直後に火山灰の降下をみたものと考えられる。尻引遺跡の報文中「第III—3層の粉状バミスは、ロクロ未使用土師器坏にへら切り須恵器坏が共伴する第IV層上に堆積している……」と、本遺跡の場合、粉状バミスはビット上面、床面直上の堆積で且つロクロ土師器、須恵器の共伴することからその後の降下火山灰とみられる。この期のものは相去遺跡群の竪穴住居跡埋土中にも観察され伴出土器との関連から相去遺跡とはほぼ時期を同じくするものと考えられる。

〔4〕 ろくろビットとのろ

C I 50住居跡はII期にまたがっておりI期の住居跡の柱穴を夫々外方に拡張し且つ床面を若干掘り下げて利用している。この中でビット14はろくろ軸の痕跡を残すもので、上端は大方削平されているが墳底部の遺存状態は良好で中心部の小穴はろくろ軸を固定した施設と考えられるこれと類似するものに相去遺跡第8地区3号住居跡、4号住居跡、第10地区の2号住居跡などがある。また第II期は床面上に鉄器、及び鉄鏝が広がり、鉄器生産の工房址的性格を伺わがわせるものである。鉄器生産址を付近に求めると相去の成沢遺跡^(注8)、B J 65住居跡がある。相去遺跡がろくろビットの施設をもち白色粘土塊を住居内に残すことから、土器生産の集落跡と考えられ、その鉄製工具の供給地が成沢遺跡及び本遺跡でなかったろうかとも推測される。

5. まとめ

前項までの中で述べてきた事柄をもとに、ここでは本遺跡の性格及び時期について述べ結びとしたい。

本遺跡は東北新幹線工事に伴う緊急発掘調査で、調査面積は工事予定線内に限られた範囲であった。この中で3棟の竪穴住居跡と1棟の掘立柱建物跡を検出した。

- ① 本遺跡は西に伸びる相去遺跡群とのかかわりを示唆したこと。
- ② 竪穴住居跡は構造面から時期決定の資料を提示してくれたこと。
- ③ 出土土器がロクロ使用土器の終末期段階に近いものであったこと。
- ④ ろくろピットを付設した住居跡が発見されたこと。
- ⑤ 鉄器生産の工房址の性格を有する住居跡が検出されたこと。
- ⑥ 植物種子が遺存したこと。
- ⑦ 降下火山灰の堆積が認められたこと。

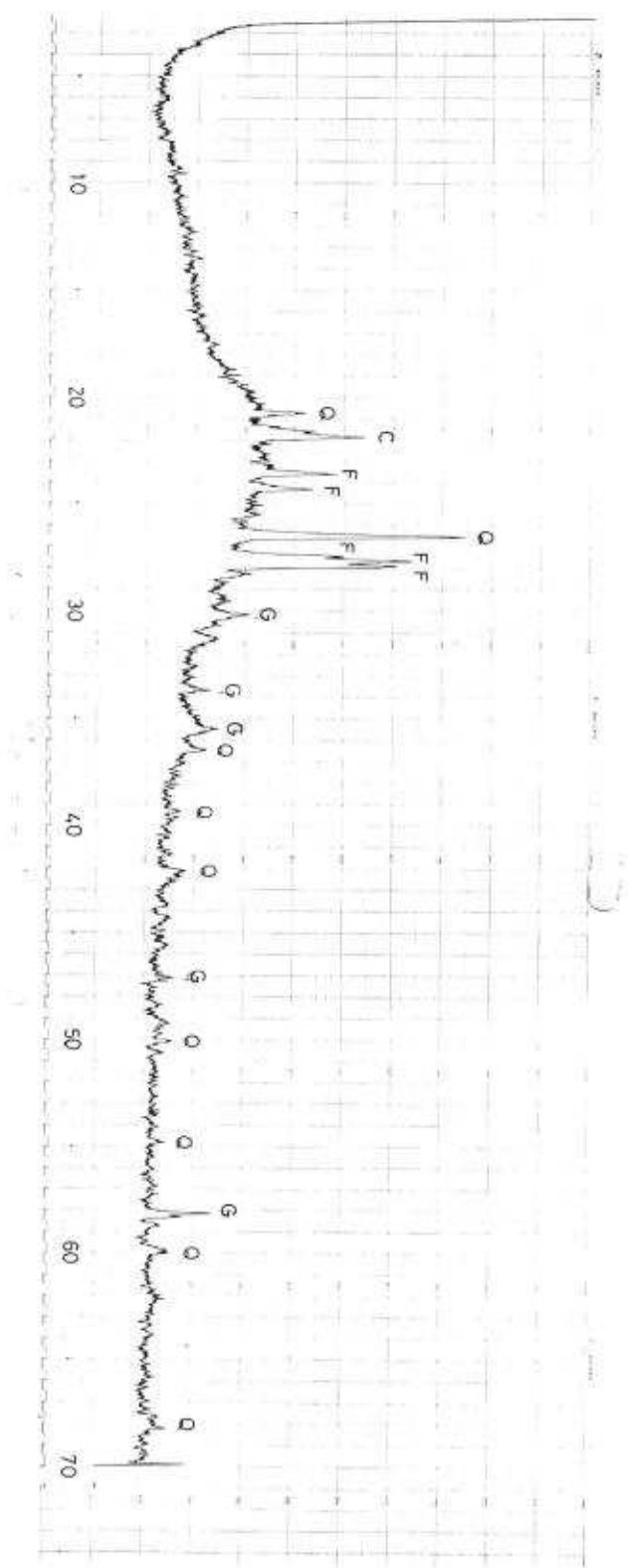
本遺跡を遺構からみると、平面形が長方形プランで、柱穴が壁に片寄り、またかまど位置が壁中央部から、若干ずれる傾向をみせている。のような住居構造は伴出土器と相まって一つの転換期に位置づけられるものと考えられる。伴出土器はロクロ使用の回転系切り非再調整の坏が主体となりそれに酸化炎焼成による坏が共伴している。また降下火山灰の堆積は上層と下層において土器内容の顕著な差異がなく、且つ他の住居跡に降下火山灰の検出事実のないことと照しこれら3住居跡は時間的にそれほど大きな隔りをもたないごく近接した時期に営まれたものであろう。また、相去台地上の大集落は水田農耕と併せ、畑作への指向を促したものに対し、西野遺跡は水田農耕と鉄器生産を軸に台地上集落と深いかかわりをもちながら営まれたものと考えられる。以上から本遺跡は相去遺跡の第二期に比定され、時期的には10世紀後半から11世紀前半に位置づけられるものと考えられる。最後に降下火山灰の化学分析表とX線回折のグラフを末尾に付した。

(第2表) 化学分析結果

(単位：%)

番号	成 分	%	番号	成 分	%
1	H ₂ O ⁻	1.46	8	MhO	0.122
2	H ₂ O ⁺	4.03	9	CaO	3.09
3	SiO ₂	64.86	10	MgO	1.21
4	Fe ₂ O ₃	4.69	11	S	
5	TiO ₂	0.387	12	Na ₂ O	4.49
6	P ₂ O ₅	0.200	13	K ₂ O	1.16
7	Al ₂ O ₃	14.81			

(第3表) X線回折グラフ



- 注1) 岩手県教育委員会 相去遺跡現地説明会資料(昭48)
北上市教育委員会
- 注2) 北上市 北上市史 第1巻
- 注3) 北上市 北上市立博物館 実見
- 注4) 考古風土記 第2号 (昭52)
- 注5) 岩手県教育委員会 東北新幹線発掘調査略報(昭51)
- 注6) 北上市教育委員会 尻引遺跡調査報告書(昭52)
- 注7) 岩手県教育委員会 楯谷地遺跡現地説明会資料(昭50)
- 注8) 岩手県教育委員会 成沢、下成沢遺跡現地説明会資料(昭47)
- 注9) 岩手県工業試験場、成分分析、X線回折(昭54)

参考文献

- | | |
|---------------|----------------------|
| 北上市史 第1巻 | 大船渡市史 第1巻 |
| 岩手史学研究第61号 | 鹿島館遺跡調査報告書(昭50) |
| 考古学雑誌 第57巻第3号 | 考古学ジャーナル 6 156 (昭53) |

北上地区（北部）の概観

1. 北上地区（北部）の地形環境

花巻市内で東より袋ヶ石川、西より瀬川・豊沢川等を合流した北上川が、途中北上市二子町付近で流路を東に変えながら更に南下を続ける。

北上駅以北の東北新幹線は、初め北上川西岸を走るが間もなく二子町地内の昭和橋付近で北上川を渡る。それより新幹線は東岸の平地を北上し、花巻市境の北上山系丘陵地帯へとさしかかる。この区間で新幹線にかかわる遺跡は二子町地内の野田Ⅰ遺跡、野田Ⅱ遺跡、それに更木地内の掘ノ内遺跡の3箇所である。

次にこれら遺跡の位置する二子町及び更木地区を中心に立地形について概観してみたい。北上市北部の地形は北上川を境として大きく東西に二分される。即ち、北上川東岸一帯は北上山地縁辺部にあたり、起伏量100～200m以内の低い山地や丘陵が発達している。これに対し北上川の西側では奥羽山脈東麓一帯に扇状地性の広大な段丘群が発達している。これらの段丘群は主として奥羽山脈を開折して東流する大小河川によって形成されたもので、新田を別にする3つの面区分がなされている。

以上二つの地形域に挟まれて北上川の両岸部には巾1～4km程の河岸低地が発達している。この河岸低地は北上川低地とも呼ばれ、北上市北部地域の二子町より更木地区にかけては特に広大な面積を占めている。ここには自然堤防状の微高地や旧河道と思われる帯状の低地帯が随所に見られる。新幹線にかかわる遺跡はすべてこの自然堤防状の微高地に立地する。

次に新幹線にかかわる遺跡周辺の土地利用を概観すると、この河岸低地の大部分は水田として利用されているが、微高地上には畑地が多い。また宅地も大半は微高地に集中している。

なお、(第Ⅳ図)の地形分類概念図は岩手県企画開発室発行の北上山系開発地域土地分類基本調査「北上」花巻を参照した。

2. 周辺の遺跡

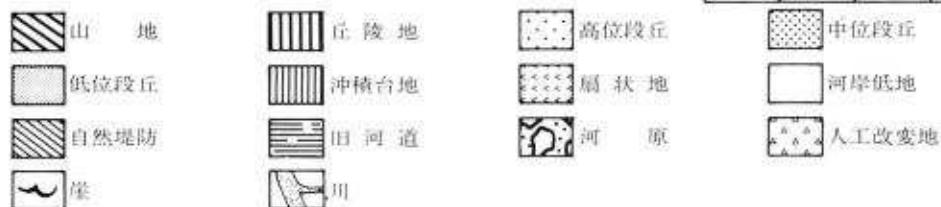
現在北上市で周知の遺跡として登録されているものは250箇所をこえる^(注1)。前述した北上駅以北の二子町、更木両地区の新幹線用地にかかわる3遺跡の周辺にも数多くの遺跡が知られており、なかでも遺跡の集中している所は、北上川の両岸に形成された河岸低地上の自然堤防や微高地、それに北上川東側の丘陵地縁辺部である。

著名な遺跡としては二子地区には二子町の西方北上川西岸の川端・尻引・中村・千苺と続く

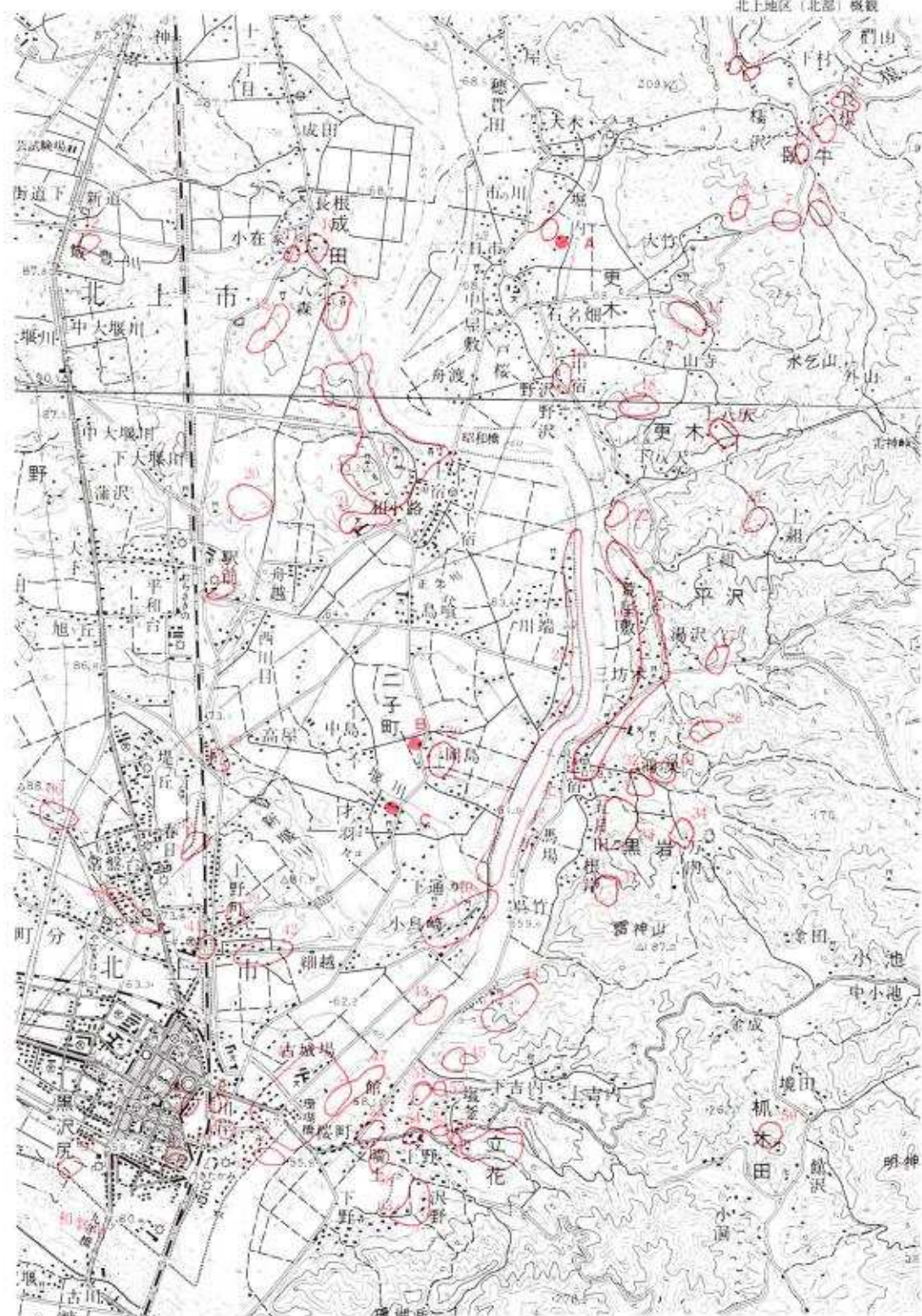


1. 堀ノ内遺跡 2. 野田 II 遺跡 3. 野田 I 遺跡

0 2 km



(第IV图) 北上地区(北部)地形分類概念图



A: 堀ノ内遺跡 B: 野田II遺跡 C: 野田I遺跡

(第V図) 遺跡の位置と周辺の遺跡

注2) 遺跡地帯、その対岸の三坊木遺跡、そして東側丘陵地には平安期の白山廃寺跡がある。また二子町の北西北上川右岸断崖の海拔80mには中世和賀氏の居城である二子城址(注3)があり、これより南方には秋子沢遺跡(注4)がある。

一方、更木地区には縄文中期末から後期にかけての集落址である国指定史跡の八天遺跡(注5)、更には平安期の太竹廃寺跡(注6)が著名である。

(第IV表) 周辺の遺跡地名表

No.	遺跡名称	時期	No.	遺跡名称	時期	No.	遺跡名称	時期
1	平且木遺跡	縄文	22	八天遺跡	縄(中末~後)	43	ホタン畑遺跡	縄文(晩)
2	臥牛遺跡	縄(中後晩)安	23	沢目遺跡		44	岩波遺跡	
3	乱場館遺跡		24	村崎野影東遺跡		45	橋町遺跡	
4	長根遺跡		25	川端・尻引・千代遺跡	縄文(後)弥生・平安	46	方八丁遺跡	
5	横沢遺跡		26	三坊木遺跡	縄文	47	上川岸遺跡	平安
6	坊主遺跡		27	湯沢館遺跡	縄文(中)	48	諏訪神社境内遺跡	平安
7	鷹畑遺跡	縄文(晩)	28	焼行田遺跡	縄文(中)	49	和野遺跡	縄文(中)
8	太竹廃寺遺跡	平安	29	二子一里塚	江戸	50	浮島古墳	
9	藤ノ内遺跡	平安	30	岡島遺跡		51	館井遺跡	縄文(中)
10	下成田遺跡	縄文・平安	31	湯泉遺跡	縄文	52	館田遺跡	縄文(中)
11	成田一里塚	江戸	32	白山廃寺跡	平安	53	立花遺跡	
12	殿勢遺跡		33	元館遺跡	縄文(中)	54	館Ⅳ遺跡	縄文
13	成田・成田宮跡		34	四十九里遺跡	縄文	55	立花小学校下遺跡	縄文(後)
14	八森館		35	下春木場遺跡		56	館Ⅴ遺跡	縄文(後)
15	館山遺跡	縄文	36	藤沢遺跡	縄文・平安	57	高館遺跡	
16	中宿遺跡	縄文	37	根岸遺跡		58	館Ⅰ遺跡	
17	二子城遺跡	中世	38	新盤石遺跡	平安	59	殿森遺跡	平安
18	梅ヶ沢新遺跡		39	黒沢尻町上野町住七遺跡		60	九年館遺跡	縄文(晩)
19	長河遺跡	縄文(晩)	40	晴渡館遺跡		61	清水小路東遺跡	平安
20	伊勢遺跡		41	黒沢尻北高グラウンド遺跡	平安	62	黒沢尻橋跡	
21	秋子沢遺跡	平安	42	梨子山遺跡		63	沢野遺跡	

* 八天遺跡は1977年12月に国指定史跡となった。

- 注1) 岩手県教育委員会「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧」 昭48
 注2) 北上市教育委員会「尻引遺跡調査報告書」 昭52
 注3) 「二子城跡、坊館遺跡調査報告書」 昭52
 注4) 北上市「北上市史」第1巻 昭43
 注6) 北上市「北上市史」第1巻 昭43
 注5) 北上市教育委員会「八天遺跡現地説明会資料」 1975

参考文献

- 岩手県教育委員会 (昭53) 「岩手県古代伝教資料調査」 文化財調査報告書第28集
 岩手県 (1975) 「北上山系開発地域土地分類基本調査「北上」」花巻
 中川久夫・岩井淳一・大池昭二・竹内貞子・小野寺信吾・森田起子・石田琢二 (1963) 「北上川中流沿岸の第四系および地形」 地質学雑誌69巻、812号

野 田 I 遺 跡

遺 跡 記 号：NOD I

所 在 地：北上市二子町43地割他

調 査 期 間：昭和51年 8 月 6 日～ 8 月 28 日

調 査 対 象 面 積：3000 m²

平 面 測 量 基 準 点：東京基点 448.820km (B A 50)

基 準 高：海抜 62.10 m

1. 遺跡の位置と環境（第Ⅳ図P80、第Ⅴ図P81）

野田 I 遺跡は北上市二子町オノ羽場地区内に所在し、国鉄東北線北上駅より直線にして北々東約 3.5km に位置し、県道北上、大堰線沿いにある。遺跡に接して北側を大堰川が東流し、東方約 1 km の地点で北上川と合流する。

本遺跡は北上川に注ぐ大堰川によって形成された東西に広がる自然堤防上に立地しており、遺跡の北側は一段低い水田地帯として広がっている。遺跡の標高は 62.5～62.7 m 程であり、北側水田面との比高はおよそ 3 m を測る。遺跡の地目は一部畑地となっているが、殆どは宅地である。なお本遺跡より北 0.5km の新幹線用地内には野田 II 遺跡がある。

2. 調査の方法と経過（第Ⅰ図）

本遺跡は東北新幹線建設事業にともなって実施した昭和 47 年の路線敷内遺跡分布調査の際には遺物の表採はなかった。しかし終戦直後の昭和 20 年代に実施した大堰川改修工事の際、今回新幹線用地にかかった西約 0.3km の地点より弥生時代の土器片（福浦島下層式）が多量に出土した事実があり、^(註 1) 地形的に遺跡の一部ではないかとの想定のもとに調査を実施する事にした。なお大堰川改修工事の際の土器出土地は野田遺跡として周知登録されている。^(註 2)

調査はグリッド設定にかかわる測量と屋敷林の伐採作業より着手した。グリッド設定にあたっては新幹線の中心杭東京起点 448.800km と 448.820km の二点を結ぶ直線とその延長を遺跡の中心軸に定め、448.820km の地点を遺跡の基準点（B A50）とした。この B A50 を基点にして 1 辺 3 m のグリッドをくみ表土を市松状に除去して遺構の探索につとめた。

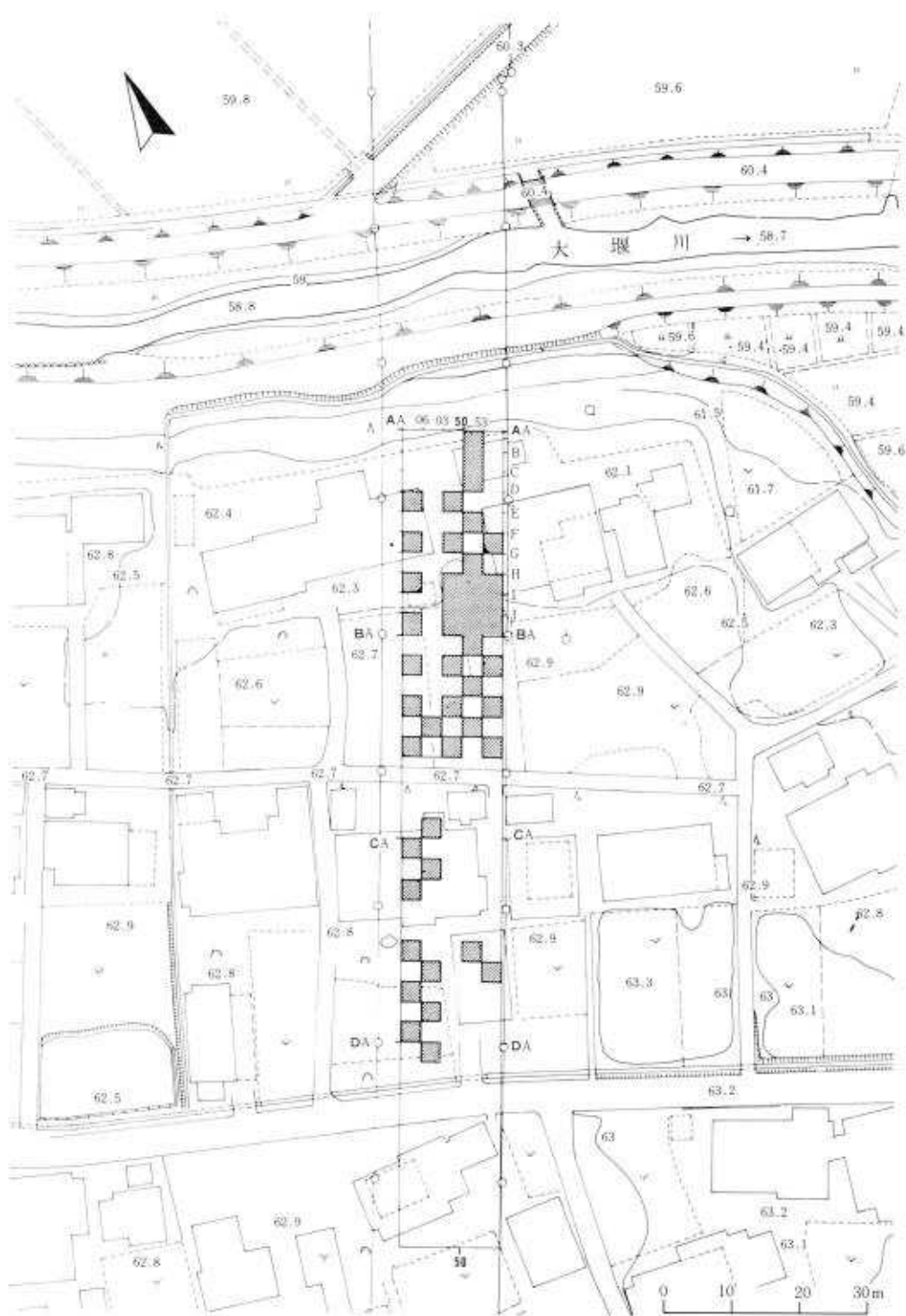
3. 調査の結果

(1) 遺跡の基本層位（第 2 図）

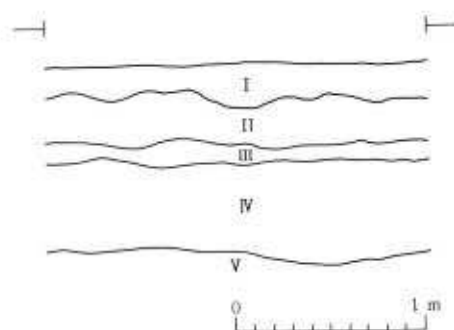
A J50 の深掘りにより層位を記述すると次のようになる。

第 I 層：黒褐色（10Y R 5/6）土で粘土質シルト。層厚は 15～20cm を測り、不断の耕作土である。炭化物、焼土を包含し、草根が多く混入する。

第 II 層：黒褐色（10Y R 5/6）土で粘土質シルト。黒ボクで構成され、I 層よりやや密でしま



(第1図) 野田 I 遺跡グリッド配置図



(第2図) 基本土層図

がある。なお表土下約3 m程で砂礫層となる。

(2) 出土遺物

調査の結果、今回の調査区域からは遺構は全く検出されず、遺物のみの出土に終わった。遺物はその殆どは破片で121片を数えるだけである。縄文時代晩期のものが大半で、土師器は数片を数えるのみである。これらの遺物の大半は第II層中より散発的に出土する。

縄文土器 (第3図)

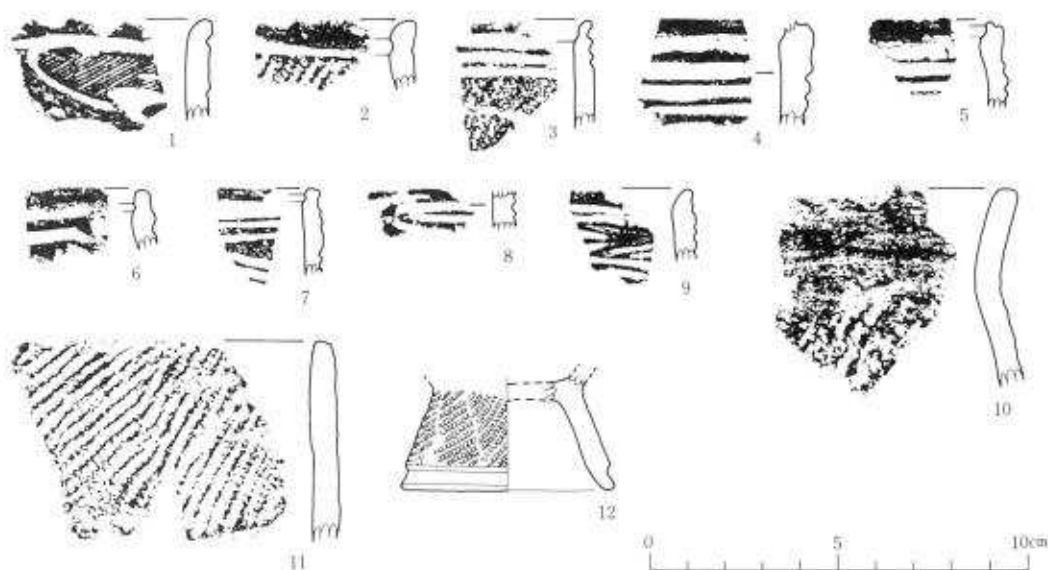
第3図1、2は浅鉢の口縁部片と思われる。1は口縁が小波状をなし、その下方に展開する文様帯には雲形文の上部文様が見られる。地文はRL単節縄文で、非常に細い原体を使用している。2はやはり口縁が小波状をなし、下方の内外面に1本の沈線が描かれている。地文はRLの単節。3は深鉢の口縁部か？口縁下の外面に3本、内面に1本の沈線（浮文化している）が走り、その下方は地文帯となる。地文は磨滅していて不明。4、5は近似した胎土、焼成を示している。暗茶褐色～明黒褐色を呈し、器面はていねいに磨かれている。文様は沈線というよりは完全な浮文で描かれたものである。いずれも浅鉢或は深鉢の口縁部と思われる。5は口縁部が厚く作り出され、内面に1本、口唇部に1本の沈線が見られる。外面の文様は浮文による。6は壺形土器の口縁部である。外面には工文字が見られる。7、8、9の文様はいずれも変形工字文の一部と思われる。4、5、6に比べ施文技法は沈線化している。浅鉢片か？10は粗製深鉢の口縁～体部上半であろう。器形は体部が幾分膨らみ、頭部が「く」の字状に屈曲し、口縁部が外傾するものと思われ、口縁には小突起状のものが作られている。口縁部は無文。体部にはLR単節縄文が粗く回転されている。11はやはり粗製深鉢の口縁部で地文はLR単節縄文である。12は台付土器の台部である。LR単節の細かな縄文が施され、その下は一段下がって無文帯となっている。

りが良い。層厚は20cm程を測り、炭化物、焼土はI層ほどではないが粒子状に包含する。土器片はこの層より散発的に出土する。

第III層：暗褐色（10Y R 3/4）土で粘土質シルト。10cm内外の層厚をもち、よくしまっている。

第IV層：黄褐色（10Y R 5/6）土でシルト質粘土（地山）。

第V層：黄褐色（10Y R 5/6）土でシルト質粘土。IV層よりかなり粘性があり、湧水

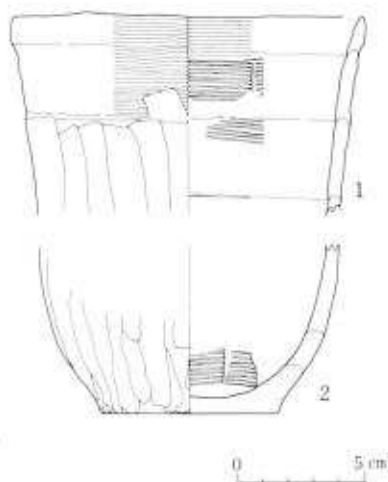


(第3図) 出土土器拓影図

これらの土器片はいずれも細片で器形、文様共に推定できるものはなかったが、一応1、2は縄文時代晩期中葉（大洞C₂期）に、3～6、12を後半の大洞A期にそして7、8、9は末葉の大洞A₁期と考えた。

土師器（第4図）

土師器としては数点の破片を見る。いずれもロクロ未使用の甕片であるが、器形を推定できるものは第4図2点のみであった。1、2ともに白褐色を呈し、胎土中には石英粒など小石を多量に含み、焼成が甘い点は酷似している。1は体部が直線的に外傾している。口縁部と体部は僅かな段によって区切られ、口縁部は横ナデ、体部は縦方向（口縁方向に向けて）のヘラケズリが行なわれている。内面には横方向の刷毛目痕が見られる。鉢形土器、或は甕の破片と考えられる。2は体部から底部にかけての破片で、体部下半に脹らみを持って立つ器形と思われる。外面は縦方向（底部方向に向けて）のヘラケズリ内面には刷毛目痕が見られる。底部外面には木葉痕がある。内面は黒色化していて黒色処理の可能性も考えられたが破片のために詳細は不明である。小形の甕であろうか？



(第4図) 出土土器実測図

1、2ともに器形、調整などの点から、いわゆる国分寺下層期に伴う土器と考えられ、時期的には奈良時代末葉ないしは平安時代初期であろうと思われる。

4. まとめ

調査の結果は遺構の検出には至らず、土器片の採取で終わったが、かつて弥生式土器の出土した西側は現在でも土器片の表採は容易である。

遺物は第1層（表土）、第2層（包含層）から縄文土器、それに土師器の破片が散発的に出土した。縄文土器の大半は晩期のものである。以上今回の調査区域からは遺構の発見はみなかったが、遺物の散布状況、それに地形等から今回の発掘区の西側に集落の存在の可能性は充分にある。

注1) 北上市教育委員会 「北上市の原始、古代の遺跡」 (昭48)

〃 「北上市史」 第1巻 (昭43)

注2) 岩手県教育委員会 「岩手県遺跡地各表」 埋蔵文化財包蔵地一覧 (昭39)

〃 「埋蔵文化財分布地図」 (昭49)

注3) 大塚川改修工事以後周辺よりの出土遺物は地元の平野耕治氏が所有している。(土師器、須恵器が主である)

の だ 野 田 II 遺 跡

遺 跡 記 号：NODII

所 在 地：北上市二子町173地割他

調 査 期 間：昭和50年9月1日～9月19日

調 査 対 象 面 積：1920㎡

平 面 測 量 基 準 点：東京基準点 449.380km (DA50)

基 準 高：海拔 61.00 m

1. 遺跡の位置と環境（第Ⅳ図P80、第Ⅴ図P81）

野田Ⅱ遺跡は北上市二子町岡島地内に所在し、国鉄東北線北上駅より直線にして北々東約4.5kmに位置し、二子町の中心街より県道北上、大迫線を1km程南下した県道の西側に隣接している。

本遺跡は北上川によって形成された北上川河岸低地の中に散在する微高地上に立地しておりここに二子町岡島の部落も位置する。遺跡の地目は畑地と工場跡地となっており、周辺は一面水田地帯となって拡がる。遺跡の標高は61.5m程であり、水田面との比高はおよそ1mを測る。

2. 調査の方法と経過（第Ⅰ図）

本遺跡は東北新幹線工事建設事業に伴って実施した昭和47年の路線敷内の分布調査の際発見されたものであり、土師器の破片の表採をみている。

調査はグリッド設定にかかわる測量と雑物の撤去から着手した。グリッドの設定にあたっては新幹線の中心杭 449.380kmと 449.400kmの二点を結ぶ直線とその延長を遺跡の中心軸に定め 449.380kmの地点を遺跡の基準点（DA50）とした。このDA50を基点にして、1辺3mのグリッドをくみ、市松状に表土を除去して遺構の探索につとめた。

3. 調査の結果

（1）遺跡の基本層位

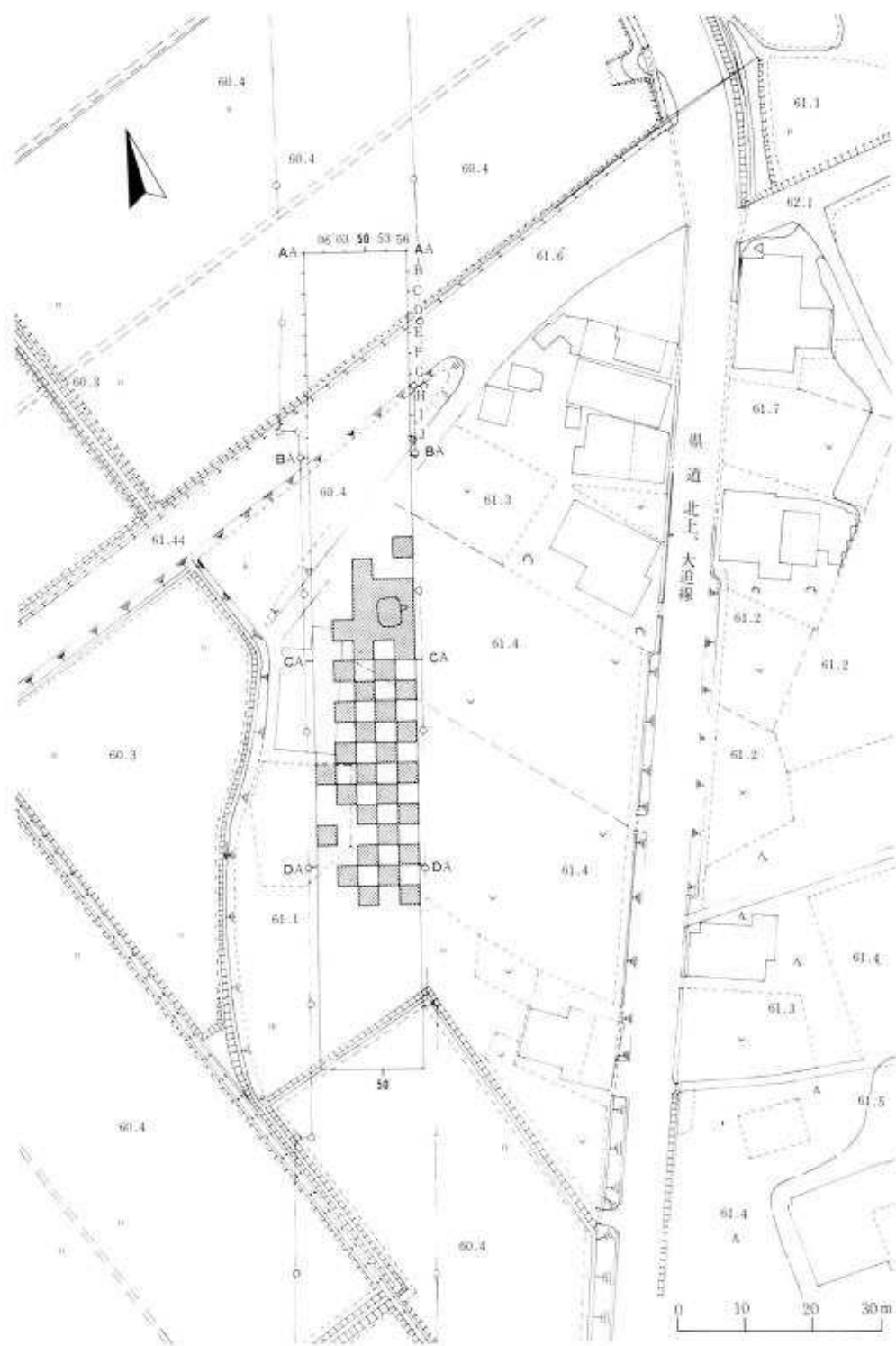
BF03深堀りの東壁により本遺跡の層位を記述すると次のようになる。

第Ⅰa層：黒褐色(7.5YR%)土 20cm程の層厚を測る。常時畑地として利用され木草根、腐食物も多く混入している。

第Ⅰb層：黒褐色(7.5YR%)土 10～15cm程の厚さを測る。Ⅰa層と共にかつて長イモ栽培による攪乱が目立ち、Ⅱ層地山が小ブロック状に混入している。

第Ⅱ層：黄褐色(10YR%)土 礫混りの粗砂を含み、厚さ10～15cmを測る。

第Ⅲ層：砂礫層 国鉄のボーリング結果によれば、この玉石混りの砂礫層は 2.5～3mの厚さを測り、遺跡の南を東流する大取川付近では5m前後と厚くなり、上部に1～2m程の細砂



(第1図) 野田II遺跡グリッド配置図

および砂混り粘土をのせ、大堰川を越えた野田I遺跡ではこの砂礫層は約3mと再び薄くなる。

(2) 発見された遺構と遺物

調査の結果竪穴住居跡1棟を検出した。

B G 50住居跡 (第2図)

〔遺構の確認〕 遺構の検出、確認面は第II層の地山面である。

〔平面形、方向〕 平面形は多少歪んではいるものの隅丸正方形に近い。長軸約4.1m、短軸約4.0mを測る。長軸方向は南北であり、床面積は15.9m程と思われる。

〔壁、床〕 地山を壁としており、残存壁高は5cm～3cm程と遺存状態は極めて悪い。黄褐色の地山面を直接床面としており、貼床、周溝は認められない。

〔柱穴〕 住居内から数個のピットが検出されている。そのうちほぼ対角線上に配置されるピット1、2、3、5の4個が支柱穴と考えられる。

〔カマド〕 東壁中央やや北寄りに煙道を伴って検出された。削平攪乱のため軸はほとんど残存せず燃焼部に50×100cm程の範囲に焼土が認められた。煙道部も遺存状態は悪い。燃焼部より煙道部へは特に段落がなくそのまま移行し、煙出部は若干落ちこんでいる。カマドの軸方向はN-101°-Eである。

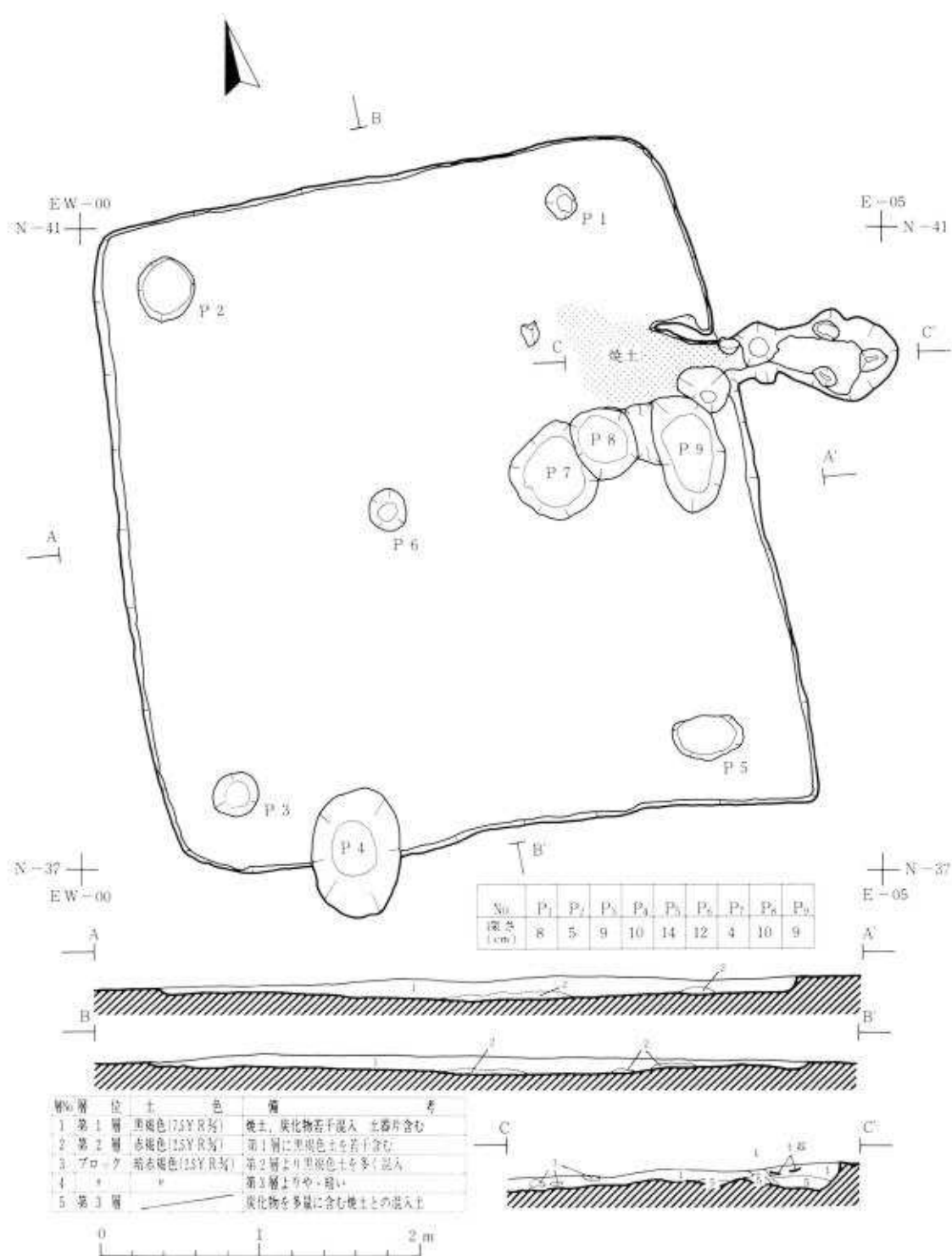
〔出土遺物〕 (第3図) B G 50住居跡からの出土遺物には坏、甕、壺の各器種が見られるが、それらの土器は土師器が主体で須恵器は一片も出土しなかった。以下各器種ごとに記述する。

坏

坏A 酸化炎焼成で内面(または内外両面)にヘラミガキ調整を行い、黒色処理を施したものの、いわゆる土師器の坏である。すべてロクロ使用で、破片を含めて9個体出土している。

〈A₁〉 内外面ともヘラミガキし、内面のみを黒色処理した坏である(第3図1,2)。1は体部に幾分丸味を持って外傾し、口縁部は外反する。内面は細かなヘラミガキを行い黒色処理しているが、外面のミガキ調整は体部上半にとどまり、下半は灰褐色を呈してロクロ痕を残している。外面口縁部付近は黒色を呈しているものの、黒色処理を意図したものとは考えられない。2は胎土に鉄分が多く含有されて器面は濃い茶褐色を呈す。ミガキ調整は内外ともに行なわれている。外面には全く黒色処理の痕跡は見られず無処理の可能性が強い。内面は加熱を受けたものと思われ、黒色処理が部分的に痕跡を残しているだけで、ほとんど消失している。

〈A₂〉 内面のみヘラミガキし、黒色処理した坏である(3,4)。他に破片では6個体出土しているが、いずれも底部は回転糸切り無調整である。3は体部下半に強い脹らみを持って立ち上がり、口縁部で強く外反する。外面には極めてシャープなロクロ痕が残る。内面のミガキは細かくていねいである。



(第2図) B G 50住居跡平断面図

坏B 酸化炎焼成と考えられ、白褐色、灰褐色を呈した軟質の坏をB類に含めた(5~8)。これらの坏はいずれも器面の再調整や黒色処理は全く行なわれていない。図示土器以外には観察不可能な細片が10数片出土しただけである。5は底部に比して口径が大きく、体部立ち上がりから直線的に開く。白褐色を呈し、極めて軟質である。6は体部に強い脹らみをもって外傾し口縁部が外反する。二次加熱を受けている。7は口径に比して底径が小さく体部に丸味をもつ。口縁部は強く外反する。8は赤褐色を呈した坏底部片だが、底部外面の回転糸切り痕の上にへら状工具による菊花状文が見られる。高台付坏の台部を欠失したものと考えられる。

甕

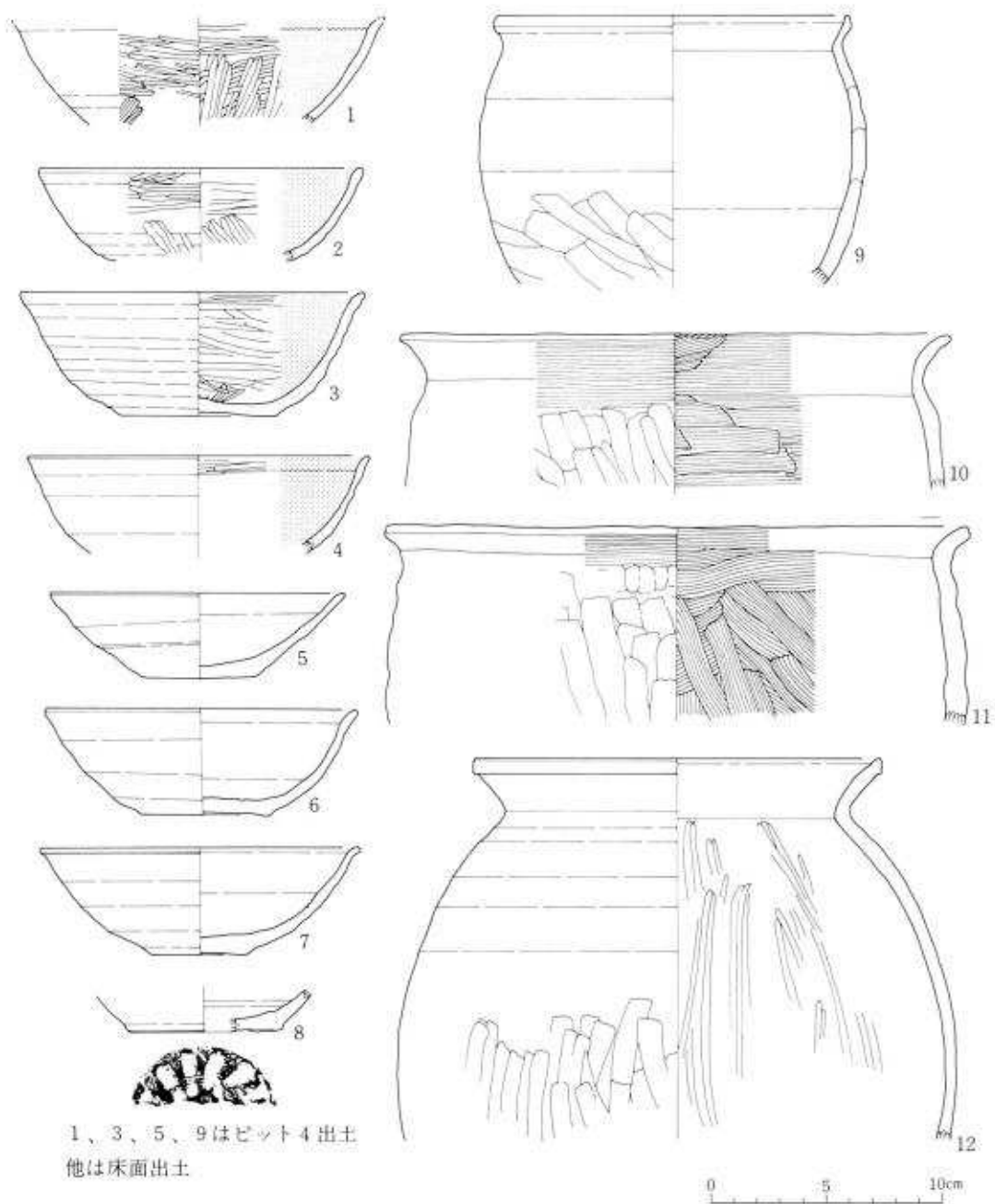
甕にはロクロ使用、不使用のものが見られる。不使用のものをI類、使用のものをII類として記述する。

甕I 破片を含めて5個体確認された。10は頸部で「く」の字状に屈曲して口縁部が薄くなる器形である。外面は縦方向にへラケズリされている。11は口縁部が短かく外反し、口径は厚い。外面はやはり縦方向のへラケズリにより荒く成形されているが頸部の胎土接合部付近は指頭によるオサエの痕が顕著である。内面のへらナデは横、斜、縦方向と不整に行なわれている。口縁部はやはり横ナデされている。他に破片では内面調整に刷毛目を行っているものも出土している。

甕II 9は体部が球形に張り出し頸部がくびれる器形で、鉢、壺などの器種とする見方も考えられたが体部の張り具合から一応小甕とした。巻き上げの後、ロクロナデされ、外面下半のみをへラケズリされている。灰褐色~明赤褐色を呈して焼成は甘い。他に器形を推定復元できる資料はなかったが、口縁~体部の残存した破片では、体部がほぼ直線的に立ち、頸部があまりくびれず口縁部が外傾する器形のものがある。成形のロクロ痕はシャープに入り、外面の一部には刷毛状工具によるロクロナデが見られる。また外面ロクロナデで内面には縦方向の刷毛目調整の見られる体部片も出土されている。

壺

12の1点のみである。暗赤色を呈し、焼成は良好である。体部は球形に脹らみ、頸部がくびれ、口縁部は直線的に外傾して僅かに下方に引き出されている。器面のロクロナデははいて器面がフラットである。外面の体部下半は縦方向のへラケズリ、内面は縦方向のへらミガキに似たへら状工具によるナデを施している。



(第3図) B G 50住居跡出土土器実測図

(第1表) 図示土器観察表

実測図 番号	器種	分類	調 整						器高 (cm)	口 径 (cm)	頸部径 (cm)	体部径 (cm)	底部径 (cm)
			口 縁 部		体 部		底 部						
			外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面					
1	坏	A ₁	横方向ミガキ	横方向ミガキ	横方向ミガキ 下平ロクロナデ	横一縦方向 ミガキ							
2	*	A ₁	*	*	斜一縦方向ミガキ	斜一縦方向 ミガキ							
3	*	A ₂	ロクロナデ	*	ロクロナデ	横一縦方向 ミガキ	器一縦方向 ミガキ	器面調整	器面調整				
4	*	A ₂	*	*	*	ミガキ							
5	*	B	*	ロクロナデ	*	ロクロナデ		器面調整	器面調整	ロクロナデ			
6	*	B	*	*	*	*	*	*	*	*			
7	*	B	*	*	*	*	*	*	*	*			
8	(高台付) 坏	B	*	*	*	*	*	器面調整	器面調整	一帯に灰文			
9	小 鉢		*	*	ロクロナデ 下平ロクロナデ	*							
10	鉢	Ⅱ	横ナデ	横ナデ	縦方向ヤズリ	ヘラナデ							
11	*	Ⅱ	*	*	*	*							
12	赤		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ 下平ロクロナデ	縦方向 細ミガキ							

(数字) は推定値

(第2表) BG50住居跡出土土器破片数

器種	残存部位	調 整			備 考	破片数 (割体数)
		外 面	内 面	底 面		
坏	底 部	ロクロナデ	ヘラミガキ	器面調整	内面黒色処理	2
*	口 縁 部	*	*		*	3
鉢	体 部	縦方向ヤズリ	ヘラナデ		ロクロ不使用	2
*	*	*	朝 毛 目		*	1
*	口縁部~体部	ロクロナデ 部分的にロケム	ロクロナデ		ロクロ使用 スズ多量付着	1
*	体 部	ロクロナデ ロケム	二ツ折ミガキ によるロクロナデ		ロクロ使用	1
*	*	ロクロナデ	朝 毛 目		*	1
*	*	*	カキイ		*	1

*1 図示土器は除く。

*2 観察・分類の不可能な小破片は除外した。

*3 「カキイ」は刷毛状工具によるロクロナデを意味した。

4. 考察とまとめ

今回の調査によって発見された遺構はBG50住居跡1棟に限られた。住居跡は耕作によりかなりの削平を受け、辛うじて壁が残存している状態であった。従って遺物の出土量も決して多くはない。しかし出土遺物については若干の問題点が指摘できる。以下この問題点を整理し、住居跡の年代について一応の検討を試みたい。

器種の組成は坏と鉢が大半を占め、単純な組成を示している。坏は内面黒色処理された土師器の坏A類と酸化炎焼成で黒色処理や器面調整の行なわれていない軟質の坏B類とに土器区分される。A類の坏は器面調整のなされかたで更に2つに大別できる。A₁の坏は外面にもヘラミガキを施しているながら、黒色処理は行なわれていない。調整のなされ方は内面に比べて荒く部分的に行なわれた程度である。この手法については二つの見方が考えられる。一つには前代のロクロ不使用坏の器面調整手法の簡略化された名残りであること。もう一つには内外黒色処理坏の処理簡略化されたものであることである。いずれにしても坏製作手法としては古い手法の名残りと考えられる。また、坏の組成に須恵器を全く共伴せず、土師器のB類のみでなっている点が注目される。B類土器は、多賀城等という須恵系土器とは異なり、北上市相去遺跡という相去B₁類、江釣子村備谷地遺跡の赤焼き土器などと同質のものと考えている。BG50住居跡

での坏の出土比率はA>Bであった。

甕ではロクロ不使用、使用のものが共伴している。ロクロ使用の甕についても刷毛目や、刷毛状工具によるロクロナデの技法を取り入れていることは、甕の製作にロクロ技術が導入されてもなお、ロクロナデのみでは製作し切れなかった段階であることが窺える。

唯一の壺とした第3図12の土器は器形・焼成・調整等の点で異質のものである。酸化炎焼成の土師器としたが、色調は暗赤色を呈し焼成は良好で、他の土師器とは明瞭に異なっている。また内面の器面調整技法は甕等になかった技法である。更に器形は、体部が球形に大きく脹らみ、土師器の器形としては特異な感がある。土器製作時に須恵器の器形を意して製作されたものという推察を行った。

本遺跡は土器組成の中に完全に須恵器を欠いている。須恵器が在地生産され、一般集落において日常の容器として定着してくる時期は地方によって多少の相違があり、またその集落の性格からも異なって来るであろうと考えられるが、少なくとも本住居跡は須恵器が定着する背景を持たなかったという点は指摘できよう。この結果、前述の各土器と時期的に並行する須恵器の実態は捉えることができなかった。

これらのいくつかの点から本遺跡を、土師器にロクロが導入された後、完全には定着化した技術とならなかった時期に想定した。県内でロクロ未使用、使用の土師器を共伴する住居跡の例としては、北上市尻引遺跡6、7号住居跡、同相去遺跡C E 12住居跡、江刺市宮地遺跡などがあげられる。時期的に共伴する須恵器坏が不明のため絶体年代の推定は明確にできなかったが恐らくは尻引6、7住居跡に近く、ロクロ未使用坏が全く共伴しない点からはやや新しい時期を考慮する必要性もあり、9世紀代中葉から後半という位置付けを行った。

以上B C 50住居跡の出土遺物を中心に若干の考察を試みたが、当遺跡は平安期に営まれた小集落である。今回は住居跡1棟の検出にとどまったが、発掘範囲外に同時期の遺構の存在も予想され、地形的には東側にのびていると思われる。しかしこの部分は現在岡島部落の中心地であり、県道が南北に走っていることから、遺跡の保存状態は良好とはいえない。いずれ僅かに残された畑部分の調査で本遺跡の一部分を見ることができただけであった。

参考文献

- 国鉄盛岡工務局「東北新幹線東京起点447K 000m—451K 000m間地質調査報告書」(昭48)
- 伊藤博幸「岩手県の古代土器生産について—須恵器とロクロ土師器の素描」『岩手史学研究』V O 1、61 (昭51)
- 北上市教育委員会「尻引遺跡調査報告書」(昭52)
- 岩手県教育委員会、北上市教育委員会「相去遺跡群」現地説明会資料(昭49)
- 依々間豊「奈良・平安期土器の型式学的分析」『考古学研究』(昭53)
- 高橋信雄「岩手県のロクロ使用土師器について」『考古風土記』第2号(昭52)
- 岩手県教育委員会「東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」(昭52)

堀^(ほり)ノ^の内^{うち}遺跡

遺跡記号：HU

所在地：北上市更木町字更木14-69他

調査注期間：昭和50年7月7日～8月30日

調査対象面積：2400 m²

平面測量基準点：東京基点 453.530 km (CA50)

基準高：海拔 66.80 m

1. 遺跡の位置と環境（第Ⅳ図P80、第Ⅴ図P81）

堀ノ内遺跡は国鉄東北線北上駅より直線にして北々東へ約8kmの北上市更木地内に所在し、北上川低地の微高地上に位置する。

現在北上川は遺跡の西1kmの地点を南流しているが、かつては東側丘陵地西辺を氾濫を繰り返しながら流下し、旧河道の跡が帯状になって遺跡周辺にみられる。堀ノ内遺跡はこの北上川低地の旧河道によって形成された微高地上に立地する。

遺跡の地目はそのほとんどが宅地と屋敷林であり、一部畑地となっている。周辺は水田として利用されているが、旧河道跡は一段低い湿田地帯となっている。遺跡の標高は66.6～66.8m程であり、水田面との比高は約1.2mを測る。

2. 調査の方法と経過（第1図）

本遺跡は東北新幹線工事建設事業に伴って実施した昭和47年の路線敷内の遺跡分布調査の際確認されたものである。

調査はグリッド設定にかかわる測量より着手した。グリッドの設定にあたっては新幹線の中心杭東京基点453.340kmと453.680kmの二点を結ぶ直線とその延長を遺跡の中心軸に定め453.530kmの地点を遺跡の基準点（CA50）とした。このCA50を基点として1辺3mのグリッドをくみ市松状に表土を除去して遺構の探索につとめた。

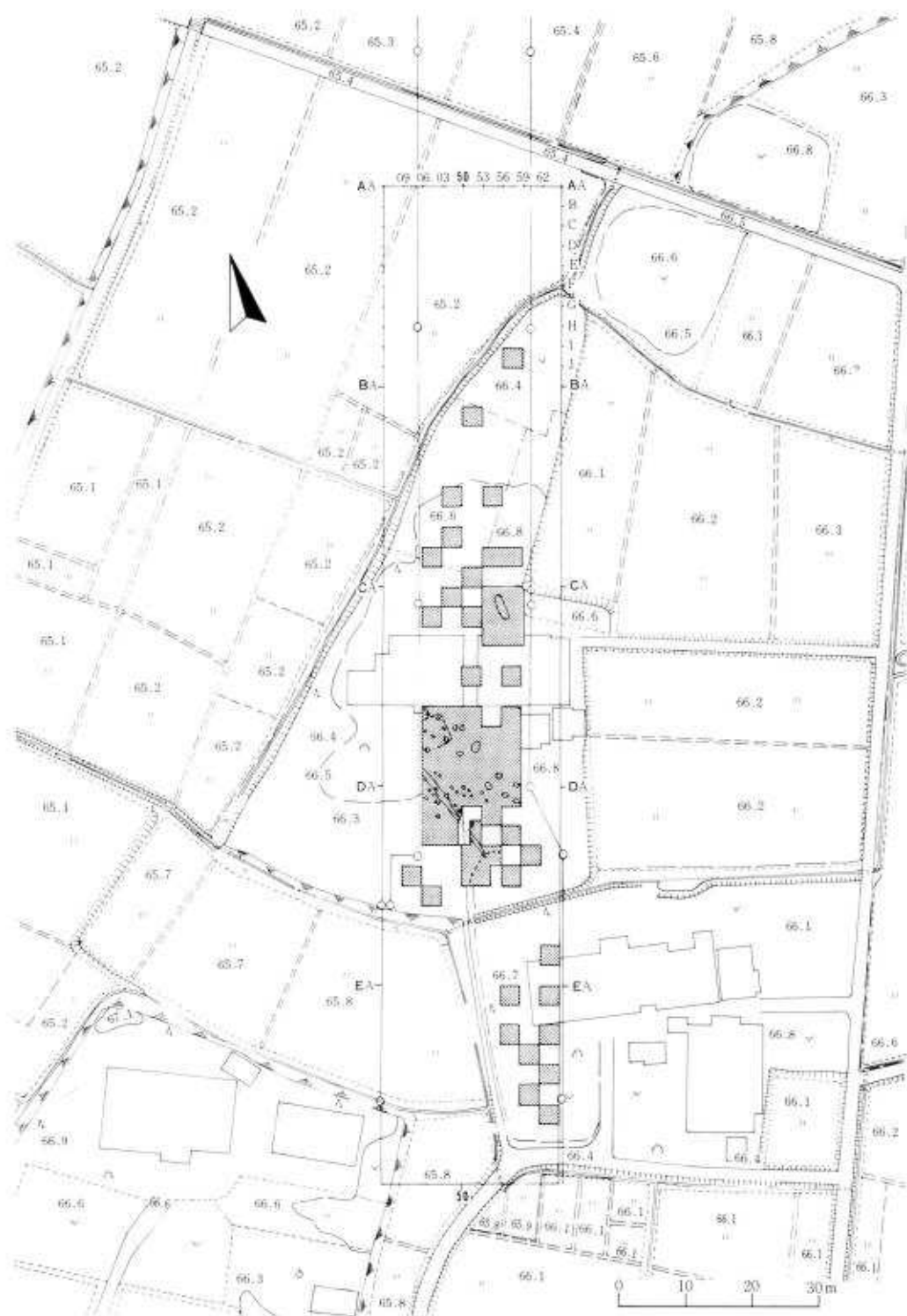
3. 調査の結果

〔1〕遺跡の基本層位

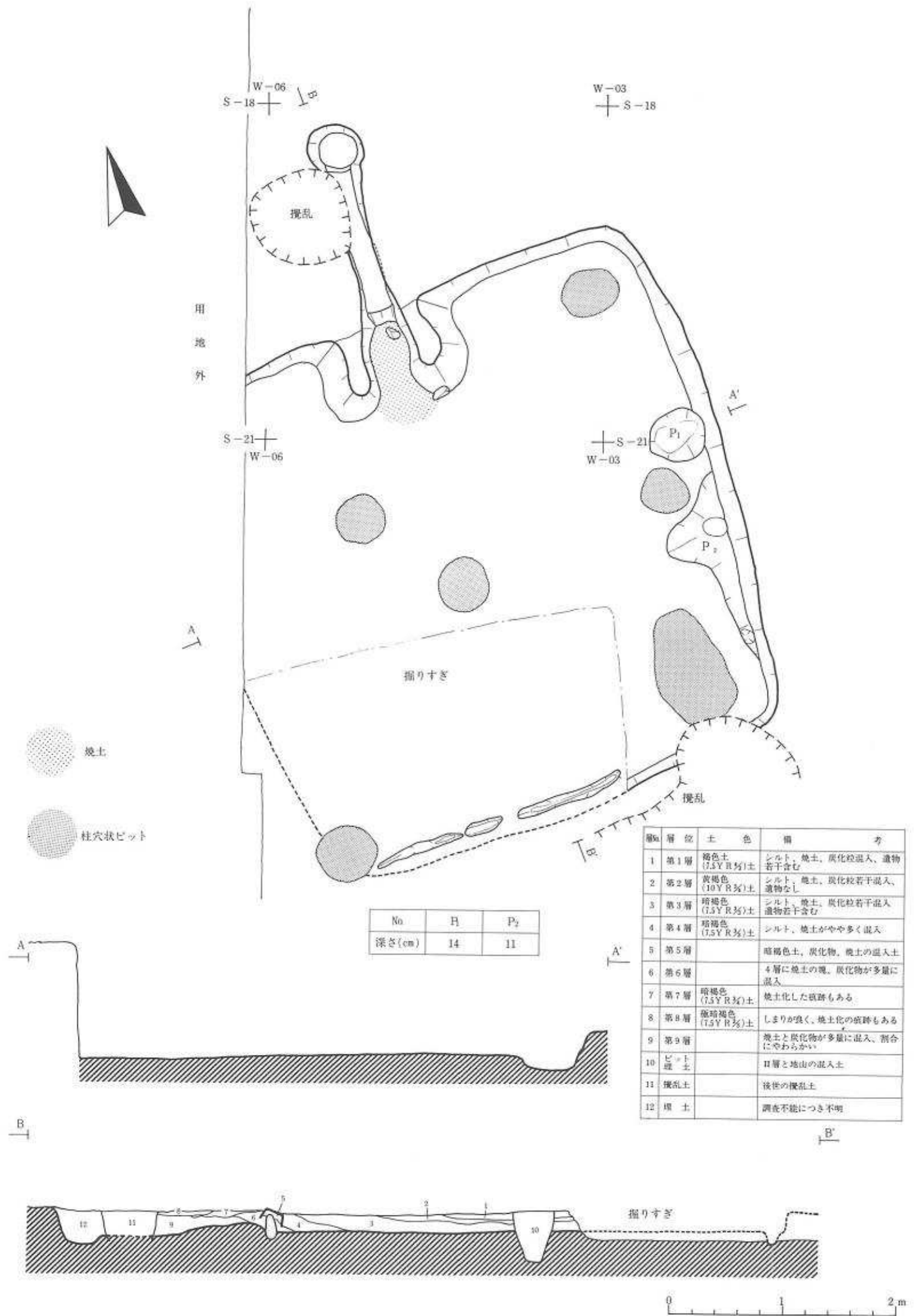
本遺跡はそのほとんどが宅地及び付帯施設のため盛土や攪乱が激しく、その深さは約40～50cmを測る。従って標準的層位の把握は困難であるが、国鉄のボーリング結果も併せて層位をみると以下のようなになる。

第Ⅰ層：表土にあたり、礫混入の攪乱土で40～50cmの深さを測る。なお、AブロックからBブロックにかけての畑地部分は暗褐色土の盛土である。

第Ⅱ層：黒褐色(7.5Y R $\frac{3}{2}$)土で、粘土質シルト。層厚は約20cmを測り、炭化物、焼土の混入



(第1図) 堀ノ内遺跡グリッド配置図



(第2図) C G06住居跡平断面図

もみられる。本遺跡の遺物包含層である。

第Ⅲ層：黄褐色（10Y R 5/）土で粘土質シルト（地山）。Ⅱ層に比較して粘性がある。なお国鉄のボーリング結果によれば現地表土 1.5～2 m 程で砂礫層となる。

〔2〕発見された遺構と遺物

調査の結果、竪穴住居跡1棟、土壇2基、溝1本、焼土ピット8基、それに大小の柱穴状ピット32個を検出した。

（1）竪穴住居跡（第2図）

CG06住居跡

西側一部が用地外にあり、煙道の一部がコンクリートの下にもぐっているため完掘することはできなかった。

〔遺構の確認〕遺構の検出確認面は第Ⅲ層の地山面である。

〔重複〕8個のピットがみられるがP₁とP₂以外は住居跡と重複関係にあり、住居跡より新しい。

〔平面形〕西側の一部が用地外にかかり全貌を明らかにできなかったが、1辺4.5m程の正方形に近い。床面積は18.4m²程と推定される。

〔壁・床〕地山を壁としており、残存壁高は20～25cmを測る。黄褐色の地山面を直接床面としており、貼床は認められない。住居跡の南壁に沿って巾8cm内外、深さ5～8cm程の溝が走る。

〔柱穴〕住居跡にともなうピットは2個であるが柱穴ではない。精査を加えたが柱穴は検出できなかった。

〔カマド〕北壁中央に煙道を伴って検出された。煙道の一部は攪乱を受け、また煙出し部は建物の基礎コンクリートの下にもぐっており、セクション等の計測は不能であった。

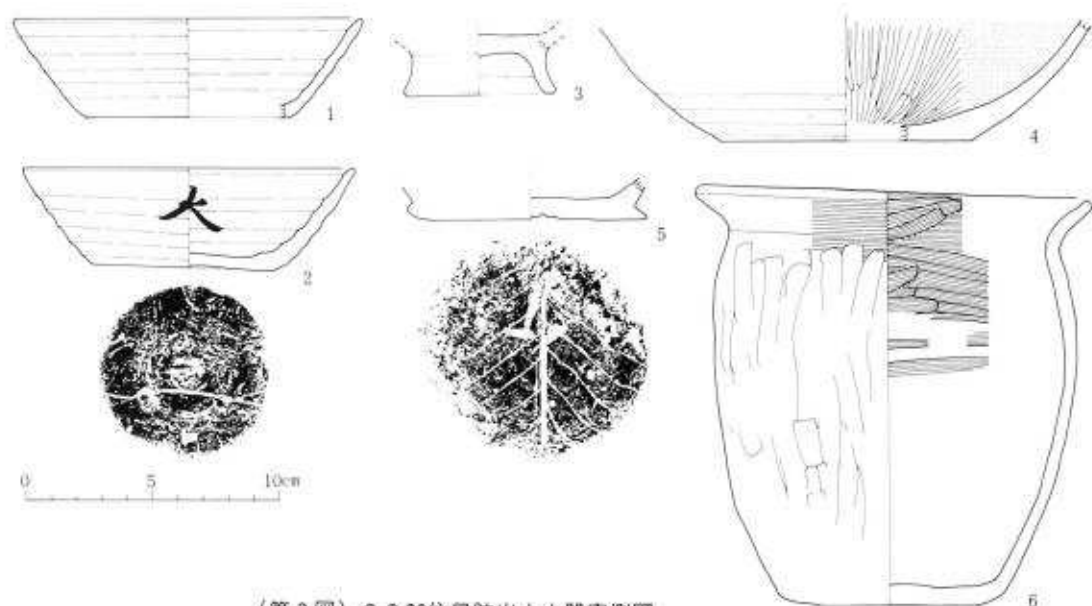
袖は粘土質のシルトを固めて構築し、燃焼部には約40×100 cmの範囲の焼面が検出された。焼面は赤褐色を呈しレンガ状に焼土化しており、奥には支脚として使用された石が埋めこまれていた。燃焼部より煙道部へはゆるやかな上向きの傾斜となって移行し、煙道は煙出し部へ向け若干の下向がみられる。煙出し部は煙道底面より5cm程低いピットが掘りこまれていた。カマドの軸方向はN-3°Wである。

〔出土遺物〕（第3図）

住居跡に伴う遺物の出土量は比較的少なく、完形品は須恵器の坏が一点だけであった。第3図はカマド付近を中心に床面から出土した土器であるが、他には破片が2表の様に出土している。

3図1・2は須恵器の坏で、共に比較的底部が大きく、底部から口縁部にかけて直線的に外

堀ノ内遺跡



(第3図) C G 06住居跡出土土器実測図

(第1表) C G 06住居跡図示遺物観察表

実測番号	写真番号	出土地点	七郡区分	器種	器 型						容高 (cm)	口縁部 径(cm)	皿底 径(cm)	体部 径(cm)	底面径 (cm)	脚部 径(cm)
					口 縁 部		体 部		底 部							
					外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面						
1	109(5-1)	床 面	信忠器	鉢	コクロナデ	コクロナデ	コクロナデ	コクロナデ								
2		ヤマト 信 瓦	*	信忠器	*	*	*	*	同転へラズリ 無調整	コクロナデ						7.3
3		床 面	土師器	高台付鉢					コクロナデ	ミガキ						6.0
4		床 面	*	鉢			コクロナデ 下底へラズリ	ミガキ	同転へ ラズリ	ミガキ						10.0
5		ヤマト 信 瓦	*	鉢					本製無調整							9.4
6	3-2	床 面	*	*	横ナデ	横ナデ	縦方向ケズリ	へラナデ		へラナデ						9.0

(数字) は推定値を示す

(第2表) C G 06住居跡出土土器破片数

出土層位	土器区分	器 種	残存部位	外 面	内内 面	底 面	備 考	破片数 (個体数)
埋 土	土師器	鉢	体 部	ミガキ	ミガキ		内外面 黒色処理	1
	"	"	底 部		"		外面 同転へラズリ	1
	"	"	"		"		同転系同り 無調整	2
	"	"	口縁-体部	コクロナデ	"			3
	信忠器	"	"	コクロナデ	コクロナデ			4
	土師器	高台付鉢	鉢 底 部	コクロナデ	ミガキ			1
	"	横	面-体部	ケズリ	ナデの上刷毛目		コクロナ不使用	2
	"	"	口 縁 部	コクロナデ	コクロナデ		コクロナ使用	2
床 面	土師器	鉢	底 部				同転へラズリ 調整	1
	"	"	口縁-体部	コクロナデ	ミガキ			1

注1) 図示土器は除く
注2) 観察・分析不可能な
小破片は除外した

傾する。1は底部欠損、2は底部回転ヘラ切り無調整である。1、2とも灰白色を呈し、焼成はやや甘い。2の体部上半には「大」字の墨書が見られる。床面からはこの他、内面黒色処理された土師器の坏破片が2点出土しているが、そのうち1点は底部外面に回転ヘラケズリ調整を施したものである。3は内黒処理された土師器の高台付坏である。3は体部下半から底部にかけての破片だが、底径が大きく体部下半に丸みを持って大きく開く所から、鉢型（浅鉢？）土器であろうと考えた。内面は細かなヘラミガキを行ない、黒色処理を施している。外面は体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリ調整している。5、6は土師器の甕で、いずれもロクロ不使用のものである。5は木葉痕の残る底部片。6は小形の甕である。体部が脹らみ、頸部で「く」の字状に屈曲し直線的に口縁に到る。口縁部は厚い。最大径は口縁部にある。体部外面は縦方向の浅いケズリ、内面はヘラナデ、口縁部は内外面とも横ナデがされている。白褐色～明赤褐色を呈し、焼成は甘い。器面はかなり磨滅している。

（2）土壌

CB53土壌（第4図）

CB53グリッドからCC56グリッドにかけて検出された。掘り込み面は第II層であるが、第III層上面でプランを確認した。平面形は長楕円形で、規模は長軸3.7m、短軸1.2mを測り、長軸方向はN-4°35'-Wである。深さは検出面より25～30cmを測る。底面は南より北側に向けてやや深く傾斜し、北東隅が東壁に沿った形でさらに一段深掘りされていた。深掘り部分は南北に長い不整形の土壌となっていて、規模は長さ2m、幅40cm、検出面からの深さ50～80cmと底面は北側に向けて傾斜している。

堆積土は2層に大別される。下層（深掘り部分の埋土にあたる2a、2b層）は一括した堆積状態を示しており、人為的埋土と考えられる。遺物は埋土1層よりの出土が多く、特に1層下部では多数の坏が上向きに並べられた状態で出土した。下層の2a、2bにおいては数片の破片を数えるのみである。

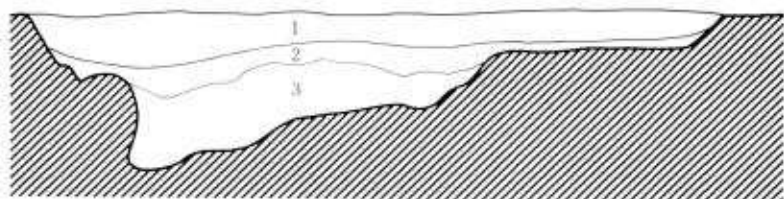
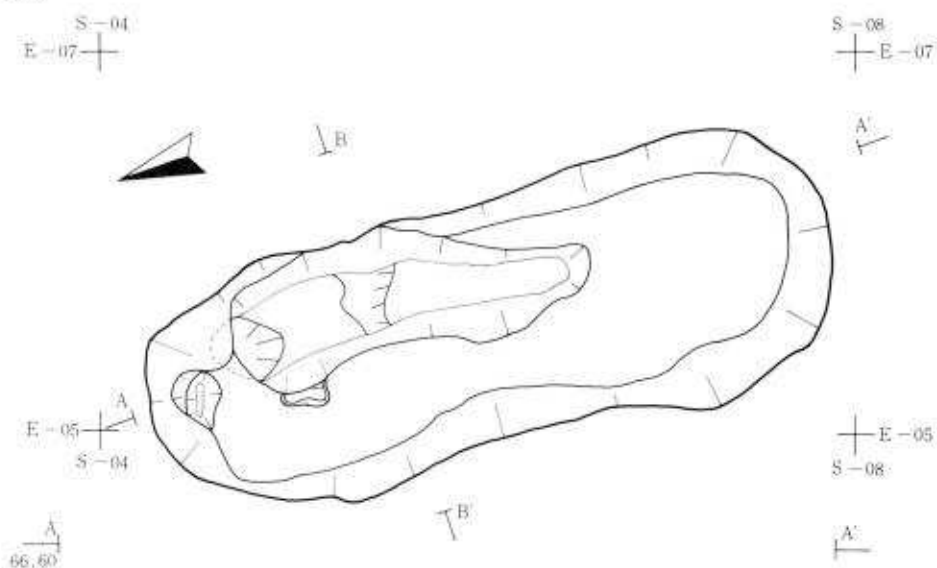
〔出土遺物〕（第5・6図）

土師器

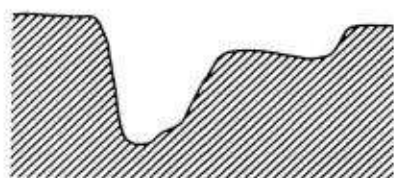
Ⅲ 口縁部片が1片出土。体部から口縁部にかけての外傾度から皿と考えた。内面はヘラミガキされ、黒色処理を施している。

坏 すべてロクロ使用の坏である。5図1はロクロから切り離した後、底部から体部にかけて手持ちヘラケズリを施している。切り離し手法は不明。底部からの立ち上がりやや丸みを持ち、体部はほぼ直線的に外傾する。口径に比して器高が比較的高い。内面はでいねいなヘラミガキを施し、黒色処理されている。2は体部から底部にかけての破片だが、体部下端と底部にかけて回転ヘラケズリ調整され、ロクロ切り離し手法は不明。内面は放射状のミガキを行ない黒色

堀ノ内遺跡



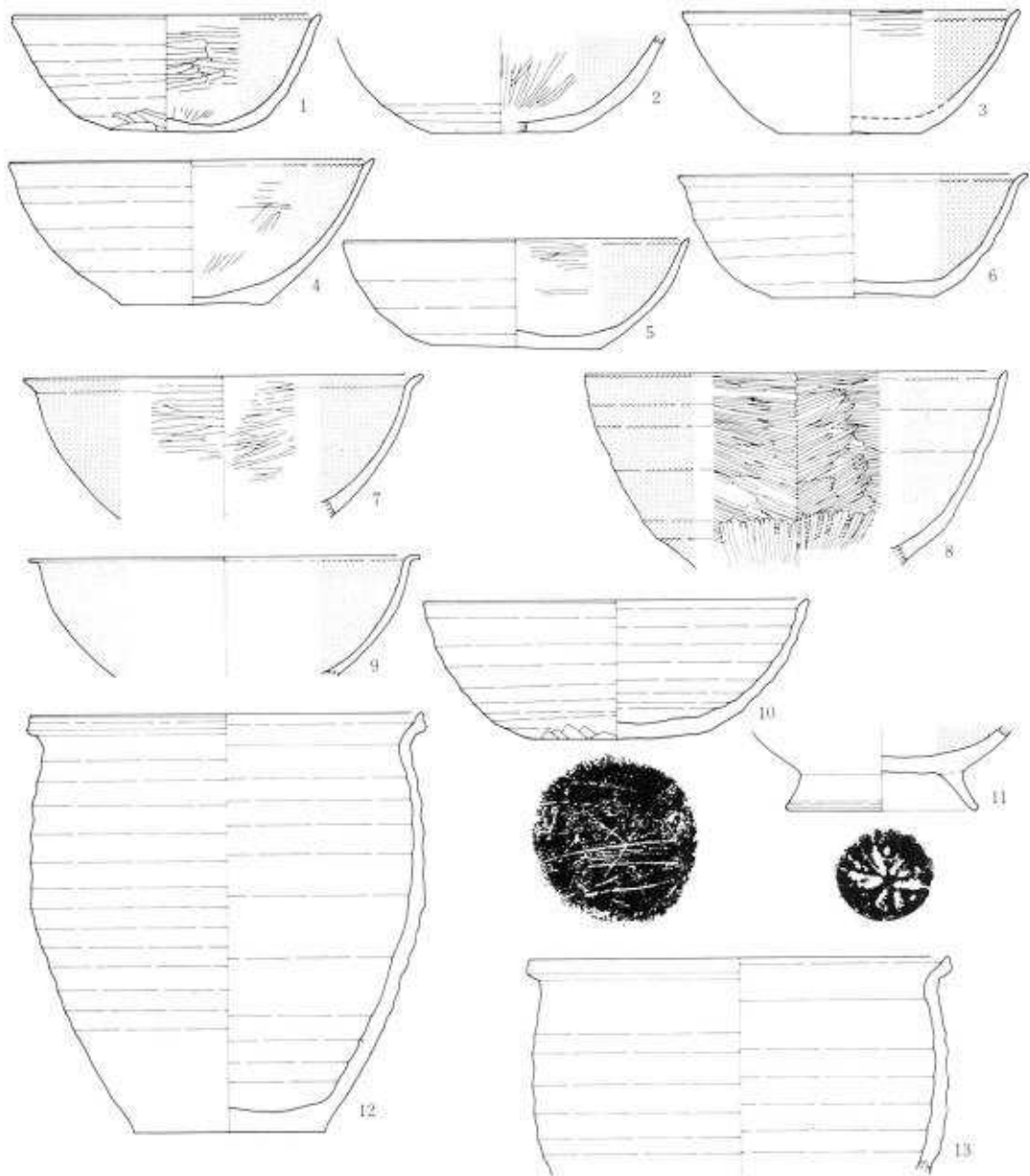
層No	層位	土色	備考
1	第1層	黒褐色 (7.5Y R 為)土	炭化物、焼土の粒子を混入、しまりがよい。土器片多数出土。
2	第2a層		黒褐色土と黄褐色土(地山)との混入土。土面より土器片多数出土。
3	第2b層		No.2よりは黄褐色土の混入割合が多い。土器片ほとんど出土しない。



(第4図) C B 53土壌断面図

処理されている。3～6は底部回転糸切り無調整、内面はヘラミガキを行ない黒色処理を施した坯類である。いずれも磨滅または器面の剥落が著しく、ミガキ痕はほとんど不明瞭。7、9は内外両面に黒色処理された坯である。器形は体部上半に丸味を持って外傾し、口縁部が強く外反又は屈曲する。底部は欠損して不明。7は内外ともに細かなヘラミガキが施されている。9は器面が磨滅しミガキ痕が明瞭ではない。

堀 8はロクロ使用、内外両面に黒色処理が行なわれている。口径 ϕ (推定)器高が2.0内

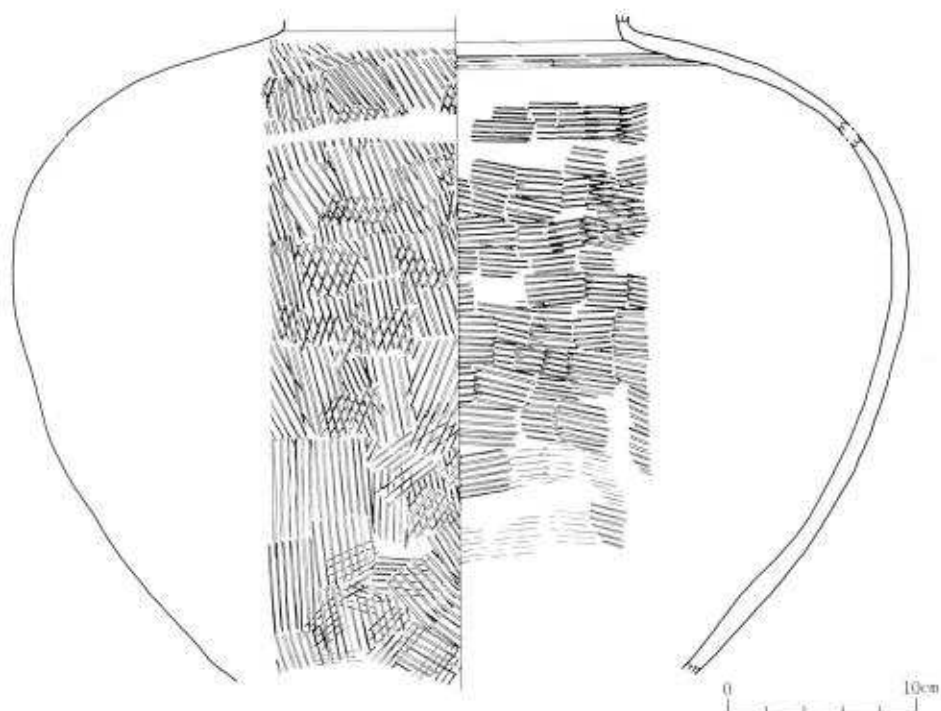


(第5図) C B 53土壌出土土器実測図

0 5 10cm

外と器高が高く大形で、器厚は薄手である。器形はやや丸味を持って外傾するもので口縁部は薄い。内外ともに細かなヘラミガキがなされ、作りは精巧である。

高台付杯 杯部底部から脚部にかけての破片が2点出土。11は杯内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部にはヘラ状工具による菊花状文が見られる。



(第6図) C B 53土壌出土土器実測図

甕 破片を含めて7個体出土した。成形にロクロを使用したもの、使用しないものが見られるが、不使用の甕は体部片が1個体見られただけで、ロクロ使用甕が圧倒的である。

12は比較的小形の甕で、成形にロクロ使用、底部回転糸切りである。体部が丸く張り出し、短い口頸部が付く。口縁部は外反し、上方につまみだされている。最大頸部は口縁部にある。13もほぼ同様の口縁部～体部上半の破片である。他に小破片ではロクロ使用内面黒色処理の甕片が見られた。

須恵器

坏 10は完形品で出土した。灰白～灰褐色を帯び、やや焼成は甘い。全体に脹らみを持って外傾する。ロクロ切り離し後、底部と体部下端を荒く手持ちへラケズリしたもの。

壺 壺は破片のみ6個体出土した。部分的にも形状を推定できるものは、図14のみである。全体をロクロナデまたは刷毛状工具によって調整した壺と14に見られる様に叩きしめて成形した大形の広口、短頸壺とがある。

6図は体部上半と下半との破片からの図上復元で、器形の推定には幾分無理があるが、胴部径 \geq 胴高の大形壺で、肩が強く張りだすものである。頸部は比較的すぼむ。外面には平行叩きが重複して行なわれ、内面は平行沈線のあて工具痕がみられる。内面の底部付近は浅いナデツケ

(第3表) C B 53土壌図示遺物観察表

発掘区 番号	万巻 番号	出土 層別	土器 区分	器種	遺物						数量	口縁部 径=	底部 径=	体部 径=	底面厚 =	脚部 径=
					口縁部		体部		底面							
					外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面						
1	図紙 B-3	1層 下部	1002	杯	ロクロナデ	横方向ニケズリ	ロクロナデ 下部ヘラケズリ	横方向ニケズリ	横方向ニケズリ	手持ち ヘラケズリ	放射状ニケズリ	3.9	22.8		3.9	
2		1層 上部	0	杯					放射状ニケズリ	放射 ヘラケズリ					15.0	
3	5-4	0	0	0	ロクロナデ	横方向ニケズリ	ロクロナデ	ニケズリ	放射状 無調整	ニケズリ		5.1	14.4		5.8	
4	5-5	0	0	0	0	0	0	横一方向 ニケズリ	0	放射状ニケズリ		6	15.2		6	
5	5-9	0	0	0	0	0	0	横方向ニケズリ	0	ニケズリ		4.5	14.4		7	
6	5-7	0	0	0	0	0	0	ニケズリ	0	ニケズリ		5.1	14.6		6.9	
7	5-8	0	0	0	横方向ニケズリ	横方向ニケズリ	横方向ニケズリ	横一方向 ニケズリ								
8		0	0	0	0	0	横一方向 ニケズリ	0	放射状ニケズリ	放射状ニケズリ	3.5×6	17.4				
9		0	0	0	ニケズリ	ニケズリ	ニケズリ	ニケズリ								
10	5-9	1層 下部	1002	杯	ロクロナデ	横方向ニケズリ	ロクロナデ 下部ヘラケズリ	ロクロナデ	手持ち ヘラケズリ	ロクロナデ		5.8	16		7	
11		0	1002	高台付 杯					放射状	ニケズリ					6.8	17.8
12		1層 上部	0	0	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		ロクロナデ		17.4	16.2	15.8	8	8
13		1層 下部	0	0	0	0	0	0	放射状 無調整			17.8	16.4		17.4	
数140		1層 上部	1002	0			平行叩き	平行沈線あ て1尺							16.5	17.2

(数字)は推定値を示す

(第4表) C B 53土壌出土土器破片数

出土層別	土器区分	器種	残存部位	外 面	内 面	底 面	備 考	破片数 (個体数)
1層上部	土器器	杯	底 部	ロクロナデ	0	回転未切り 無調整	磨滅のため ミガキ不使用	3
	須恵器	0	体部-底部	0	ロクロナデ	0		2
1層	土器器	皿	口縁部	0	ニケズリ			1
	0	杯	底 部	下縁手持ち ヘラケズリ	0	手持ち ヘラケズリ		1
	0	0	0	0	0	0		1
	0	0	0	ロクロナデ	0	回転未切り 無調整		2
	0	0	口縁-底部	0	0			13
	赤 塗 漆	杯	口縁部	0	ロクロナデ			4
	土器器	高台付杯	底部-脚部	0	0	ヘラ痕あり		1
	0	0	脚 部	0	0			1
	0	0	體部-底部	ケズリ	細毛目		ロクロ不使用	1
	0	0	底部-体部	ロクロナデ	ニケズリ		内面黒色処理	1
	0	0	口縁部	0	ロクロナデ			3
	0	0	体 部	ロクロナデ →ケズリ	0			1
	0	0	0	0	0	ケキメ		1
	須恵器	壺	頸 部	叩き →ロクロナデ	ロクロナデ			1
	0	0	体 部	ロクロナデ →ケズリ	0			1
	0	0	0	上縁 ケキメ 下縁 ケズリ	ロクロナデ 部分的ケキメ			1
	0	0	体部下端- 底部	下縁粗方向 ナデ	ケズリ→ナデ			1
0	大形壺	0	平行叩き	平行沈線あ て工具			1	
2層	土器器	杯	口縁-体部	ロクロナデ	ニケズリ			2
2層	土器器	壺	口縁部	0	ロクロナデ			1

注1) 図示土器除く
 注2) 観察・分析不可能な
 小破片は除外した。
 注3) ケキメは刷毛状工具
 によるロクロナデを
 意図した。

がなされている。

この他、図示土器以外の破片については4表に観察表を提示した。坏で赤焼き土器としたものは白褐色または明澄色を呈した軟質の坏で、内黒処理、器面の再調整の行なっていないものを総称したが、出土数が少なく小破片のため実体はつかめなかった。C B 53土壌の出土土器は総じて器面の磨滅や破損が著しい点が目につく。

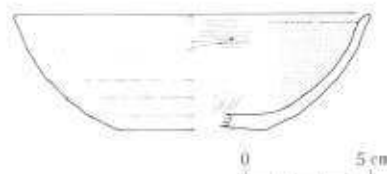
C H 50土壌 (第9図)

第Ⅲ層上面で検出された。長軸約2.5m、短軸1.5mを測り、平面形はほぼ楕円形を呈する。長軸方向はN-59-Eである。深さは検出面より60cm内外を測り、断面形からみると壁はゆるやかに下向き、底面は多少の凹凸はあるものの舟底形を呈し、北西の壁はゆるやかな段をもって立ち上がる。

堆積土は下層の4、5、6層は自然堆積の状態を示すが、1、2、3層は異なる。遺物は1、2、3層より焼土、炭化物と混入して出土する。

〔出土遺物〕(第7図) 7図は土師器の杯である。白褐色を呈し、焼成は甘い。体部に丸みを持って外傾し、口縁は短かく外反、丸くおさまる。底部外面は回転糸切り無調整。内面はヘラミガキし黒色処理されているが器面が磨滅し痕跡は明瞭でない。

他には須恵器壺片が出土しただけである。



(第7図) C H 50土壌出土遺物

(3) 溝

B J 06溝 (第11・12図)

検出確認面は第Ⅲ層上面である。全掘していないため全体の規模は不明である。C G 06住居跡の南を一部柱穴状ピットと重複しながら、北西から南東方向に走り、B J 06グリッドより先は用地外に伸び、D D 50グリッドでは攪乱のため破壊されている。

溝の上巾は70~90cm前後で検出面よりの深さは20~25cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がり、床面は若干の凹凸があるもののほぼ平坦である。埋土は自然堆積状態を示す。埋土中から若干の土器片が出土した。

(4) 焼土ピット (第8・10図)

8基の焼土ピットが検出されたが、いずれも第Ⅲ層上面が遺構確認面となっている。

C H 031ピット

平面形は不整形卵形を呈し一方は細くなっている。長軸約80cm、深さ10~15cmを測る。長軸方向はN-43-Eである。埋土は焼土、炭化物含みの暗褐色土で固くしまっている。底面はほぼ

平坦でかなりの焼土と木炭片がみられ、特に周辺には多量の木片が認められる。中央部はかなりの高熱を受けたらしくレンガ状に固く焼土化していた。

遺物の出土はない。なお周囲に5個の小ピット（径5～7cm、深さ10cm内外）が検出されたが、焼土ピットに付随するものかどうか不明である。

CH032ピット

CH031ピットの東に接して検出されたもので、ほぼ卵形の平面形を呈し、長軸100cm程で軸方向はN-28°-Eである。検出面からの深さは15～20cmを測り、断面形でみると巾の広い方の壁は比較的ゆるやかに傾斜し底面は巾の細い方に除々に深くなり壁を切りこんだかたちで立ち上がる。

埋土はCH031焼土ピットと同様。底面には4個の石が密着して検出され、いずれも熱を受けた痕跡が認められた。遺物の出土は皆無。

CH031ピット

CH50土壌の西に接して検出されたもので、不整卵形の平面形を呈する。長軸100cm程で軸方向はN-74°-Wである。深さは15cm程を測り、断面形でみると巾の広い方の壁はゆるやかに傾斜し底面はほぼ平坦、巾の狭い方の壁は切りこんだかたちで鋭角的に立ち上がる。

埋土、底面の状態はCH031焼土ピットと同様である。遺物は埋土の上部より土師器の細片が1片出土した。

CJ531ピット

平面形は卵形を呈し長軸は100cmを測る。軸方向はN-56°-Wである。深さは15cm内外を測り断面形でみると巾の広い方の壁は比較的ゆるやかに傾斜し、せまい方は壁を切り込んで鋭角的に立ち上がる。埋土、その他はCH031ピットと同様である。

CJ532ピット

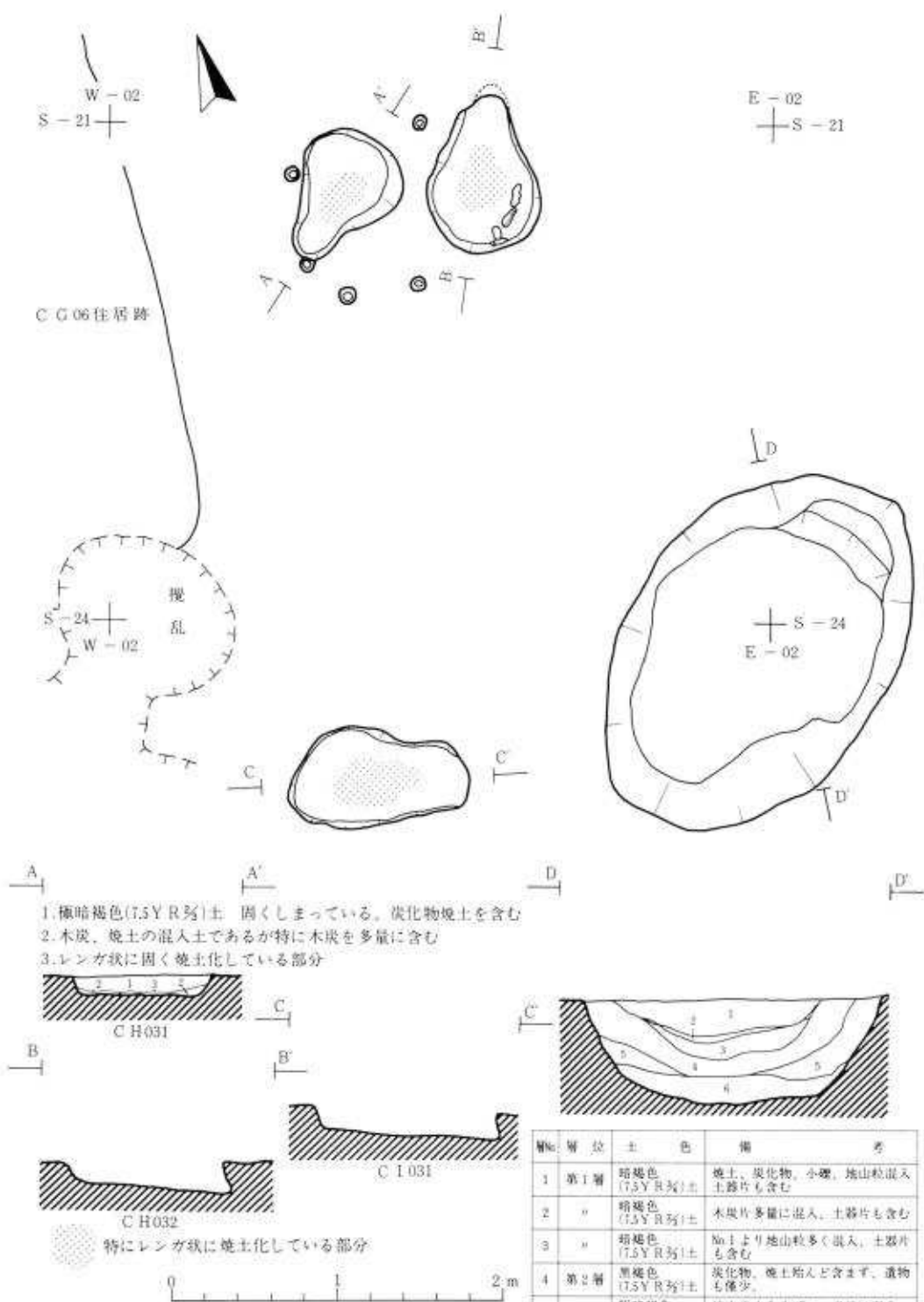
長軸100cm、短軸80cmのほぼ円形の平面形を呈する。長軸方向はN-55°-Wである。深さは約20cmを測り壁は比較的ゆるやかに立ち上がる。埋土状況はCH031ピットと同様。底面はゆるやかな舟底を呈する。遺物は皆無。

CJ561ピット

調査の不手際により北側の上部を掘りすぎってしまったが、平面形は卵形を呈し長軸80cm程を測る。軸方向はN-57°-Wである。深さ約20cmを測る。埋土状況はCH031ピットと同様。底部には焼土の痕跡は認められるがそれ程高熱とは思われない。遺物は皆無。

DA531ピット

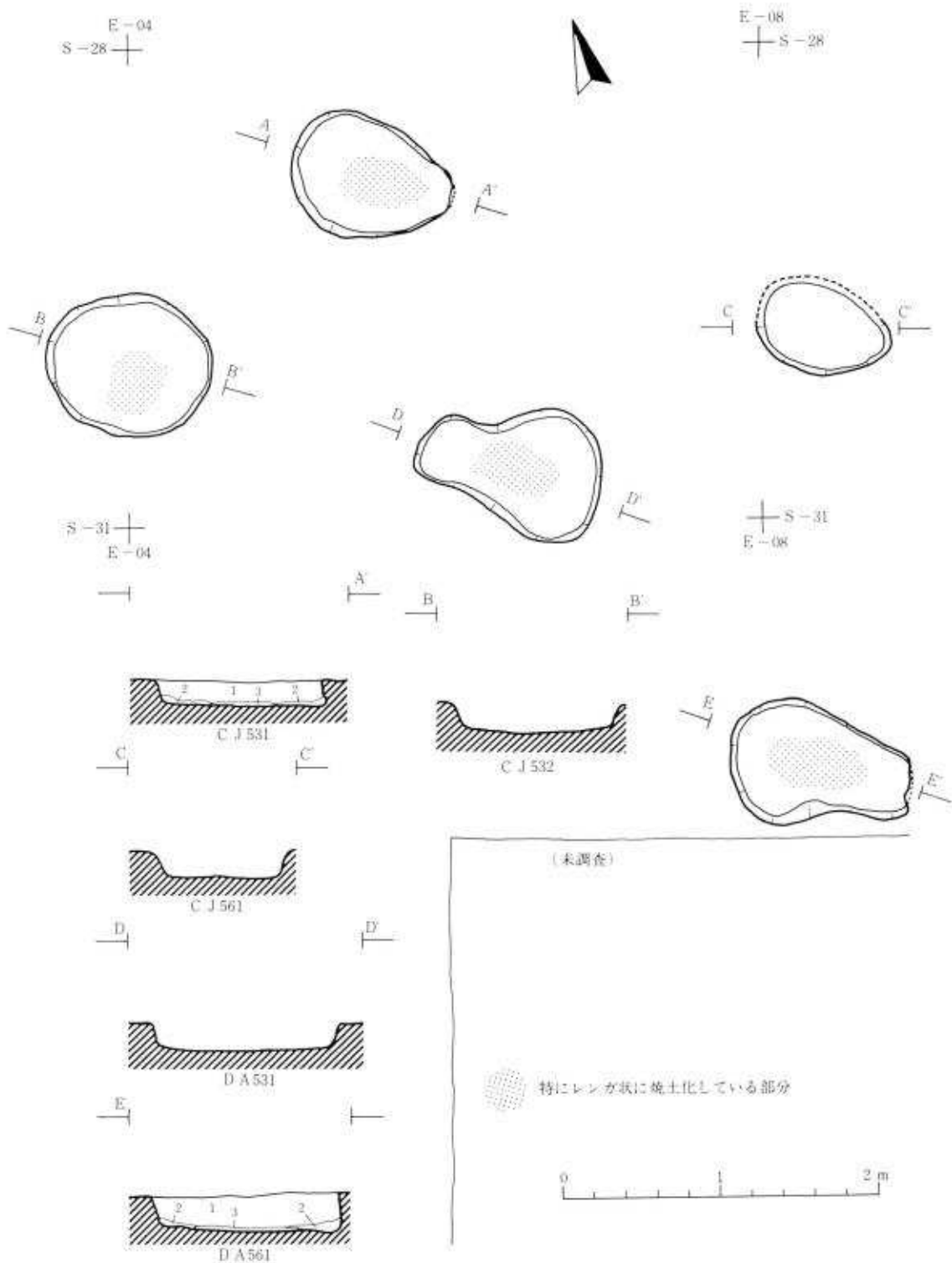
平面形は不整の卵形を呈し、若干のクビレをもつ。長軸は1.2mを測り、方向はN-41°-Wである。深さは15cm内外を測り、底部はゆるい舟底を呈する。遺物は皆無。



(第8図) 焼土ピット平断面図(その1)

層位	土色	備考
第1層	暗褐色(7.5Y R 5)土	焼土、炭化物、小礫、地山粒混入土器片も含む
2	暗褐色(7.5Y R 5)土	木炭片多量に混入、土器片も含む
3	暗褐色(7.5Y R 5)土	No.1より地山粒多く混入、土器片も含む
第2層	黒褐色(7.5Y R 5)土	炭化物、焼土殆んど含まず、遺物も僅少
第3層	極暗褐色(7.5Y R 5)土	地山の土を小ブロッコ状に混入、遺物含まず
第4層		第3層と地山の混入土、ベトつく

(第9図) C H 50土坑平断面図



1. 縮緬褐色(2.5Y R 7/1土) 固くしまっている 炭化物、焼土を含む
2. 木炭、焼土の混入土であるか特に木炭を多量に含む
3. レンガ状に固く焼土化している部分

(第10図) 焼土ピット平面図(その2)

DA561ピット

平面形は不整の卵形を呈する。長軸は約 1.2m で方向は N-60°-W である。深さは 20cm 内外を測り、断面形で見ると巾の広い方の壁はゆるく下向し、狭い方の壁は鋭角的に立ち上がる。遺物は埋土上部より須恵器の細片 1 片を数える。

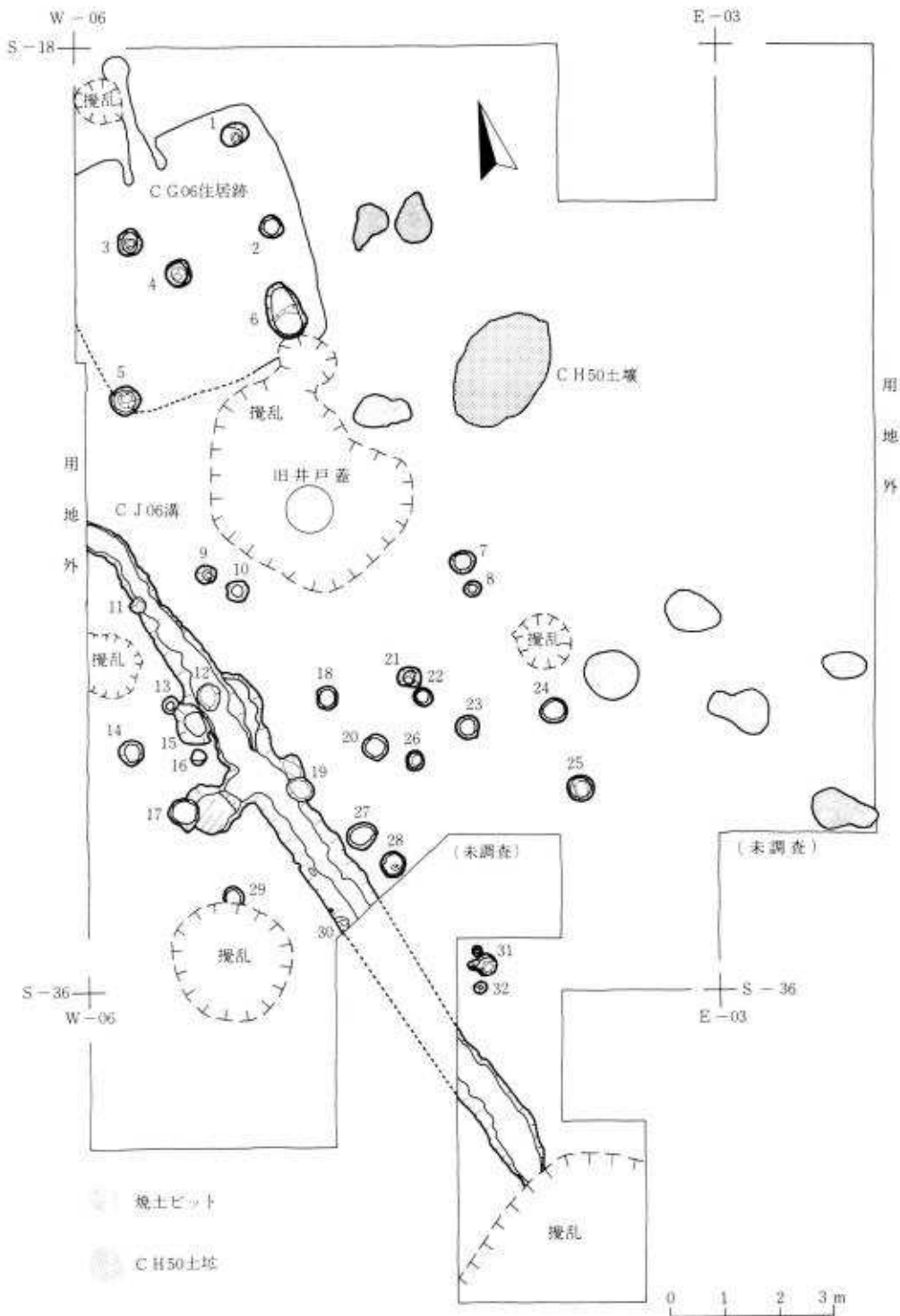
(5) 柱穴状ピット (第11・12図)

C G 06住居跡、C J 06溝と一部重複して32個の柱穴状ピットが検出された。掘り込み面は第II層であるが、攪乱が激しく、結局第III層の上面で検出された。平面形は楕円ないしは円形を呈し、径が50～60cmから20～30cm、深さは深いもので50～60cm、浅いものでは15～20cmを測る。一部底面に柱あたりが確認できるものがあり、掘立の建物の一部と考えられる。しかし相互にどう関連づけられるか明らかでない。

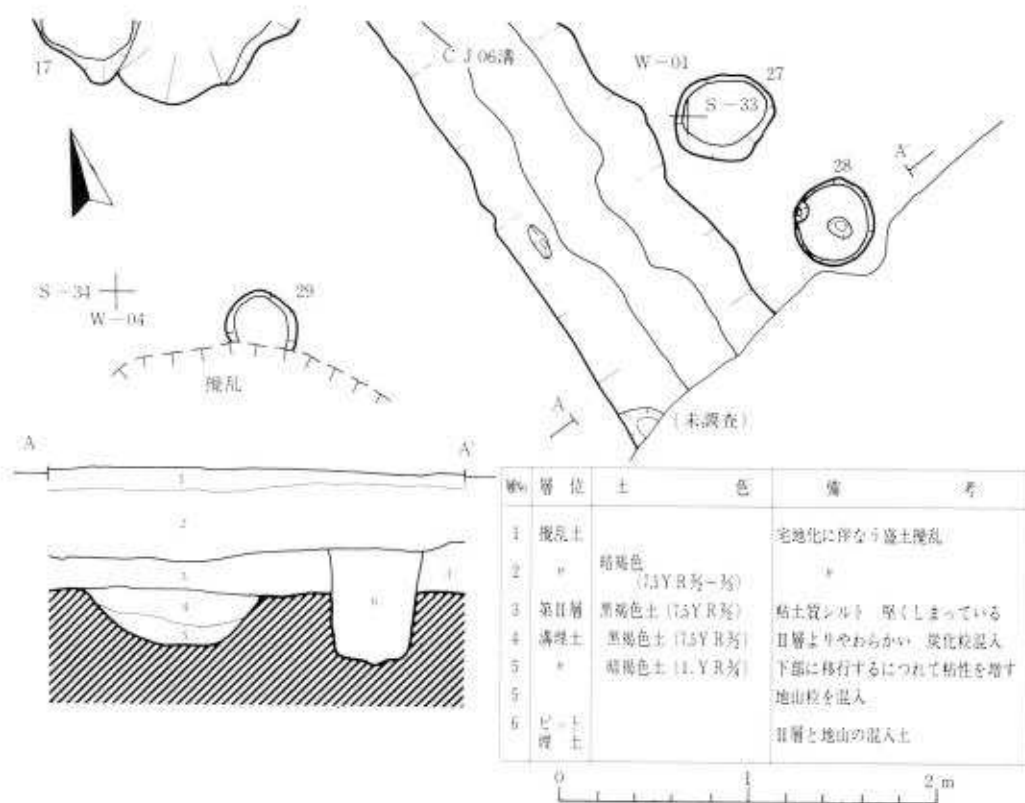
これ等のピット群は竪穴住居跡や溝の埋土を切って存在している。埋土は焼土、炭化物混りの黒褐色土と黄褐色土(地山)の混入土で単層である。以下番号を付して一覧表にまとめた。

(第5表) 柱穴状ピット規模集計表

ピットNo.	規 模(cm)			備 考	ピットNo.	規 模(cm)			備 考
	長径	短径	深さ			長径	短径	深さ	
1	50	45	66	C G 06住を切る	17	54	52	18	
2	40	40	21	同 上	18	41	38	26	
3	50	40	56	同 上	19	48	42	47	溝を切る
4	48	45	50	同 上	20	48	45	18	
5	50	50	49	同 上	21	42	32	23	
6	50	50	51	同 上	22	32	30	16	
7	50	40	25		23	40	38	25	
8	30	20	24		24	48	41	20	
9	40	40	36		25	48	43	43	
10	45	40	35		26	32	30	43	
11	30	30	20	溝を切る	27	52	48	24	
12	50	40	52	溝を切る	28	44	42	43	
13	30	30	23		29	38	38	22	
14	40	40	35		30	32	?	20	溝を切る
15	90	60	14		31	38	38	21	
16	26	20	18		32	20	20	16	



(第11図) C J 06溝および柱穴状ピット群平面図



(第12図) C J 06溝および柱穴状ピット平断面図

(6) 遺構外出土遺物

縄文・弥生時代 (第13図)

縄文土器、弥生土器片はC A～C B-06～56グリッドを中心に表土から約 100点の破片が出土した。いずれも小破片で器形の知れる資料は少ない。

縄文式土器 (第13図1～6、9、13、14) 13図1は深鉢体部片。沈線により入組文が施され、入組文内部にも短い沈線が縦に刻まれている。黒褐色を呈し器面は非常に脆い。

2は深鉢の口縁～体部上半の破片である。口唇には小波状の刻みがあり、口縁下方を一本の沈線がめぐる。体部はLRの単節縄文帯となっている。3、4は体部上半の破片で、2・3本の沈線が施され、その下方は縄文帯となっているもの。5は壺の口縁部か? 器面は磨かれ無文となっている。外面に2本、内面に1本の沈線がめぐる。6は壺の頸部から体部上半にかけての破片である。口頸部は磨かれて無文となり、体部はLRの単節縄文を斜回転。頸部外面に1本の沈線が施されている。13、14はやはり壺の口縁部である。器面は磨かれており、内外面に沈線がめぐる。13は沈線内に朱塗りの痕が見られる。

弥生式土器 7は体部上半の小破片である。細い沈線により変形工字文が描かれている。赤褐色を呈し、薄手で胎土は良好である。8は波状口縁を呈し、口縁部外面には上方から刺突により刻みがつけられているもの。10、11、15～19は器形の全貌は推定できないが、沈線により曲線文が描かれ、擦り消し縄文帯が発達しているグループである。いずれも近似したLRの細かい縄文が施されている。20、27は平縁口縁をなす高環形の土器と思われる。20は浅い沈線による文様が施されている。27は胎土・焼成ともに良好で器面は内外ともに磨かれている。外面には深い沈線文が描かれ、幅広の擦消縄文帯が形成されている。21、22は体部に同様のモチーフを持つ。21は体部が丸く張り出し、頸部がくびれ口縁部が外反するもので、鉢形あるいは高環形の土器と思われる。23～25は波状の口縁形をなす口縁部で、24、25は壺形土器と思われる。28はやはり壺形土器の口頸部であるが、無文で口縁部、頸部外面に沈線がめぐる。器形は頸部で屈曲して強く外傾する。沈線内には僅かに朱が観察される。

29、30は底部片で、底部外面に網代痕が見られる。編み方はいずれも緯-2本越え1本潜り、経-1本越え2本潜りの1本送りである。縄文晩期・弥生土器のいずれに伴うかは不明である。

土製品 31は土製の紡垂車と思われる。表裏面とも無文で、周縁は磨かれている。直径約3.5cm、中央の孔径約0.5cmである。弥生時代のものと思われる。

平安時代

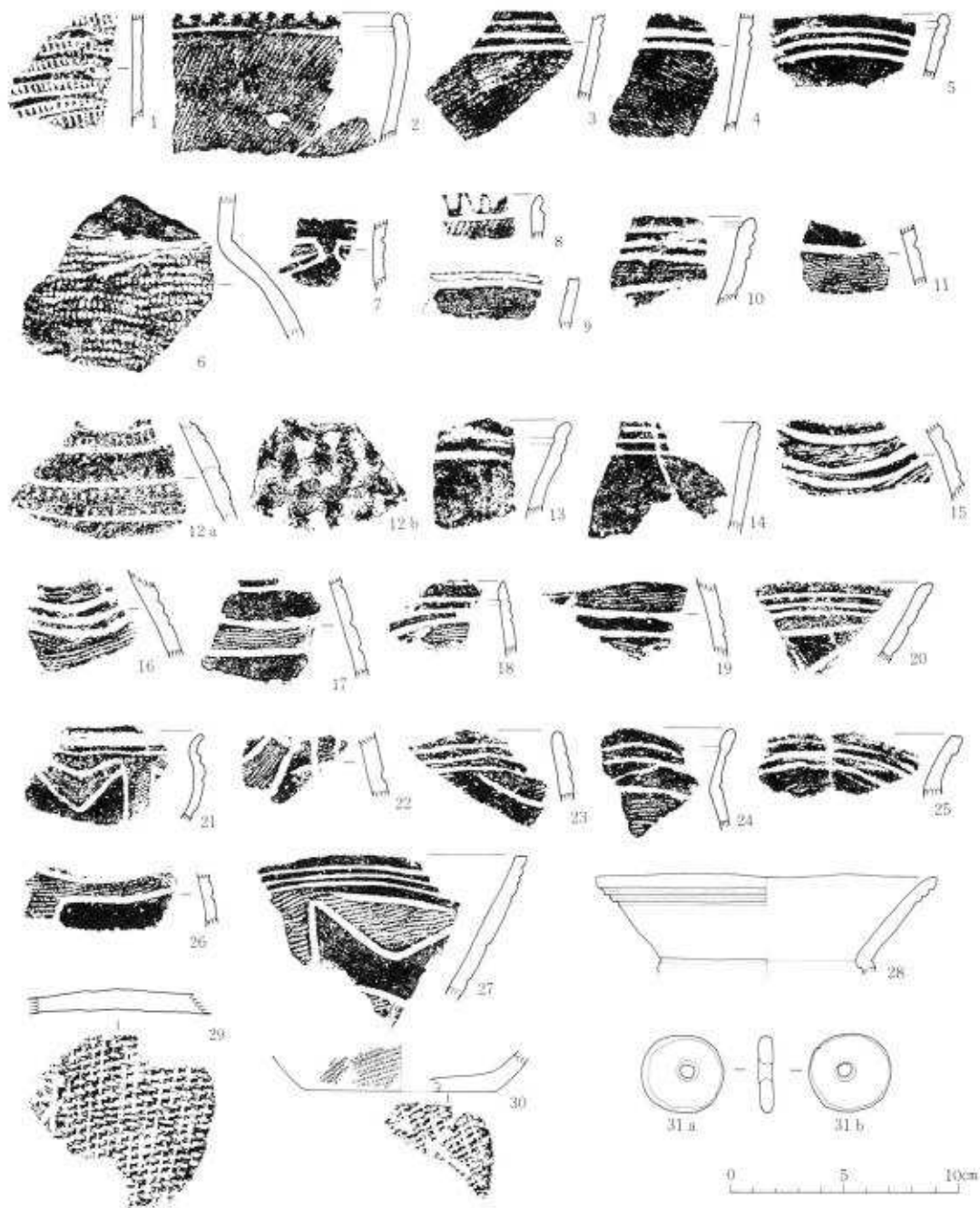
土師器 14図1・2は皿状の土器である。立ち上がりから大きく外傾して開き、口縁部が強く外方へ引き出されている。内面は細かくヘラミガキされ、黒色処理を受けている。

5は内外面黒色処理の坏である。体部に丸味を持って外傾し、口縁部は外反する。内外面とも細かなヘラミガキがなされている。

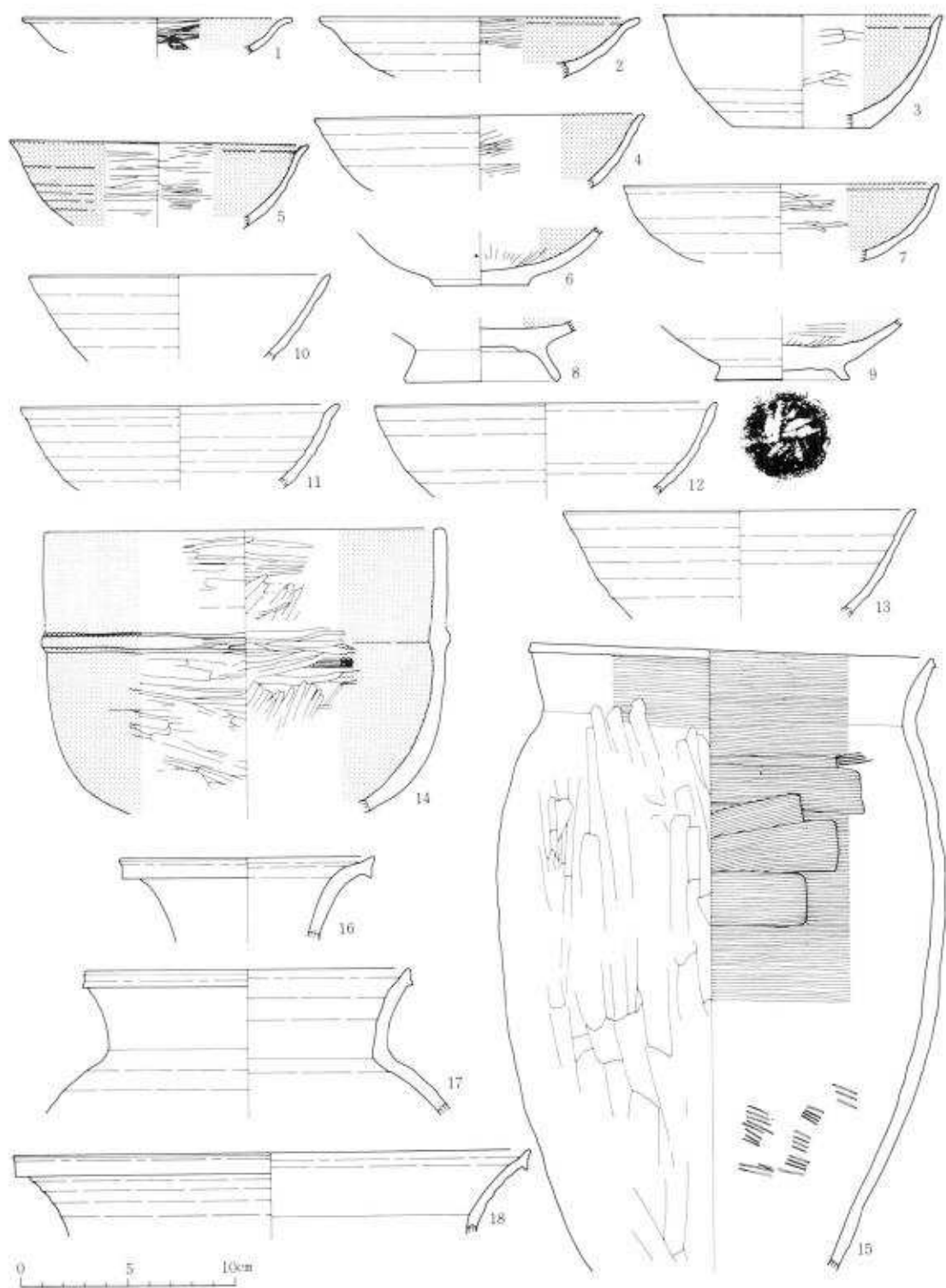
3・4・6・7は内黒の坏で、内面にヘラミガキがなされている。3は口径、底径に比して器高が高く、壺に近い。底部外面は回転糸切り無調整である。4は体部に僅かな丸味を持って外傾する器形。7は体部にかなりの脹らみを持って立つ器形で、器高が低い。6は底部外面回転糸切りで、極端に小さな底部を持つ。

8、9は高台付坏の高台部片である。8は比較的長く外傾した高台となり、内面はロクロナデされている。9は短かく外傾した高台を持ち、坏部の底部外面にはヘラ状工具による菊花状文が施されている。

14は口縁部片と体部片から推定図上復元したものである。器形は体部下半に丸味を持ち、上半から口縁まではほぼ直立する。体部外面には1本の粘土紐貼り付けによる隆帯が走る。口縁部片には片口状の突起が剥落した痕跡もあり、図上に表現できなかったが恐らく片口付の鉢形土器と考えられる。ロクロナデされた後、内外共に緻密なヘラミガキ調整を受け、黒色処理されている。内面は口縁部、体部ともに上方を横方向、下方を縦方向にヘラミガキしている。外面



(第13图) 出土土器拓影图



(第14图) 出土土器实测图

(第6表) 遺構外出土図示遺物観察表

実測番号	写真番号	出土アレイ	土器区分	器種	器 形						器高 cm	口縁部 径 cm	口縁部 径 cm	体部 径 cm	底径 cm	脚径 cm						
					口 縁 部		体 部		底 部													
					外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面												
1		C.H.5.0	土師器	皿	コテコテ	横方向にギキ		コテコテ	横方向にギキ								12.7					
2		C.G.H.06	*	*	*	*	*	*	横～放射状にギキ								15.0					
3		C.G.H.06 C.G.H.06	*	*	*	*	*	*	シギキ	回転糸切り無調整	シギキ						5.2	(13.0)			(6.4)	
4		C.H.5.0	*	*	*	*	*	*	横方向にギキ								(15.2)					
5		*	*	*	横方向にギキ	横方向にギキ		横方向にギキ	*								(14.0)					
6		C.G.H.06	*	*						回転糸切り無調整	放射状にギキ									4.4	4.4	
7		C.H.5.0	*	*	コテコテ	横方向にギキ		コテコテ	横方向にギキ								(14.7)					
8		C.H.5.0	*	高台付鉢																6.2	6.2	7.0
9		C.H.5.0	*	*				コテコテ	横方向にギキ	菊花状文	*									7.8	7.8	6.2
10		C.H.5.0	土師器	鉢	コテコテ	コテコテ	*	コテコテ									(14.0)					
11		C.G.H.06	*	*	*	*	*	*									(14.8)					
12		C.H.5.0	*	*	*	*	*	*									(16.0)					
13		C.H.5.0	*	*	*	*	*	*									(16.4)					
14		C.H.H.06	土師器	片口付鉢形壺	横方向にギキ	横～斜方向にギキ	横～斜方向にギキ	横～斜方向にギキ	横～斜方向にギキ	横～斜方向にギキ	横～斜方向にギキ						(18.6)	(19.0)				
15	遺物 5-10	C.G.0.6	*	甕	横ナデ	横ナデ	縦方向にギキ	縦方向にギキ	縦方向にギキ	縦方向にギキ	縦方向にギキ						(18.7)	(17.5)	21.0			
16		C.H.0.6	土師器	壺	コテコテ	コテコテ											(11.8)	(13.0)				
17		C.H.5.0	*	*	*	*	*	*									(15.4)					
18		C.G.5.0	*	*	*	*	*	*									(24.2)					

(数字)は推定値を示す

は隆帯上を含めて全面を横～斜方向にヘラミガキし、下端から底部にかけてはヘラケズリしている。

15は長胴形の甕である。体部上半が脹らみ、頸部で屈曲し、口縁部は外傾する。口縁は僅かに下方に引き出されている。体部外面は縦方向のヘラケズリによって成形され、内面はヘラナデによる調整が行なわれているが部分的に刷毛目痕が見えるところから、刷毛目→ヘラナデの手順を取ったものと思われる。口縁部は内・外ともに横ナデされている。明茶褐色を呈し、内外面共にカーボン付着が著しい。

須恵器 16～18は須恵器の壺口縁部である。

4. 考察とまとめ

今回の調査対象となった区域は、その殆どが宅地とその付帯施設及び屋敷林である。そのため、宅地造成時の盛土、掘り込み地業及び地固め地業等により、表土は固くなっている。以上の理由によって、粗掘り中の表土剥ぎ作業は非常に難行した。しかも、地下40～50cmに及ぶ掘乱により、遺構の掘り込み面が著しく破壊されていた。そのため遺構検出は困難をきわめ、結

局、柱穴状ピットを除いては第Ⅲ層の黄褐色の地山面が遺構の検出面となった。

今回の調査で発見された遺構は、歴史時代の竪穴住居跡1棟、土壇2基、溝1本、焼土ピット8基、それに柱穴状ピット32個である。その他に遺構は検出されなかったが、縄文時代、弥生時代の土器片が若干出土した。本項では遺構・遺物についてまとめと考察を行う。

(1) 出土遺物

〔縄文・弥生時代〕

Cブロック中心に出土した縄文・弥生式土器は微量ではあるが、本遺跡の周辺にこれらの時代の遺跡が存在する可能性を提示してくれる資料となろう。出土土器片はすべて小破片で、器形の推定や時期決定にも不確実な点が多いが、以下図示資料についてまとめを記す。

13図1は入組文の在り方から縄文時代後期末葉の宮戸Ⅲa式に相当すると思われる。

2～6は晩期後半に位置づけられる。沈線の施され方から見て大洞C₂期のものか? 13、14は文様が浮文化しており、大洞A期と考えられる。

7は変形した工字文が完全に沈線化している点は谷起島、沼の上遺跡出土の土器に類似する点であり、弥生時代中期初頭に位置づけられよう。10、11、15～27の土器群は擦消縄文の発達した土器群である。文様(モチーフ)の窺える資料はなかったが、変形工字文はまったく描かれていない。県内では谷起島式土器に後続する土器の好資料を出土している遺跡は少なく、実態は明らかではないが、谷起島遺跡表採資料に類似するものではないかと考えられる。この土器群の時期については、一応谷起島式土器より新しく、樹形囲式土器に近い、あるいは併行すると考えたが、なお疑義もある。28の壺は頸部から口縁部にかけての外傾度が強く、谷起島、樹形囲式土器のいずれにも見られない器形をとっている。時期は判断できなかった。

〔平安時代〕

平安時代の遺物はC B53土壇、C G06住居跡を中心に、表土、第Ⅱ層からも多数出土している。遺構外からの出土はC G・C H06～56グリッドが最も多かった。

出土土器の大半は土師器と須恵器とに占められ、僅かの赤焼き土器が伴っている。赤焼き土器については遺跡全体を通じて出土量が微量で、実態を把握することができなかった。本項では赤焼き土器は除外し、土師器、須恵器について器種、調整技法などの分類を試みる。

土師器

土師器は最も出土頻度が高く、器種もバラエティに富む。大まかな器種分類は第15図の様にを行った。甕以外はすべてロクロが使用されている。

皿 底部から口縁部への外傾度合が極端に強いものを皿と分類した。口径÷器高が5.0内外である。しかし底部が残存した出土品がなく、高台が付く可能性もある。

杯 杯は黒色処理の相異からA、Bに分類した。

坏A：内外面黒色処理の坏である。内外面ともに緻密なヘラミガキを受けている。器形は体部に脹らみを持って外傾し、口縁部が外反または外方へ屈曲する。

坏B：内面黒色処理の坏で、内面のみにヘラミガキ調整を受ける。器形はバラエティに富む。体部及び底部外面の再調整の有無により1、2に細分した。

B₁：ロクロ切り離した後、体部下端及び底部に再調整を受けたものである。調整痕により切り離し手法は不明となっている。出土量は概して少ない。再調整のうち手持ちのヘラケズリを受けたものをB_{1a}、回転ヘラケズリを受けたものをB_{1b}とした。

B₂：底部回転糸切り無調整の坏である。

坏の破片を含めた出土頻度はおよそB₂ > B₁ > Aとなる。

高台付坏 高台部分のみの出土が多かったため、全容は明らかではない。高台部と坏部との接合手法により1、2に分類できる。

高台付坏1：坏部底部外面にヘラ状工具により菊花状文がつけられたものである。

高台付坏2：菊花状文は見られずロクロナデされているもの。

碗 碗と分類したものは1個体のみである。内外面黒色処理、全面的に丁寧なヘラミガキが行われている。口径17.6cmで推定器高9cmと大形でかなり器高が高い。

鉢 やはり1個体のみ出土。底径10cmと坏に比べ底径が大きい。立ち上がりより大きく開いて外傾するが、体部下半の破片であるため形状は推定できない。恐らくは浅鉢であろう。

片口付鉢 前述した様に口縁部片に片口部分が剥落した痕跡が見られることからこの名称を用いた。特異な形態で他に類例は知り得なかった。遺構外の出土土器であるが、黒色処理や内外面のヘラミガキの方法は坏A類、碗などと共通するものである。

甕 ロクロ不使用の甕をI類、使用の甕をII類と細分する。

甕I：器形を推定できる資料は少ないが、器高20cm以内の甕と30cm以上の大形で胴の長い甕とがある。いずれも頸部に段は持たない。体部外面は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデまたは刷毛目が行われている。

甕II：器高20cm内外と思われる比較的小形の甕がほとんどで、ロクロナデの後の成形、調整痕は見られないものが多い。

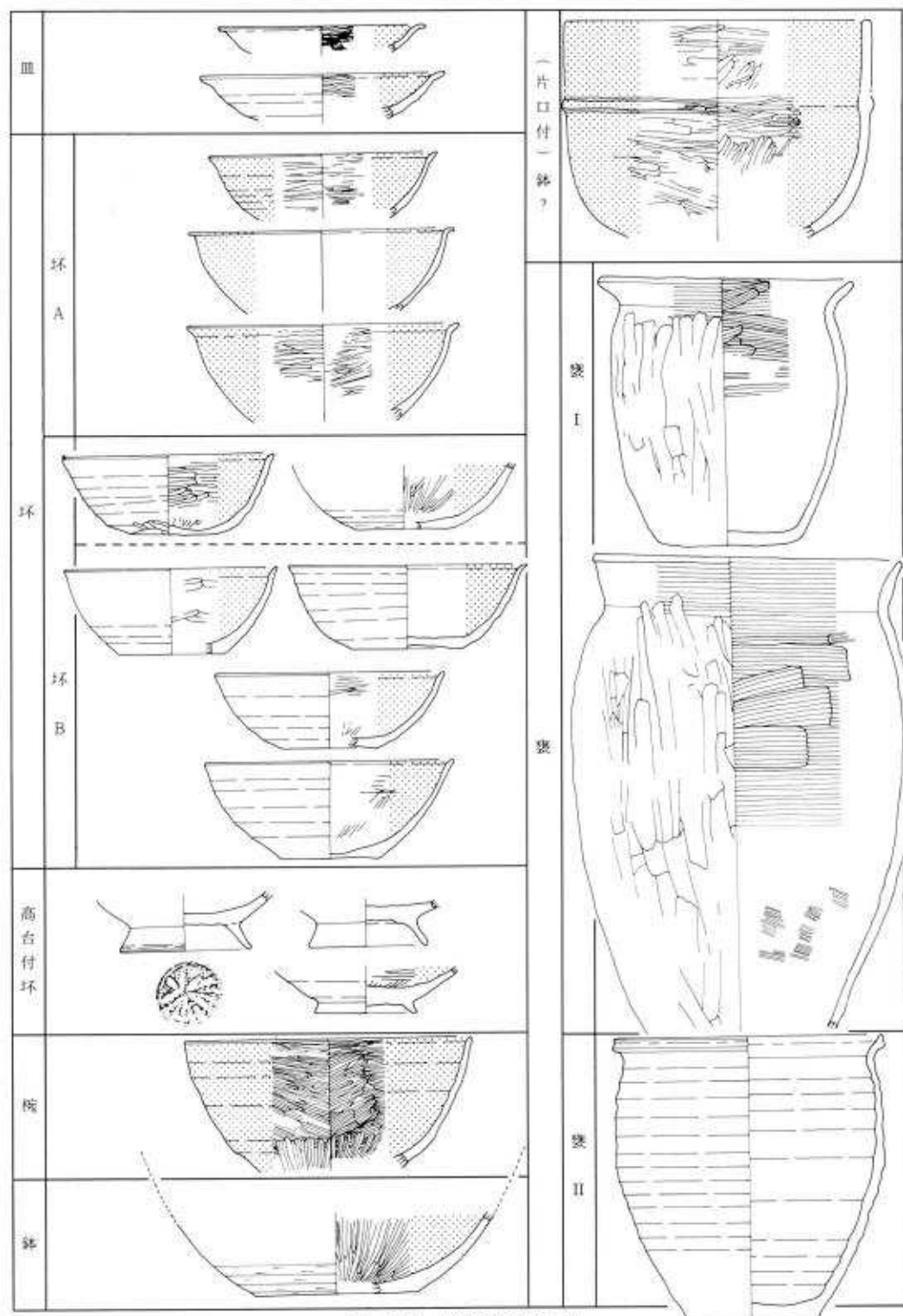
甕類の出土は少なく器形や調整を捉えられる資料は各図示遺物に限られる。

須恵器

須恵器に見られる器種は坏と壺に限定されている。出土量は土師器に比してかなり少量である。

坏 底部の切り離し手法とその後の再調整の相異により1～3類に分類できる。

坏1：底部回転ヘラ切り無調整のものである。器形は底径が広く体部がほぼ直線的に外傾す



（第15图）土師器器種分類图

る。器高は浅い。

坏2：ロクロ切り離し後底部及び体部下端に再調整を受けたものである。調整痕により切り離し手法が不明となっている。手持ちのヘラケズリされた坏が1点出土している。器形は1類と大きく異なり、器高が高く体部に脹らみを持って立つ。回転ヘラケズリを受けた坏は明瞭なものは出土していない。

坏3：底部回転系切り無調整のものであるが、底部片が数点出土しているだけで器形は不明である。

壺 全体形を推定できる資料は1点も出土していない。6図に見られる様な大形の広口壺で成形に叩き板による叩き締めを行っているものと、小形でロクロナデによる成形を中心としたものと、大きく二つに分類できる。口頸部の破片からは口縁形のバラエティさがうかがわれるが、細い長頸の破片は出土していない。大部分は頸部から短かく外傾するものである。

以上堀の内遺跡から出土した土器について器種分類と器種個々の細分を行ったが、次に各遺構と出土遺物との関係を検討してみたい。各遺構に伴うと思われる土器類は以下の通りである。

C G 06住居跡床面 (土師器) 坏B_{1b}、高台付坏2、鉢、甕II

(須恵器) 坏1

C B 53土壇 (土師器) 坏A、B_{1a}、B_{1b}、B₂、塀、高台付坏1、2、甕I、II (IIは破片1点)

(須恵器) 坏2、3、壺

C H 50土壇 (土師器) 坏B₂ (須恵器) 壺

C G 06住居跡は出土遺物は少ないが、床面からヘラ切りの須恵器坏とロクロ不使用の土師器甕とが相伴して出土していることが注目される。さらに土師器の坏や鉢では、ロクロ切り離し後底部外面を回転ヘラケズリしたもの(B_{1b})が伴う様である。一方C B 53土壇では土師器の坏が多くA～B₂までの坏が出土し、底部に手持ちヘラケズリ調整を行った須恵器の坏と相伴している。土師器甕は大部分がロクロ使用の甕である。

(2) 発見遺構

次に発見された各遺構について、一部不明な点もあるが、時期・性格等について若干の考察を試みたい。

〔竪穴住居跡〕

竪穴住居跡としては、C G 06住居跡1棟が発見された。この住居跡は、その伴出遺物から平安時代に位置つけられるものである。床面出土の土器組成は前述したが、ヘラ切りの須恵器坏とロクロ不使用甕とが相伴している点から、この住居跡の時期を、県内にロクロ技術が導入され、

展開してゆく初期の頃と考えた。土師器の甕はなおロクロを使用せずに製作しているが、坏の成形にはすでにロクロが使用されている。絶対的な年代は明らかではないが、およそ9世紀前半～中葉にかけてと考えている。

〔土壌〕

土壌としてはC B53土壌、C H50土壌の2基が発見された。

このうちC B53土壌は調査区内の畑地部分で発見された土壌である。この付近では、土層の擾乱が深部まで及んでおらず、遺構の保存状態は比較的良好である。土壌は、長軸約 3.7m、短軸約 1.7m程のほぼ南北に長い楕円形の平面形を呈し、底部に深い掘り込みを伴っている。

埋土の状況は前述の如く上下2層に大別される。そのうち下層は深掘り部分の埋土にあたるものだが、非自然堆積層の様相を呈しており、上層は自然堆積層である。土壌埋土にあたる土層(1層)下面からは土師器を主体とした土器が集中出土している。深掘り部が一気に埋められた後、その上に土器が放置されたものであるが、この放置には意図的なものがかがえる。この事からC B53土壌は単なる廃棄遺構とは捉え難い。しかし性格を決定する資料は乏しく類例の増加を待って考察したい。いずれC B53土壌の土器の出土状態は土壌の性格付けの一つの資料にはなろう。なおこれらの土器の大部分には器面の磨滅あるいは剥落が認められ、使い込まれた土器であることが推察できる。

C B53土壌出土土器は、特に土師器においては、バラエティーに富む組成となっている。須恵器の坏はヘラ切りは出土せず、回転糸切り無調整、手持ちヘラケズリとが出土しているが、C G06住居跡出土のヘラ切坏とは焼成、色調、器形のいずれの点でも如実に異っている。時期からの相異であろうか？焼成窯の相異であろうか？これに伴う土師器の坏はA～Bまでとバラエティーに富み、甕の製作にはロクロが使用されている。この点はC G06住居跡のロクロ未使用甕と比較し、新しい要素と言うことができる。底部ヘラ切の須恵器の坏、ロクロ未使用の甕の存在から、CG06住居跡はCB53土壌よりも古い時期に位置付けられるものという推定を行った。しかしC B53土壌出土の坏においても、底部、体部下端にヘラケズリを行ったものが共伴することはやはりあまり時期が下らないものと思われる。一応9世紀中後半～10世紀初頭と考えた。

C H50土壌は長軸約 2.5m、短軸約 1.5m程の平面楕円形を呈するピットである。その埋土は前述の如く6層に区別される。下層の4、5、6層は自然的な堆積層であるが、上層の1、2、3層は人為的な廃棄層である。この廃棄層は焼土・炭化物・石・それに土器片等が投棄されてできたものである。以上の様な状況から、C H50土壌がある程度埋没した後に、2次的に廃棄遺構として使用されたものと考えられる。

〔溝〕

B J 06溝が1本だけ検出された。しかしこの溝は完掘していないので、その規模等について

は全く不明である。また、この溝からは、その時期決定資料となる遺物は全く出土していない。

〔焼土ピット〕

焼土ピットは、8基検出された。これ等の焼土ピットは、全て本調査区内で最も攪乱が深く及んでいる区域内で発見された。この区域では、土層の攪乱が地下40～50cmに及んでいる。そのため、遺構の存在は前述の様に第Ⅲ層上面に至って、ようやく確認できた。

(第7表) 焼土ピット一覧表

No.	遺構名	規模 (cm)			形状	長軸方向	No.	遺構名	規模 (cm)			形状	長軸方向
		長軸	短軸	深さ					長軸	短軸	深さ		
1	C H 031ピット	80		15	不整形形	N-43°-E	5	C J 532ピット	100	80	20	楕円形	N-55°-W
2	C H 032ピット	100		20	卵形	N-28°-E	6	C J 561ピット	80		20	卵形	N-57°-W
3	C I 031ピット	100		15	不整形形	N-74°-W	7	D A 531ピット	120		15	卵形	N-41°-W
4	C J 531ピット	100		15	卵形	N-56°-W	8	D A 561ピット	120		20	不整形形	N-60°-W

8基の焼土ピットは、C G 06住居跡の東側に集中している。しかし、これらのピットはいずれも孤立しており、ピット間の重複関係は全く見られない。

ピットの形状・規模等は、第7表にもみられる如く、大差がない。ピット中の埋土は、いずれのピットも上下2層の暗褐色土よりなる。そのうち、上層の埋土中には焼土と炭化物がやや多量に含まれている。また、下層の埋土中には炭化物が多量に含まれている。さらに、ピットの底面や側部の壁面は赤変しており、特に、底面の中央部はレンガ状に固く焼けている。この事から、これらのピットはかなり強い火力を受けたと推定される。

形状や規模から考えると、これらのピットは埼玉県水深遺跡の土師器窯跡と類似している。水深遺跡では、65基の土師器窯が確認されているが、埋土や底面から土器が出土している上に、2箇所の土器捨場も発見されている。また、東北新幹線関係遺跡の調査でも、江刺市の落合1遺跡で類似遺構が発見されている。この場合も、土器捨場と判断できる遺構が伴っている。さらに、これらの遺構から出土した土器片には、しばしば鉄滓が伴出している。また、遺構付近からは、フィゴロの破片も発見されている。

しかしながら、当遺跡の場合は、焼土ピットの時期・性格等を示唆するような人工遺物が一つ出土していない。そのため、現在のところ、これらの遺構の性格や時期的な位置づけは、非常に困難である。いずれ、8基の焼土ピットは同じ性格と目的をもった遺構であると推定される。

なお、これらの焼土ピットと同様の遺構は、さらに東側の調査区域外にも分布していると予想されるが、この部分の調査をも含めて、今後の類例資料の増加に期待したい。

また、これらの焼土遺構が、一見、CH50土壌と関連ある様な配置状況を示す。しかし、ピット内の埋土や遺物出土の状況から見ると、これらの遺構はむしろ、時期を異にし、それぞれ、無関係に営まれた可能性が強い。

〔柱穴状ピット〕

32個の柱穴状ピットは、掘立柱建物の、柱穴とも思われる。しかし、各ピットの間には計画的な配置形の認められるものがなく、今のところその性格は不明である。

また、これらのピットは住居跡の埋土や溝の埋土を切って作られている。その事から、これらのピットの作られた時期が、今回発見された遺構のうちでも、かなり新しい時期に位置付けられると推定された。なお、これ等の柱穴状ピットは調査区域外の西側にも分布する事はほぼ明らかである。その分布状況や範囲などの全体的な究明は、焼土ピット群の場合と同様、今後の調査に期待したい。

以上今回の調査で検出された遺構と遺物について若干の考察を加えたが、当遺跡は前述の如くその殆どは宅地と付帯施設のため攪乱が激しく、また周辺は水田化に伴う整備等により遺構の遺存状態は良好とは云えない。しかし検出された遺構・遺物はその数は少ないが、非常にバラエティーに富み興味を持たれる遺跡である。

引用・参考文献（順不同）

- | | |
|----------------------|--|
| 林 謙作 (昭40) | 『縄文時代—東北— (日本の考古学II) 河出書房 |
| 斎藤 貞治 (昭43) | 『陸前地方縄文文化後期後半の土器編年について—宮戸古岡貝塚及び西の浜貝塚出土の土器を中心として— (仙台湾周辺の考古学的研究) 宮城教育大学歴史研究会編 |
| 伊藤 玄三 (昭41) | 『弥生文化の発展と地域性—東北— (日本の考古学III) 河出書房 |
| 小田野哲憲
林 謙作 (昭52) | 『谷起島遺跡第一次発掘調査報告書—関市教育委員会 |
| 伊藤 鉄夫 (昭48) | 『沼ノ上遺跡調査報告書—江利市教育委員会 |
| 伊東 信雄 (昭35) | 『東北部の弥生式土器』文化第24巻1号 |
| 岡田 茂弘
桑原 滋郎 (昭49) | 『多賀城周辺における古代環形土器』(研究紀要1) 宮城県多賀城跡研究所 |
| 伊藤 博幸 (昭51) | 『岩手県の古代土器生産について—須恵器とクロロ土師器の素樸』(岩手史学研究463) |
| 沼山源喜治
斎藤 尚巳 (昭52) | 『尻引遺跡調査報告書—北上市教育委員会 |
| 草間 俊一 (昭46) | 『瀬谷子遺跡第3次緊急調査報告—江利市教育委員会 |
| 埼玉県遺跡調査会 (昭47) | 『水窪—東北縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書1』 |
| 岩手県教育委員会 (昭54) | 『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書1』岩手県文化財調査報告書第33集 |

花巻地区の概観

1 花巻地区の地形と環境

花巻市内で、東北新幹線は、北上川東岸部を大きくカーブしながら、南北方向に走っている。花巻地区の北上川東岸部の地形は、江刺地区や北上東部地区と同様で、北上山地の辺縁部が、低平な山地や丘陵をなしつつ、北上川の河岸低地に接している。両者の境界部には、河岸段丘性の台地が部分的に発達している。その典型的な例は、猿ヶ石川や添市川と北上川の合流点周辺に見られる。沖積平野は、北上川河岸低地の他に、丘陵地や山地を開析する猿ヶ石川、添市川の河谷部に見られるが、いずれも狭小である¹¹⁾。

この北上川東岸部の土地利用を見ると、沖積平野や台地の大部分は水田として利用されているが、一部には、畑地や宅地も見られる。丘陵地は、かつては大半が山林で占められていたが、ここ10数年間の間に、かなり大規模な水田化が進行している。そのため、場所によっては、旧地形の変更が著しく、人工造成地が大半を占めている。山地はほとんど山林になっているが、松、杉類の植林が一部見られる他は、大部分が、ナラなどを主体とした落葉広葉樹林である。

2 周辺の遺跡

現在までの分布調査で得られた成果をもとに、北上川東岸地域の原始・古代の遺跡分布状況を見ると、遺跡の比較的多く集中している場所は、猿ヶ石川河谷周辺部と、石鳥谷町と境をなす添市川と北上川の合流点周辺部である。その中には、縄文中期～晩期の北上市の臥牛遺跡群や、チャシとの関連からしばしば話題に上る胡四王山遺跡などの著名な遺跡も含まれている。

新幹線通過予定地にかかる遺跡は、これらの遺跡群のうち高松・八幡の2遺跡である。そのうち、高松遺跡は猿ヶ石川東岸の河岸段丘上に位置し、八幡遺跡は、胡四王山の北側を開析して西流する、幸田川（土地整備事業に伴い、現在は、幸田幹線用水路として改修され、遺跡の南方に流路を変えている）の河谷の北に接する小さな河岸段丘上にそれぞれ位置している。また、これらの遺跡から南北に延びる新幹線ルート上には、北上市更木の堀ノ内遺跡、石鳥谷町八重畑の高畑遺跡などが知られている。

注 記

- (1) 岩手県企画開発室 1976 「北上山系開発地域土地分類基本調査「花巻」
- (2) 北上市教育委員会 1977 「団子状炭化物-坊主峠遺跡「どるめ入」13号」JICC出版局
北上市 1968 「北上市史」第一巻、原始・古代① 北上市史刊行会
- (3) 江上・関野・桜井編 1958 「館址」東大出版会
- (4) 岩手県教育委員会 1975 「昭和50年度、東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」II



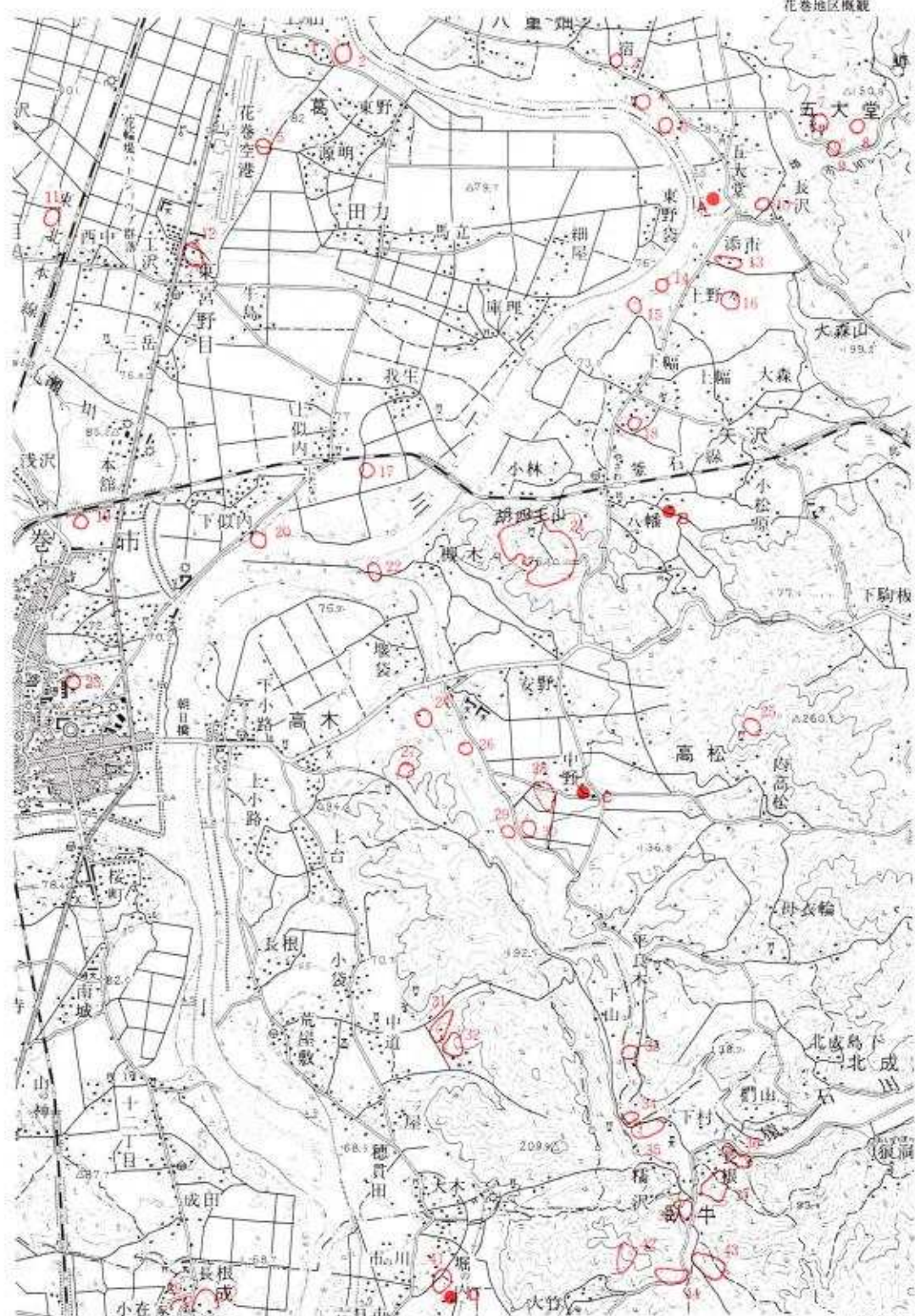
1 高畑遺跡 2 八幡遺跡 3 高松遺跡

0 2km



5万分の1地形分類図「花巻」より一部加筆引用

(第VI図) 花巻地区地形分類概念図



1 : 50000

A 高畑遺跡 B 八幡遺跡 C 高松遺跡 D 堀ノ内遺跡

(第VII図) 遺跡の位置と周辺の遺跡

(第V表) 周辺の遺跡地名表

番号	名 称	時 代	番号	名 称	時 代
1	方八丁遺跡	平安	23	花巻城跡	近世
2	上ノ山遺跡	縄文(前・中)、平安	24	服袋遺跡	縄文(中・後・晩)
3	宿遺跡	縄文(中・晩期)	25	高松山経塚遺跡	平安?
4	八重畑遺跡	不明	26	安野遺跡	縄文
5	山ノ神遺跡	縄文(前期)	27	久田野遺跡	不明
6	ジャノリ遺跡	不明	28	中野一里塚	近世
7	光勝寺鐘樓跡	平安?	29	中野B遺跡	縄文(晩)
8	寺場古塚遺跡	不明	30	中野A遺跡	縄文(後・晩)
9	すみこ館	中世	31	大沢II遺跡	縄文、平安
10	安緒屋敷遺跡	縄文(晩)、土師	32	大沢I遺跡	不明
11	西宮野目遺跡	縄文(前・後・晩)	33	明戸遺跡	不明
12	十三塚遺跡	不明	34	平良木遺跡	縄文(中)
13	添市遺跡	縄文(前?中・後・晩)弥生	35	臥牛遺跡	縄文(中・後・晩)、平安
14	添市館跡	中世	36	乱場館遺跡	中世
15	古堂遺跡	平安	37	長根遺跡	不明
16	添市古墳群	不明	38	横尺遺跡	不明
17	上似内遺跡	平安	39	成田一里塚	近世
18	下市遺跡	奈良、平安	40	下成田遺跡	縄文、平安
19	本館遺跡	縄文(晩)	41	堀ノ内遺跡	奈良、平安
20	下似内遺跡	平安	42	大竹庵寺遺跡	平安
21	胡四王山遺跡	平安	43	坊主峠遺跡	縄文(中)
22	槻ノ木遺跡	弥生	44	藤畑遺跡	縄文(晩)

(5) 岩手県教育委員会 1976 「昭和51年度、東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」

(6) (4)と同じ

(7) 岩手県教育委員会 1975 「昭和49年度、東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」

高松遺跡

遺跡記号：TM

所在地：花巻市高松第8地割78他

調査期間：昭和50年6月4日～7月9日

調査対象面積：2000㎡

平面測量基準点：457.600km (FA50)

基準高：海拔 104.50 m

1. 位置と立地（第Ⅵ図P134、第Ⅶ図P135）

高松遺跡は、花巻市矢沢地内にあり、花巻市の中心街の東方約3.25km地点付近に位置している。遺跡所在地は、猿ヶ石川東岸の中位河岸段丘の辺縁部に立地しており、そのすぐ南側には、西に開く小さな谷が走っている。段丘の辺縁部は緩斜面になって、低位の段丘面や谷底に続いているが、その海拔高度は、段丘上の平坦部で105m～108m前後、斜面上部で104m～105mを測る。なお、南側の谷に沿って、県道北成島一花巻線が東西方向に走っている。

遺跡所在地付近は、現在、宅地や畑地、林地、草地、果樹園、水田として利用されているが遺跡の主要部分は、宅地造成によって、既に大部分破壊されている。その他にも、開田工事によって、旧地形の変更が幾分行なわれている。

この遺跡の周辺には、中野A・B、安野、堰袋、久田野の縄文時代各期の遺跡があり、他にも高松山経塚、中野一里塚など、平安時代以降、近世までの遺跡が知られている。以上の他にも、高松遺跡の近隣に1ヶ所、矢沢中学校付近に1ヶ所、内高松付近に1ヶ所、それぞれ、未周知の遺跡が存在している。

2. 調査の方法と経過

〈方法〉

今回の調査は、東北新幹線と、それに伴う付替道路の用地になる南北150m、東西45mの範囲内を対象に実施した。平面測量原点は、新幹線ルート中軸線上の東京起点457.600km地点に設定し、F A50と名付けた。以下、序文2で述べた方法により、中軸線に平行直角に、3m×3mの方眼網を6ブロック設定し、調査区全体の地割りを行なった。遺構に関連する各種図面の基準高は、できる限り海拔118.5mに統一するように心がけた。さらに各方眼網および遺構の記名法、遺構調査の手順、その他も前記同様、序文2に述べた方法に全て準じた。

〈経過〉

調査は、昭和50年6月4日に始まり、同年7月9日に終わった。6月4日から10日までは、調査予定地内の雑物撤去を行なった。その後、6月11日から27日までは、遺構検出のための粗掘り作業を行なった。その結果、調査区の南側で、縄文晩期の遺物包含層が検出されたので、6月28日から7月8日までは、その部分の調査を行なった。そして、7月9日、一切の予定を完了し、調査を終了した。

この間、調査期間がちょうど梅雨期に重なってしまったため、度々の降水や浸透水に災いされ、調査は著しく難行した。以上のような理由により、包含層の調査に際しては、全遺物の位置関係を十分に把握できないなど、いくつかの不備が生じた。

なお、他に、調査区の一部の区域については、地形や過去の地盤削平工事の経緯などから、遺構の存在が期待できなかったため、発掘を行わなかった。

3. 調査の結果

〔1〕基準土層

高松遺跡の調査では、土層観察のため、段丘上に3ヶ所、南側緩斜面上に1ヶ所の計4ヶ所の土層観察用トレンチを設けた。その結果、土層の構成は、場所によってかなり異なる事が解った。特に、その著しい違いは、段丘上と南側の緩斜面の層序に見られる。この様子を土層模式柱状図で示すと、第1図のようになる。

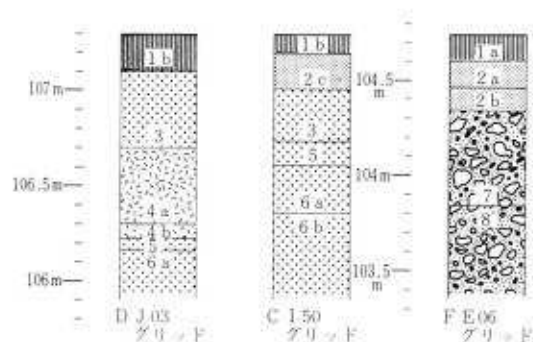
この図でも明らかのように、段丘上のD J 03グリッドの土層と緩斜面上のF E 06グリッドの土層は、層の構成上、ほとんど共通する要素が見られない。この事は、各土層の高度差の関係を反映しているものと思われる。しかし、この点についての詳細な検討は、今後の研究に期待される面が大きいので、ここでは触れないことにする。

とにかく、この遺跡では1 a ~ 1 b層が表土で、近世以降の遺物を少数含み、耕作土や山林腐植土になっている。人工遺物の含まれる層は、南斜面では2 a ~ 2 b層である。遺物はそのうちでも特に2 b層に多く含まれ、この層からは、縄文晩期の土器類を主にした遺物が、多数出土している。段丘上では、2 c層が、わずかではあるが、遺物を含む層になっている。

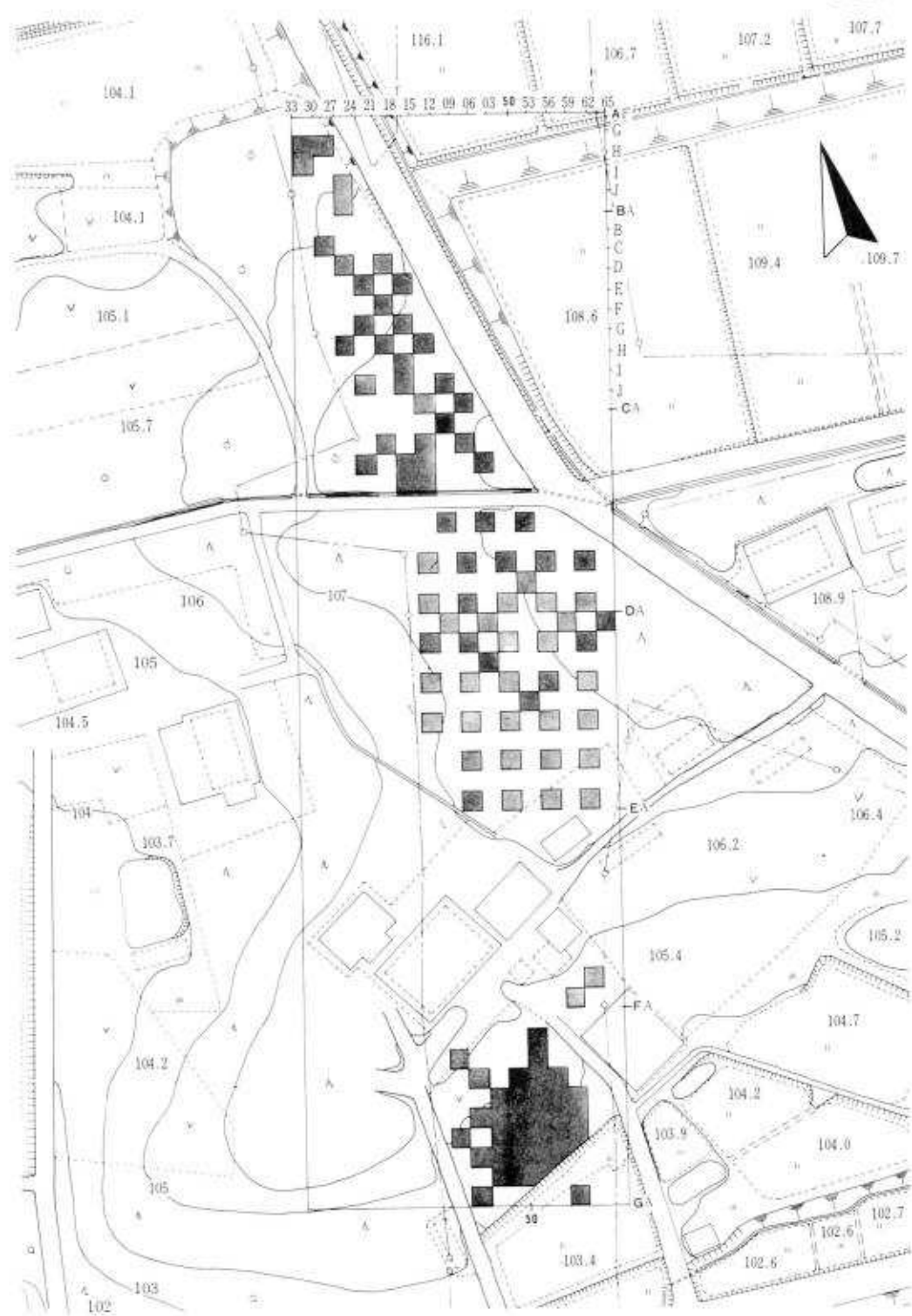
以上の層より下の層では、人工遺物の痕跡は認められない。これらの無遺物層は、段丘上で

(第1表) 高松遺跡土層注記

層番号	土色	色記号	土性	層厚	備 考
1	a	黒褐色	H 100 7.5Y R 5/2	軽粘土	15* 表土、耕作土
	b	暗褐色	" "	腐植まじり粘土	10~20 表土
2	a	暗褐色	" "	軽粘土	15
	b	暗褐色	" "	" "	12 主要遺物包含層
	c	褐色~暗褐色	" "	" "	18~20
3	a	褐色	" "	粘土	25~30
	b	褐色~暗褐色	" "	酸化した浮石層	40
4	a	暗褐色	" "	" "	竹藪野浮石層
	b	暗褐色	" "	より酸化の著しい浮石層	
5	暗褐色	" "	粘土	6~15	
6	a	暗褐色	H 100 6.5Y R 5/2	" "	15
	b	暗褐色	H 100 7.5Y R 5/2	" "	20以上
7	暗褐色	H 100 10 Y R 5/2	砂礫まじりの粘土	10	
8	暗褐色	" "	炭、砂やシルトを少量含む	20以上	



(第1図) 高松遺跡土層柱状模式図



(第2図) 高松遺跡グリッド配置図

0 30m

は、幾分成分の異なる埴土層よりなるが、所によって、地表下 0.6m～1.10m 付近に浮石層が介在する。南側緩斜面の場合、遺物包含層の下にはシルト・粘土・礫の混じった層が広がる。この層を構成する礫は、下に向かうに従って、大きさを増してゆく傾向が見られる。そして、この層は地下 0.9m 付近で、こぶし大の礫を主体とする層に移行している。

〔2〕発見遺構と遺物

（1）遺構

今回の調査では、遺構として確実なものは、ほとんど発見されなかった。わずかに、調査区の南側で、縄文晩期の遺物を主とする遺物包含層が発見され、それに伴って、小さなピット 3 個が検出されただけである。

〈縄文土器片集中区域〉（第 3・4 図、写真 2-2・3、3-1・2・3）

縄文時代晩期の遺物を主体とする遺物包含層が、F 区で発見されている。この層は、段丘の南側緩斜面の中腹部に位置し、その規模は東西約 7 m、南北約 10 m の範囲内に及んでいる。この遺物集中区域は、さらに南方に広がる様相を呈しているが、この部分は既に、開田の際に削平されているので、その正確な規模は不明である。

〔遺物出土状況〕

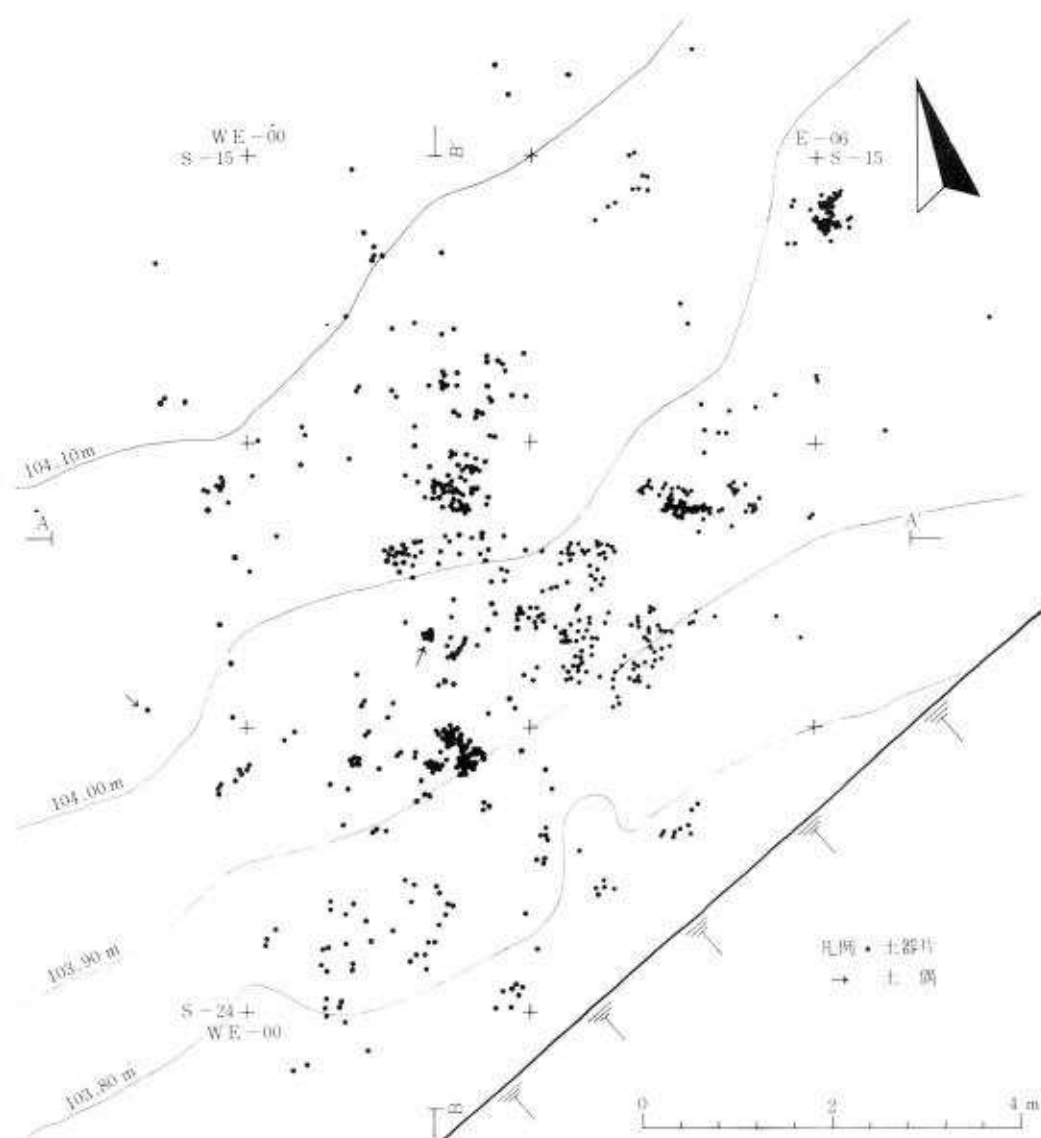
主な遺物包含層は、先に述べた 2 a 層であるが、層の保存状態は細地にもかかわらず、比較的良好で、著しい攪乱を受けた痕跡は見られない。包含層中の遺物は、ほとんど縄文時代晩期の土器片で占められ、石器やフレーク類はほんの少数しか見られない。他に遺物としては、土偶が 2 点出土している。

包含層中の土器片の出土状況を見ると、大部分の土器片はまとまりがなく、バラバラに投げ捨てられた状態で出土している。しかも、これらの土器片は、数の多い割に、接合できる破片の数が著しく少ない。石器やフレークは、これらの土器の間に混って、ごく少数、点在しているだけで、土器片同様に分布の状態には規則性が見られない。土偶は、この区域の中央部と北辺部から、それぞれ出土しているが、いずれも破片で、有意性のある配置状況は観察されなかった。

さらに、この包含層中には、礫が多く含まれている。この礫は、特に包含層の下部に多く見られるが、その下に続く礫まじりの層に由来するものか、あるいは、土器片などとともに、他から持ち込まれたものなのか不明である。いずれ、周辺部に礫がほとんど見られないだけに、注目に値する現象である。

〈ピット〉（第 3・4 図、写真 3-1）

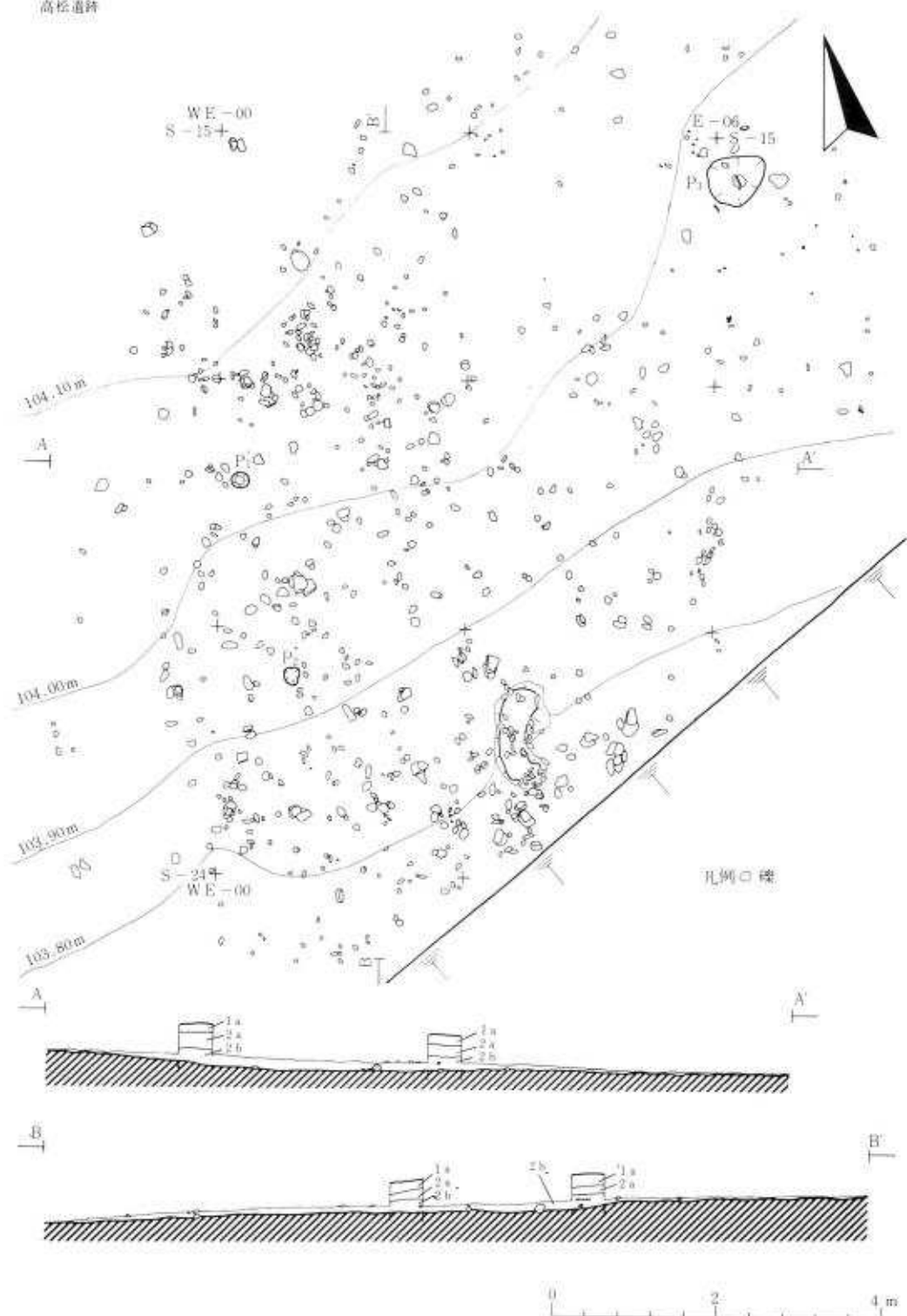
上記の遺物包含層に付随した形で、P₁・P₂・P の 3 つの小さなピットが発見されている。そ



(第3図) 縄文晩期遺物包含区域における土器片の出土状況平面図

のうち、 P_1 は直径20cmの同筒状ビットで、遺物包含層の下面より深さ約0.07mを測る。 P_2 は長径0.22m、短径0.18mの平面長楕円形ビットで、深さは同じ包含層の下面より約0.08mを測る。 P_3 は、長径0.35m、短径0.3mの不整楕円形ビットで、深さは、包含層の下面より約0.07mを測る。このビットは、他の2つのビットが遺物を伴わないのに対し、壺の破片1個体分と礫3点を出土している。

ビットの埋土は、 P_1 ・ P_2 が2 a層と同質の黒褐色土であるのに対し、 P_3 では地山の土とほとんど同じか、やや暗いくらいの明黄褐色埴土層である。これらのビットは、遺物包含層の広が



(第4図) 縄文晩期遺物包含区域における礎の出土状況平面図および土層断面図

る場所を住居跡などの施設と考えた場合にその付属遺構と見なすことも可能であろう。しかし、ここからは、居住性遺構の存在を示唆する確証は、他に発見されなかった。

(2) 出土遺物

今回の調査で発見された遺物は、総点数2894点に及んでいる。そのうち、大部分は、縄文時代の土器片で占められ、その総点数は2796点に及んでいる。土器片以外の出土遺物としては、石材や石器類が見られる。しかし、その出土点数は、土器片と比べて遙かに少なく、石材は全体で55点、石器類は8点をそれぞれ占めているに過ぎない。その他、特殊な遺物として、土偶2点があげられる。

これらの遺物は、大部分がF区の遺物包含層中から出土したもので、時期的には、ほとんどが縄文時代晩期に属するものである。その他の時期の遺物としては、縄文時代早期末～前期初頭・中期および奈良時代ないし、平安時代の土器片および近世以降の陶磁器片などが少数ずつであるが、調査区内の各所から発見されている。

〈縄文土器片集中区域の遺物〉 (第3・5～7図、第2・4表、写真4-1、5-1～7)

A. 土器類

この区域内の出土遺物は、先にも述べた様に、ほとんど縄文時代晩期の土器片である。その大部分は、器面の風化が著しく、全形を修復できる個体はほとんど見られない。

比較的保存状態の良好な破片でみると、器形としては深鉢・浅鉢・高台付土器・壺などに分類される個体の破片数が多い。しかし、遺物整理が充分進んでいないので、その全体的な組成比率は不明である。そこで、ここでは一応、第5・6・7図に各器形の代表例をあげて、この区域内から出土した土器類の特徴をみてゆくことにしたい。

・口辺部、胴部破片

口辺部および胴部の破片資料は、形態文様上の特徴から次の14類に分類される。

I 群

I 群に分類された土器類は、いずれも縄文晩期末の大洞A^(注2)式土器に比定される土器類である。I 群はさらに4種類に細分される。

1 類 (第5図1～3、36～38、第6図4～7、第2表、写真5-1・4・5)

これらの土器は、胎土中に砂が多く混入した縄文晩期の粗製土器で、器形としては、深鉢や甕類が見られる。

(形態) 第5図の口辺部資料でみると、口辺部の形には1・2・3の様な平縁のもの、36の様な鋸歯状口縁のもの、37の様な起伏の緩やかな波状口縁のものが見られ、38の様な装飾のための突起ある個体も若干見られる。しかし、数量的には平縁のものが多く。

口辺部の立ち上がりの形状を見ると、全体的に胴部上端がやや内側にくびれ込み、そこか

ら口唇部に向かってゆるく外反する形状を呈する個体が、ほとんど全部を占めている。口辺部と胴部の境界は、第5図1・2・36・37・38のように緩くくびれるだけの例が比較的多いが、3のように小さな段になる例や、一条の沈線がめぐる例も見られる。

(文様) 口辺部は、ほとんど無文帯になっており、文様は、一般に胴部外面部全体に施されている。文様は、ほとんどR<|燃りの原体(S字燃り原体)の縦方向回転押圧による、右上がり単節斜縄文である。器面に残る各節の粒径は、長径で2~4mmを測り、比較的大粒な感じを与える。

2類 (第5図4~14、19~21、27~33、第6図1~3、13~16、18・19、第2表、写真5-2、5-7)

これらの土器は、1類の土器と比べて胎土が緻密で、混入物の少ない精製土器である。この中には、浅鉢・小型甕・台付土器などの器形が含まれている。しかし、この種の土器には、全形修復可能な個体がないため、個々の破片による器形の細分は非常に困難である。但し、各破片にみられる形態、および文様構成の違いによって、いくつかの細分が可能である。

(形態) 例えば、口辺部の形態についてみると、第5図4・5・8・12・13・14・20・21などの様な平縁と思われる例もある。その他、6・7・10・11・22・27・28・29・30・31・32・33にみられる様な波状口縁の例もある。さらに、波状口縁は6・7・11の様な2つの波頭を持ち、起伏の緩やかな種類のもの——aや、22・28の様な平頭で、比較的起伏の大きなもの——b、あるいは27・31の様な片寄せ波状のもの——c、そして、29のように波頭部分が口唇部を走る沈線によって2分されるもの——dなど、幾つかの種類に細分される。32・33は、これらの波状口縁と対になる、装飾性の強い波状突起の破片——eと思われる。

また、口辺部の立ち上がりの形状を見ると、aないしbの口縁を有する個体では直線的に外傾するか、緩く内弯しながら外傾する例が多く、口唇部がわずかに外反する例もみられる。cの口縁部を有する個体では、強く外傾する胴部上端が、断面逆「く」の字形になるように強く内弯し、そこに直立、ないしやや外傾する口唇部の取りつく形が一般的である。dの口縁を有する個々は点数が少ないが、小型の甕と思われる資料である。この種の土器では、胴上部が内弯気味に外傾し、その上端部に小さく外反する口辺がついている。

(文様) 口辺部周辺の文様についてみると、これらの土器の外面は、いずれも口辺部から胴上部にかけて沈線による平行縄文、ないし変形工字文を主体とする文様帯で飾られている。これらの沈線文には、大抵の場合、小さなイボ状突起が伴っている。文様帯には、幾つかの種類が見られる。

第5図6・7・10、第6図16は、aタイプの波状口縁を有し、細かな右上がり単節斜縄文の地に、細い沈線による変形工字文が描かれている例である。11もやはりaタイプの波状口

縁を有する個体であるが、ここでは、無地文にやや太めの沈線によって、やや扁平な変形工字文が描かれている。また、bタイプの波状口縁を有する22や28では、無地文の上にやや太めの沈線によって、変形工字文が描かれている。また、cタイプの波状口縁を有する27・31などの個体でもbタイプの例と同様、やや太めの沈線による変形工字文が施されている。dタイプの波状口縁を有する29などでは、無地文に比較的細い沈線による変形工字文が描かれている。

また、平線のものについて見ると、4・5・14・20、第6図13などの様に無地文にやや扁平な沈線による変形工字文、ないし平行沈線文の施される例がみられる。

さらに、これらの土器の文様を沈線文様帯以外の胴体部分についてみると、20・21や第6図18・19などのように縄文が施されている例と、第6図1・13のように文様が施されない例の2種類がある。いずれも、ごく普通にみられるタイプである土器に、縄文が施されている場合、縄文の大部分がS字燃りの原体を縦回転させた、右上がりの単節斜縄文で占められている。縄文の節々の径は、一般に、I-I類の土器で観察されるものより、一層細やかである。無文の場合、保存状態の良い個体でみると、その部分全体にヘラ磨きの施されているのが認められる。

さらに、波状口縁の場合、どのタイプのものでも、口唇部上面に大抵1条の沈線を伴っている。この沈線は、波状部分で切れているが、29のようなdタイプの土器では、沈線が波状部分にも及んでいる。

その他、口唇部の内側には、小さな段、ないしは沈線が1条めぐっている例が多く見られる。さらに、保存状態の良い破片を見ると、内面にヘラ磨きの痕跡のあるものも見られる。

3類 (第5図15~18・22~26・34、第6図9~12・17、第7図10~14、第2表、写真5-1~7、4-1・2・5・6)

I-3類に分類される土器は、ほぼ2類の胎土と同様の胎土を有する精製土器である。器形としては、壺類が考えられる。

(形態) この種の土器の口辺部は、胴上部から筒形をなす様に直立、ないしは外反している。その口唇部は、第5図15・16・17・18、第7図19の様に平縁をなす場合——aと、第5図23・24・25・26、第7図11・14の様に波状をなす場合——bの2種類がみられる。さらに後者は、第5図23の様に大小の起伏の波形が交互に並ぶもの——b₁、第5図24~26・第7図11・13などのように、ほぼ同形の波形が並ぶもの——b₂の2種類に分類できる。この波形は、図上復元によって6、ないし8個の波頭が対をなしている事が知られる。

(文様) 口辺部の外側の文様は、aタイプの口縁を有する個体では、口唇部に沿って小さなイボ状突起を伴う、やや太めの沈線が1ないし2条めぐり、さらに、沈線に接する部分ほ

場合によっては細い隆帯になる事もある。その周辺部は、一般に無文であり、ヘラ磨きされている。口唇部の内側には、普通沈線が1条めぐっているが、口唇部の上面には沈線が見られない。

もタイプの口縁を有する個体では、大抵の場合、口縁部に沿って沈線、ないし削り出し加工による波状文が描かれている。しかし、中には第7図13のように、1条の沈線が口唇部をめぐる例も見られる。この場合、沈線に沿った部分に細い帯状の隆起が見られる。しかし、いずれの場合にも文様体の周囲は無文帯になり、その一部には、ヘラ磨きの痕跡が見られる。さらに、波頭部分を除いた口唇部上面、および内面には、普通それぞれ1条の沈線がめぐり、この部分にも、ヘラ磨きの痕跡が見られる。

また、胴部の形状を見ると、幾分肩の張った個体が多く見られる。肩の部分には、第5図34、第6図9・10・11・17、第7図10・13の様に小突起を伴った変形工字文の文様帯がめぐる場合もあるが、第7図11の様に無文の場合もある。その他、平行沈線文や縄文の施される例も予想されるが、今回の採集資料の中では確認されていない。

肩の部分を除く胴部全体には、第7図10のようにR<上原体(S字摺り原体)を縦ないし横に回転させた単節斜縄文が施されている例が見られる。その他、無文のものも知られている。

4類 (第5図35、第2表、写真5-4上右)

土器片の中には、第5図35の様に平縁で、口辺部から胴部にかけて単節斜縄文の施される例が、いくつか見られる。土器片の胎土は、1-1類の胎土に似ており、砂などの混入物が多い。縄文は、1-1類に比べて細かくなっており、原体は、やはり他の例と同様R<上摺りの原体(S字摺りの原体)である。出土資料が細片であるため、器形の知られるものはないが、破片全体の形状からは、小型の器種が想定される。なお、第5図35に掲げた資料には、器体の一部に補修のために穿けられたと思われる小孔が1つ、ついている。

II群 (第6図20、第2表、写真5-2下右)

縄文晩期の土器片に混入する形で、その前後の時期の土器片が少数出土している。II群に分類された資料は、弥生時代中期の土器と考えられる破片で、1点のみ出土している。この土器片は、やや混入物の多い胎土よりなる粗製土器の甕、ないし壺類の胴部破片と思われる。類似資料は、陸前高田市の長洞遺跡や岩手町乙茂内の資料中にも見られる。⁽¹³⁾ 时期的には、一関市谷起島遺跡の弥生式土器などより若干下った時期に位置づけられよう。

文様は、器壁の外面のみに施されている。文様の構成は、縄文帯と擦り消しの無文帯が沈線によって「コ」の字状に交互に区画されて、一種の入り組み文になっている。沈線は巾2mm前後で、断面V字形を呈し、縄文帯の文様は、L<上原体を横に回転させた単節斜縄文よりなっている。

III群 (第6図26・27、第2表、写真6-1上左・中)

III群に分類される土器は、無文の比較的器壁の厚い粗製土器で、2点出土している。胎土中には、粒子の粗い砂が比較的多く混入している。器形としては、深鉢などが推定される。第6図26・27とも口辺部、ないしその周辺部の破片であるが、26では、1条の隆帯が横方向に走っている。時期的には、縄文時代中期に属するものと思われるが、その詳細な時期は不明である。

IV群 (第6図28~30、第2表、写真6-1上右、左~中)

IV群に分類される土器類は、3類と同様の胎土よりなる厚手の粗製土器である。器形としては、やはり深鉢などが推定される。この土器類は平縁で、口唇部には隆帯がめぐり、その下部には三角柱状原体の刺突によって、鋸歯状文が施されている。さらに、その下方部には、半切竹管同様によって、横方向の鋸歯状沈線文と平行沈線文が交互に施されている。さらに、29では、これらの沈線文や隆帯に直交する形で粘土紐が張りつけられ、その上に、横方向の刻目が施されている。

これらの土器類と近似した土器類は、盛岡市大館町遺跡^(注5)のIV a群2類b、II類aに分類された土器類や宮城県楯塚貝塚IV群、長根貝塚三群2類、大迫町天神ヶ丘三群1類の一部に見られる。様式的には、縄文時代中期初頭の大木7 a式ないしは、熊塚式などと呼称されている土器群の一部に比定される資料である。

V群 (第6図31、第2表、写真6-1中右)

V群に分類された資料は、胴体部の破片1点のみが出土しており、器形は深鉢と思われる。この土器の胎土中には、植物繊維が多量に含まれ、石英を主とした砂も若干含まれている。文様は、土器の外面に施された太めの単節斜縄文よりなる。この単節斜縄文は、 $L < \frac{R}{2}$ 捻り(S字捻り)の原体を縦方向に回転押圧して施されたものである。この地方では、胎土中に植物繊維を多量に混入した土器類が、一般に、縄文早期末から縄文前期初頭にかけて多くみられる。本資料も、大体その時期に位置づけられるであろう。

VI群 (第6図32、第7図1、第2表、写真6-1下右、2上左)

VI群に分類される土器は、胎土中に砂の混入する比較的薄手の土器で、胴部破片が1点出土している。この土器の胎土のしまりは、2-5類に比べると幾分強めである。

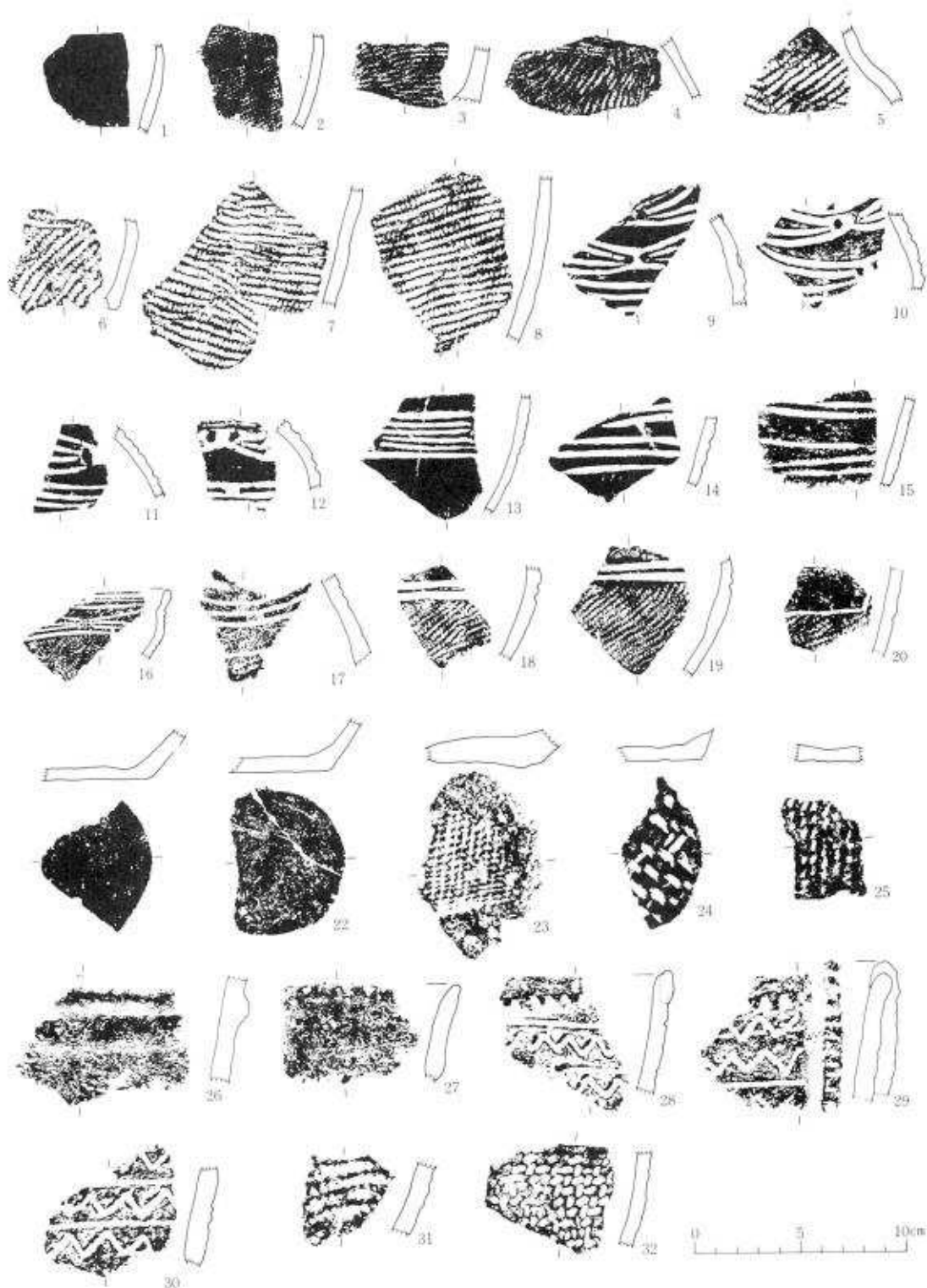
文様は、器壁の外面にのみ施された丸組み紐の斜め回転押圧痕文よりなる。同様の土器片は、紫波町杉ノ上III遺跡^(注9)などからも出土しており、縄文前期初頭に位置づけられる資料である。

VII群 (第7図2・5、第2表、写真6-2上中、下中)

VII群に分類される土器は、胎土中に砂が多量に混入する厚手の粗製土器である。この土器類は、器面に縄の結び目の縦方向回転による綾絡文が縦に走り、第7図2のように、縄文のみられるものもある。その詳細な時期は不明であるが、類似した文様は、県内各地の縄文前期後半



(第5図) 高松遺跡出土土器拓本および断面実測図(1)



(第6図) 高松遺跡出土土器拓本および断面実測図(2)

～中期前半にかけての遺跡に多く見られる。

Ⅷ群 (第7図3、第2表、写真6-2下左)

Ⅷ群の土器は、7と同様の粗製土器であるが、若干、粘土が硬くしまっている。土器の文様は、単節斜縄文で、それに沈線区画による無文帯が伴っている。第7図7は、口辺部資料であるが、沈線の一部が早蕨状に巻いている。

Ⅸ群 (第7図4、第2表、写真6-2下左)

この種の土器は、微隆起線で区画された無文帯を有する厚手の粗製土器1片の出土である。この土器は、縄文時代中期末、大木10式期の擦り消し無文帯を有する土器の破片と思われる。

・底部・脚部破片 (第6図21-25、第2表、写真5-3)

土器の底部および脚部の破片は、合計123点出土しているが、その大部分は、縄文晩期のものであると推定される。文様の不明な脚部の小破片9点を除く、114点が底部破片である。そのうち、4点の丸平底風の土器の底部破片を除いて、残りの110点はすべて平底である。そのうち、風化が著しく、器面観察の不能な破片32点を除く78点について、敷物の圧痕の有無を調べた結果、75点は無文で、残り3点のみに網代の圧痕が見られた。第6図21・22は、無文の底部の例である。

網代の圧痕の見られる土器片は、いずれも粗製土器の底部と思われ、胎土中には混入物が多く、しまりは幾分粗である。

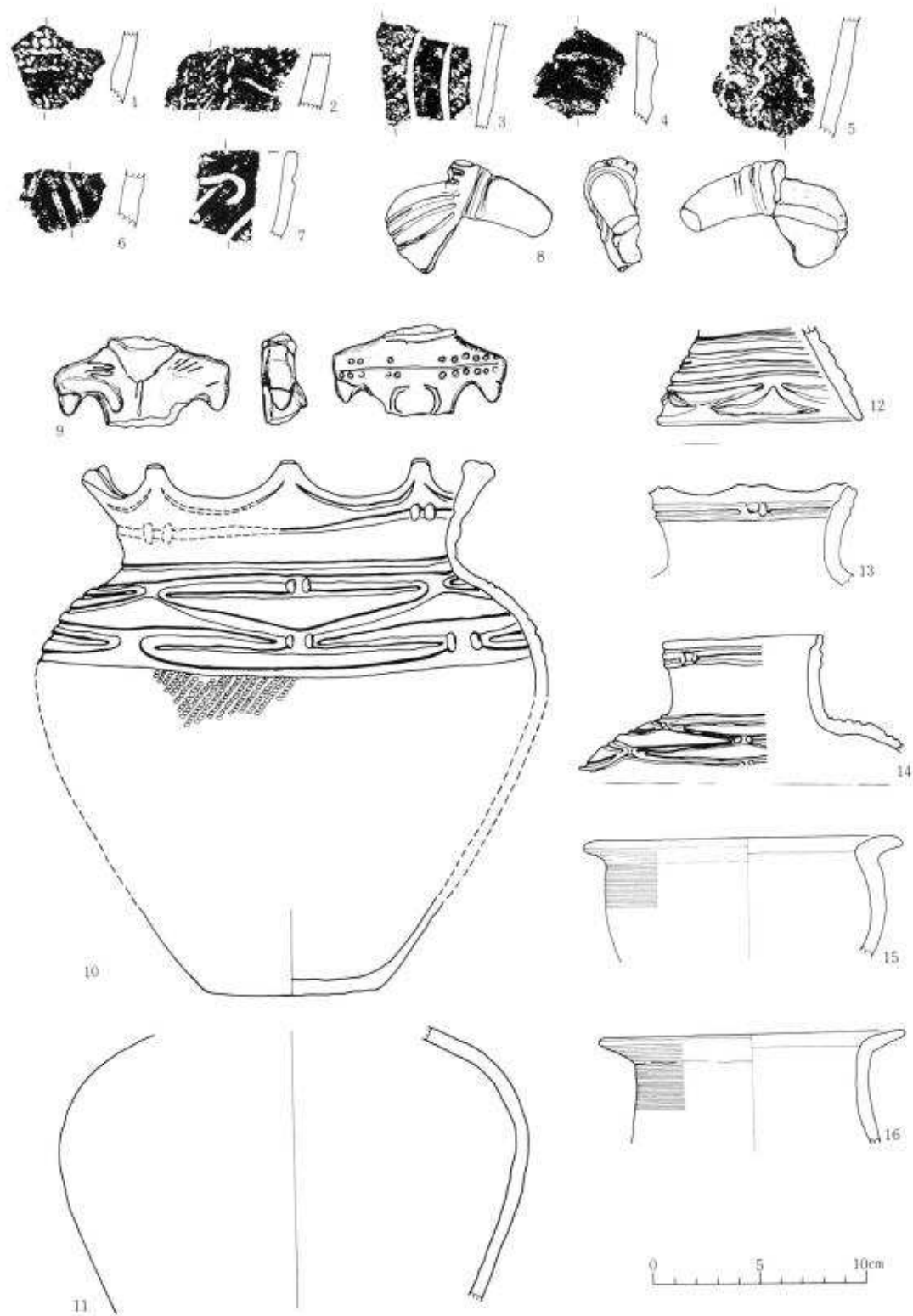
網代の圧痕のうち、第6図23は横方向2本潜り、1本越え、縦方向2本潜り、1本越え、1本送りで編まれた網代原体の圧痕である。24は、横方向1本潜り、2本越え、縦方向2本潜り、1本越え、1本送りで編まれた網代原体の圧痕である。25は、風化がかなり進んでおり、圧痕の種類の判別は困難であるが、24と同種の原体圧痕と推定される。

・ミニチュア土器破片

以上、みてきた一般の土器類の他に、ここからは、掌の中に収まるくらいの大きさの小型土器類の破片が11点(口辺部5、胴部1、底部5)出土している。その中には、鉢型や壺型・深鉢型などの器形がみられる。いずれも風化の著しい小破片であり、その用途は不明であるが、小型容器、ないしは祭祀用供献具などの性格が予想される。

B. 土偶 (第7図8・9、第2表、写真4-4)

土偶は2点出土しているが、いずれも破片である。これらの土偶は、縄文時代晩期の大洞A式土器に伴う土偶である。8は土偶の右胸部から腕部にかけての破片である。その胸部には、平行線状の沈線が3条以上走っている。その他、腕のつけ根にも沈線が見られる。9は8よりやや小型の土偶で、胸部に両腕部のついた破片である。この土偶のやや厚い板状の胸部には、乳房の象徴化された粘土紐が胸の部分から腕の脇の方に向かって付けられている。但し、粘土



(第7図) 高松遺跡出土土器拓本および実測図(3)

紐は左胸部では、破損のため欠落している。さらに、両肩部には、横方向のU字状の沈線2条が走っている他、頸部を取りまき、胸部中央を区切る沈線も見られる。また、腕の部分にも1条の沈線がめぐっている。

沈線は、さらに背部にも施され、ここでは、横方向の沈線の上下に円形の竹管文がならんでいる。その他、腰部には、やはり沈線で半円状の2条の沈線が内彎部を向き合わせるよう施されている。

(第2表) 出土土器観察表

図番	高さ	口径	出土遺物	器種	出土部位	色調	胎土	口辺彩	文様・模様	その他	寸法	特徴
1	1.5	1.5	土器片	深鉢	口辺部	赤褐色	中	なし	なし	右肩部半圓形沈線(巻き上げ)	1-1	破損
2	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	横線	*	*
3	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	*	*	*
4	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	内面横線、巻き線、口辺沈線1条、外面半円沈線	1-2	*
5	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	*	*	*
6	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	体部(内彎部)に横線、右肩部半圓形沈線、口辺部(口)に沈線1条	*	*
7	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	体部(内彎部)に横線、右肩部半圓形沈線、口辺部(口)に沈線1条	*	*
8	1.5	1.5	土器片	口辺部	*	赤褐色	*	*	*	体部(内彎部)に横線、内面口辺部沈線1条、口辺部(口)に沈線1条	*	*
9	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	*	*	*
10	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、体部(内彎部)に横線、口辺部(口)に沈線1条	*	*
11	1.5	1.5	土器片	口辺部	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
12	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
13	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
14	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
15	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
16	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
17	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
18	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
19	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
20	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
21	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
22	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
23	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
24	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
25	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
26	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
27	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
28	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
29	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
30	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
31	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
32	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
33	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
34	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
35	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
36	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
37	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
38	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
39	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
40	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
41	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
42	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
43	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
44	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
45	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
46	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
47	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
48	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
49	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*
50	1.5	1.5	土器片	*	*	赤褐色	*	*	*	口辺部(口)に沈線1条、沈線による変形文字	*	*

図番	宗 門	出土遺構	遺 構	出土部位	色 調	特 徴	出 土 形 状	文 物 種 別	考 古 的 意 義	発 見 時 期
1	5-1	平石5.6	遺	堀	橙	硝基、硝注		内面は滑合で造り、外面無文(平石5.6)		1-2 縄文時代
2	5-1	平石5.1	?		灰黄緑	?		外面有土層の縄文。(照)		?
3	5-1	平石5.1	?		灰黄緑	?		?		?
4	5-1	平石5.1	遺	堀(土層)	橙	硝基硝注		?		1-1 ?
5	5-1	?	?		紅褐色	硝		外面有土層縄文。(硝)		?
6	5-1	平石5.6	深林	掘下土	明黄褐色	?		右上に土層縄文、横溝縄文		?
7	5-1	?	?	掘下土	?	?		?		?
8	5-1	平石5.6	?		?	?		横溝縄文?		?
9	5-1	平石5.6	遺	掘下土	紅褐色	硝基硝注		外面有土層文字(平石5.6)		1-3 ?
10	5-1	平石5.6	?		橙	?		?		?
11	5-2	平石5.2	?		?	?		?		?
12	5-2	平石5.4	?		紅褐色	?		?		?
13	5-2	平石5.1	深林	?	?	?		外面有土層縄文、横溝硝注		1-1 ?
14	5-2	平石5.6	?		橙	?		外面有土層文字(平石5.6)		?
15	5-2	平石5.1	?		明黄褐色	?		?		?
16	5-2	?	?		橙	?	内面有土層硝注	硝注塗布した土、外面有土層縄文		?
17	5-2	平石5.4	遺	?	灰黄緑	硝基硝注	硝注	硝注塗布		1-3 ?
18	5-2	平石5.1	深林	?	紅褐色	硝基硝注		?		1-2 ?
19	5-2	?	?		?	?		?		?
20	5-2	平石5.1	?		紅褐色	硝基硝注		内面有土層縄文(平石5.1)		11 縄文中期
21	5-4	?	?	深林	明黄褐色	硝基硝注		無文、横溝無文		1 縄文時代
22	5-4	?	?		橙	?		有土層の縄文、横溝無文		?
23	5-4	平石5.6	?		?	硝		明瓦瓦		?
24	5-4	平石5.4	?		灰黄緑	硝基硝注		?		?
25	5-4	?	?		紅褐色	?		?		?
26	5-4	?	?	掘下土	灰黄緑	硝基硝注		硝注塗布した土		11 縄文中期
27	6-1	?	?	口周	橙	硝、硝注	硝基硝注した土	無文		?
28	6-1	平石5.6	深林	?	紅褐色	硝	硝注	内面に土層の縄文、硝注塗布あり		11 ?
29	6-1	平石5.3	?		橙	?		内面に土層の縄文、硝注塗布あり、横溝硝注あり		?
30	6-1	平石5.6	深林	掘下土	紅褐色	硝、硝注	硝注	土層縄文、横溝の縄文(平石5.6)		?
31	6-1	平石5.6	?	掘下土	?	?		土層縄文、横溝硝注		11 縄文早期
32	6-1	平石5.6	?		明黄褐色	硝基硝注		硝注		11 ?
33	6-1	平石5.6	深林	掘下土	紅褐色	硝基硝注		硝注		11 縄文前期
34	6-2	平石5.6	?		紅褐色	硝基硝注		土層縄文、横溝の縄文		11 ?
35	6-2	平石5.6	?		紅褐色	硝基硝注		内面に土層の縄文(平石5.6)		11 縄文中期
36	6-2	?	?	掘下土	橙	硝基硝注		硝注		11 縄文中期
37	6-2	?	?	掘下土	?	?		硝注		11 縄文中期
38	6-2	平石5.7	?		?	?		土層縄文(平石)		11 縄文前期
39	6-2	平石5.6	?	口周	?	硝基硝注	硝注	内面に土層の縄文(平石)		11 縄文中期
40	6-4	?	?	掘下土	?	硝基硝注		泥に土層硝注、硝注塗布あり、横溝の縄文		?
41	6-4	平石5.6	遺	口周(堀)	明黄褐色	硝基硝注	泥に土層硝注	口周掘下土に土層縄文、口周掘下土に土層硝注		1-3 ?
42	6-2	平石5.3	?	掘下土	紅褐色	硝基硝注		横溝(平石5.3)に土層硝注		?
43	6-2	平石5.6	高石付(深林)	高石	橙	硝		内面土層硝注、外面有土層の縄文(高石)		?
44	6-5	?	?	口周(掘下土)	?	硝基硝注	硝注	内面土層硝注、外面有土層の縄文(掘下土)		?
45	6-5	?	?	掘下土	?	硝基硝注	硝注	内面土層硝注、外面有土層の縄文(掘下土)		11 縄文早期
46	6-5	平石5.6	深林	掘下土	紅褐色	硝基硝注		?		?

C. 石器 (第8図1～9、第9図1・2・4、第3表、写真6-3～6・7)

石器と思われる遺物は、13点出土している。そのうち、第8図8・9、第9図2・4を除いた大部分の石器は、不定形のフレークの側面に、一部チッピングを施したナイフ状石器である。その長さは、大きいもので7.95cm、小さいもので3.95cmを測る。中は、6.3cm以下2.7cmまでを測り、厚さは1.8cm以下0.4cmまでを測る。石器の材質としては、玉ずい、めのうなども見られるが、大部分は硬質頁岩・珪質石質細粒凝灰岩・泥質石質凝灰岩などの堆積岩類である。

第8図8・9は、フレークの一部に抉りがあり、その部分にチッピングの見られる個体である。その材質をみると、8は泥質石質凝灰岩であり、9は硬質頁岩である。

第9図4は、石錐、ないしつまみつきのナイフ類の未製品である。材質は、珪質石質凝灰岩である。第9図2は、石斧状打製石器の上部破片である。この石器は、黒色のホルンフェンス化した粘板岩の板状素材の側面を、細かく打ち欠いて作られている。

D. 石材 (写真7-1～3、8-1～4)

石器の素材として利用されたとと思われるフレークや原石類が、全部で56点出土している。その中で最も多い材質は、硬質頁岩・珪質石質細粒凝灰岩・泥質石質凝灰岩などで、珪化木も比較的多い。その他、少数であるが、チャート・めのう・石英・鉄石英・黒燐石・鉄蛋白石・ホルンフェンス化した粘板岩などが見られる。これらの石材のうち、頁岩・凝灰岩類は奥羽山脈が主要な原産地とされている。また、珪化木および鉄蛋白石は、この遺跡周辺の新生代第三紀の稲瀬層中に、その起源をもつと推定される^{注31}。

〈ピット3の出土遺物〉 (第7図、第2表、写真4-1)

ピット3からは、第7図10に掲げるような4対の波頭をもち、肩部が沈線による変形工字文の施された波状口縁の壺の破片が、ほぼ1個体分出土している。この壺は、1-3類の精製土器で、器面の風化が著しく、施された文様が損われている。その形態文様上の特徴については、先に述べた包含層出土の土器類の項で触れているので省略する。

〈各グリッド内の遺物〉

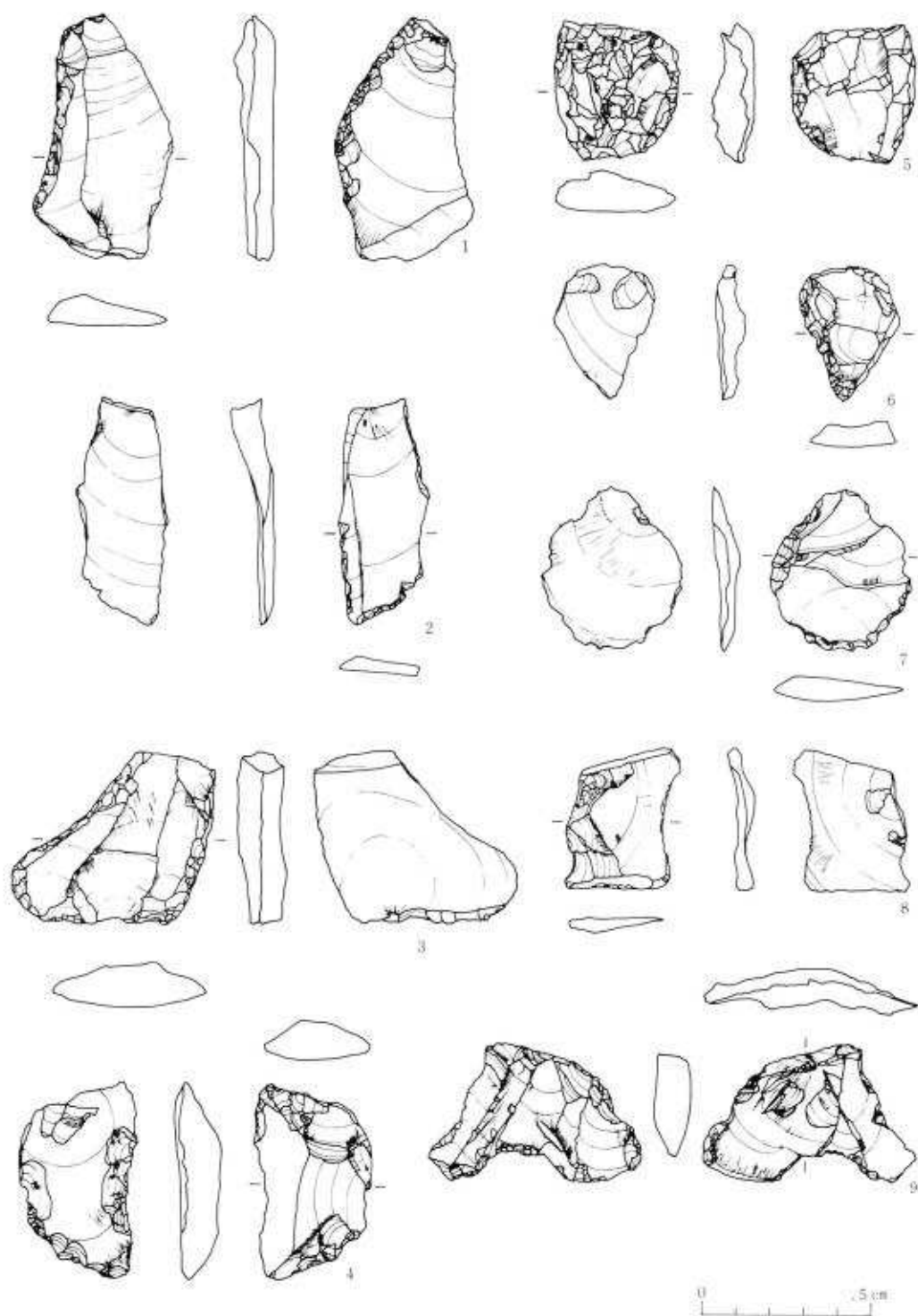
縄文土器の集中区域以外に、周辺の各グリッド内から、土器片や石器が出土している。これらの遺物は、発掘前に表面採集されたり、粗掘り時に埋土中から発見されたものである。

A. 土器 (第7図6・12～16、第2表、写真6-2、4-3、5-7)

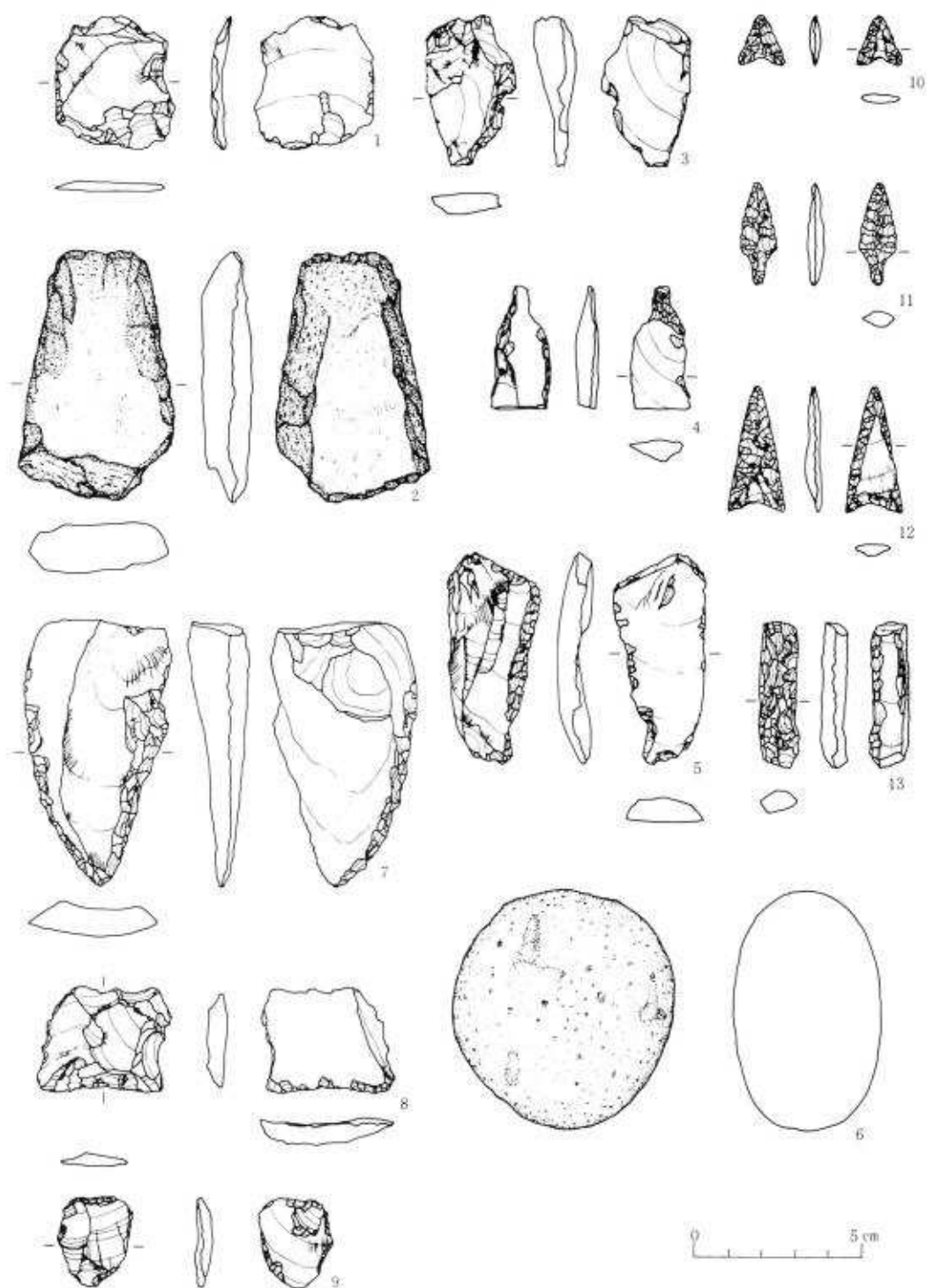
縄文土器 (第7図6・12、第2表、写真6-2、4-3)

第7図6はA127グリッド内で出土した厚手の粗製土器である。その外面には、木目状の捺糸文が施されている。一般に、この種の文様の施された土器は、縄文前期の円筒式土器に多く見られるが、大木式土器の中にも若干の例が知られている。

同じ図の12は、CJ09グリッド内から出土した縄文晩期の台付土器の高台部破片である。こ



(第8图) 高松遺跡石器類実測図



(第9圖) 高松遺跡石器類実測図

(第3表) 出土石器一覧表

図版番号	写真番号	出土遺構	器 種	最大長	最大巾	最大厚	重 量	材 質	備 考
8 - 1	6-3	FF03	不定形刃器	7.95cm	4.4 cm	1.8 cm	44 g	泥質石質凝灰岩	
2	6-3	FF03	不定形刃器	6.7 cm	2.7 cm	1.0 cm	9.9 g	泥質石質凝灰岩	
3	6-3	FE06	不定形刃器	5.1 cm	6.0 cm	1.4 cm	38 g	泥質石質凝灰岩	
4	6-3	FF03	不定形刃器	5.85cm	3.5 cm	1.3 cm	25.3 g	硬質真岩	
5	6-4	FF03	不定形刃器	4.1 cm	3.7 cm	1.25cm	20.3 g	玉 す い	
6	6-4	FF03	不定形刃器	4.0 cm	3.0 cm	0.85cm	8.4 g	め の う	
7	6-4	FF03	不定形刃器	4.8 cm	4.15cm	0.7 cm	12.8 g	泥質石質凝灰岩	
8	6-4	FF03	不定形刃器	4.2 cm	3.4 cm	0.5 cm	6.6 g	泥質石質凝灰岩	ノーチ有り
9	6-4	FF03	不定形刃器	4.1 cm	6.3 cm	1.05cm	23.2 g	硬質真岩	ノーチ有り
9 - 1	6-7	FC50	不定形刃器	3.95cm	3.55cm	0.4 cm	6.1 g	硬質真岩	
2	6-5	FF03	石器状 打製石器	7.5 cm	4.65cm	1.5 cm	63.7 g	精 極 岩 ホルンフェルス	
3	6-7	FJ09	不定形刃器	4.5 cm	2.65cm	1.2 cm	11.1 g	硬質真岩	
4	6-6	FD12	不定形刃器	3.7 cm	1.8 cm	0.7 cm	4.3 g	泥質石質凝灰岩	
5	6-7	BC21	不定形刃器	6.3 cm	2.8 cm	0.9 cm	9.9 g	硬質真岩	
6	6-5	BB19	円 磯	7.2 cm	6.65cm	4.4 cm	288.3g	輝石安山岩	
7	6-5	不 明	不定形刃器	7.95cm	4.4 cm	1.8 cm	44 g	泥質石質凝灰岩	
8	6-7	不 明	不定形刃器	3.2 cm	4.0 cm	0.55cm	9.2 g	流 紋 岩	
9	6-7	不 明	不定形刃器	2.7 cm	2.25cm	0.5 cm	2.6 g	硬質真岩	
10	6-6	不 明	石 鉄	1.5 cm	1.35cm	0.3 cm	0.5 g	硬質真岩	
11	6-6	不 明	石 鉄	3.05cm	1.1 cm	0.5 cm	1.3 g	硬質真岩	
12	6-6	不 明	石 鉄	3.75cm	1.7 cm	0.45cm	2.2 g	硬質真岩	
13	6-6	不 明	石錐未製品?	4.35cm	1.2 cm	0.75cm	5.2 g	硬質真岩	

の土器の胎土は、比較的精選されており、混入物は少ない。器壁の外表面は、全体によく研かれている。文様としては、上部に横方向の平行沈線が見られるほか、底辺部には、三角形と逆三角形の組み合わせ文様が施されている。様式的には大洞A式に比定しうる資料である。

土師器 (第7図、第2表、写真4-3)

その他、FF03、FJ03グリッド内からは、第7図15・16に示す様な土師器と思われる無文の土器片が出土している。これらの土器は、いずれも粘土紐の巻き上げなどの技法によって作られており、ロクロ調整の痕跡は認められない。その口辺部は、著しく外反し、ほぼ水平に近くなっており、口辺部の周囲には、横方向のナデ痕が見られる。时期的には、奈良時代頃に属するものと推定されるが、確実な時期は解らない。以上の土師器のほか、FC09グリッド内からは、内黒の土師器の坏の口辺部破片が1点出土している。

近代・現代の陶磁器・土器

また、AG30、FF03、FF56、FG53の各グリッド内の表土中からは、近代以降の所産と

推定される焼物の破片が1点ずつ出土している。そのうち、A G 30グリッドから出土したものは、鋳器で小型の盃と思われる。F F 03グリッドのものは陶器の土瓶で、F F 56グリッドのものは柘器の小型甕ないし銚子と思われる。F G 53グリッドからは土器片が出ているが、その器種は不明である。

B. 石器 (第9図5～13、第3表、写真6-5～7)

その他、縄文時代の石器が調査区内の各所から出土している。そのうち、5・7・8はフレークを利用したナイフ類と思われる。そのうち、5・7は縦長のフレークの1辺、ないし2辺の片面にチップングを施したものである。8は方形に近いフレークの1辺の片面にチップングを施したものである。

9は石鏃の未製品と思われる、やや不整の隅丸三角形の小型の石器である。最大長は、2.25 cmで辺縁部全体にチップングの痕跡が認められる。

10～12は、ほぼ定形の石鏃である。そのうち10・12は底辺部に浅い抉りのある二等辺三角鏃である。そのうち、10は正三角形に近い形をしている。11は、有茎の菱形鏃である。いずれも、器体の全面にわたって、細かなチップングが見られるが、10・12では、フレークの剥離面が一部に残っている。

Bは、石錐などの様な細長い石器の未製品と思われる破片である。その片面には、全体にチップングが施されている。その反対側の面には、チップングの痕跡も見られるが、フレーク作製時の剥離面や原石の自然面が残っている。

6は、断面長楕円形の円磔である。磔面には、人為的な加工痕は認められないが、全体的な形状が、凹み石に類似しているので、一応石器として図示したものである。

以上5～13の石器のうち、5・6を除いた7つの石器は全て、縄文土器の集中包含区域の周辺部から出土したものであるが、整理時の不手際から、出土位置が不明になってしまったものである。

4. まとめ

以上に述べてきた結果をもとに、今回の調査の成果について、2～3まとめをしてみたい。

(1) 発見された遺構の時期と性格

高松遺跡からは、縄文時代早期、ないし前期初頭・前期末・中期末・晩期末、奈良・平安時代および近代以降の各時代の遺物が発見された。遺物の大部分は、土器類の破片であるが、そのほとんどは、縄文時代晩期末の大洞A式土器の様式に含まれるものである。

大洞A式の土器類は、主として遺跡のある丘陵地の南斜面に形成された遺物包含層から、集中的に発見されている。他の土器類は主として、この大洞A式土器包含層の上下に混在するが遺物包含区域の周辺部に散在する形で、ごく少数発見されているに過ぎない。

大洞A式土器を主体とする遺物包含層は、層中の遺物埋没状況から住居跡、ないし集落跡に伴う雑物廃棄施設の痕跡であるように考えられる。しかし、土偶やミニチュア土器などのような祭祀、呪術的な性格を伺わせる遺物も出土しているので、その様な役割りを伴う祭祀遺構である可能性も考えられる。今のところ、資料不足なので、そのどちらとも断定し難い。

いずれ、この種の遺構が日常的なものであれ、非日常的なものであれ、それに関連した人間たちの居住区域がどこかにあったはずである。そのうちでも、最も可能性の大きい場所は、遺物包含区域の北側一帯の狭小な平坦部である。しかし、この部分は、過去の宅地造成の結果、地山が大きく削平され、旧地形が著しく改変されている。そのため、ここに何らかの遺構が存在していたにしても、既に壊滅してしまった可能性が大である。

その他、この包含層内の遺物と時期的に近接する遺物が、この遺跡より低位の段丘上に立地する、安野遺跡や矢沢中学校付近の遺跡からも出土している。これらの遺跡は、高松遺跡から直線距離にして、0.5kmの範囲にある遺跡である。この事から考えると、高松遺跡の縄文晩期末の遺物包含層に関連した拠点集落は、そちらの方にあった事も予想される。しかし、両遺跡とも正式な調査が行なわれておらず、その性格については、今のところ明らかではない。そのため、高松遺跡との時期的・性格的な関連づけについては、今後の調査の結果に期待せざるを得ない。

〔2〕縄文晩期以外の遺物と周辺の遺跡との関連

以上、高松遺跡の縄文晩期における遺物包含区域の遺物を中心に、遺跡の性格について考えてきたが、次に他の時期の遺物との関連で、遺跡の性格について考えてみたい。

高松遺跡からは、晩期末の遺物よりも古い時期の遺物が、少数ながら出土している。これらの遺物は、今回の調査中、調査区域の北西に約0.2kmほど離れた地点付近で、新たに発見された遺跡のものとよく似ている。この遺跡からは、縄文前期～中期の土器片が表面採集されており、当時の集落跡と考えられる。この事から、調査区域内で発見された早期末～中期末の遺物は、この遺跡付近に住んでいた人間たちが捨てたものと考えて、ほぼ間違いのないであろう。

また、大洞A式と思われる土器片については、中野A・B両遺跡との関連が予想される。弥生時代の遺物に関連ありそうな近隣の遺跡は、今のところ不明である。その他、奈良・平安時代の遺物に関しては、関連ありそうな近隣遺跡として、現在までのところ、北に約2km離れた胡四王山遺跡（胡四天王遺跡）⁽¹⁴⁾や、東北東に約1.5km離れた高松山経塚、それに、南西に約2.25km離れた北上市の大沢I・II遺跡⁽¹⁵⁾などが知られている。しかし、水量が豊富で、魚類の多く捷

む猿ヶ石川に近い高松遺跡の周辺は、この時期の遺跡が少ない事は、多少疑問のあるところである。おそらく、この周辺には、まだ周知されていない奈良・平安時代の遺跡が埋没しているものと予想される。以上の時期以後、近世以降に、この付近に民家が営まれるまでの人工遺物は、今のところ発見されていない。

(3) おわりに

高松遺跡の調査は、東北新幹線用地内という限られた範囲内の調査にもかかわらず、調査の結果、前述のように多くの事が知られた。その知見は、非常に断片的なものではあるが、しかし、その事は、今後周辺地域の分布調査や発掘調査が進展する中で、克服され、より一層充実させてゆけるであろう。なお、本報告では、土器類の中に見られる各器種別の組成比とか、石器や石材の材質毎の組成比とか、産地同定などの問題については、詳しく触れる事が出来なかった。この問題の究明は、他の遺跡での成果と今後の研究の発展に期待したい。最後に、地元の方々をはじめ、多くの方々からご協力をいただいた事に感謝し、本報告を終わる事にしたい。

注記

- 注1) 岩手県教育委員会 1974 「理蔵文化財分布地図」
- 注2) 土器様式比定のための対照資料として、相原康二氏の好意により、宮城県山王遺跡の縄文時代晩期の土器類実測図のコピーを用いることができた。その他、下記文献中の写真を参照した。
- 北上市 1968 「北上市史」第1巻 原始・古代Ⅱ
- 大船渡市史編集委員会 1978 「大船渡市史」第1巻 地質・考古編 大船渡市
- 注3) 小田野哲憲氏の資料提供による。
- 注4) 一関市史編集委員会 1978 「一関市史」第1巻 通史 一関市
- 林 謙 作 1977 「谷起島遺跡、第1次発掘調査報告書」 一関市教育委員会
小田野哲憲
- 注5) 岩手大学考古学研究会 1978 「大館町遺跡」 盛岡市教育委員会
- 注6) 加藤孝 1956 宮城県登米郡新田村糠塚貝塚について「地域社会研究会資料」7
- 注7) 伊東信雄ほか 1969 「長根貝塚」 宮城県教育委員会
- 注8) 草間隆一ほか 1974 「天神ヶ丘遺跡」 太田町教育委員会
- 注9) 1973年に調査されている。
- 岩手県教育委員会 1974 「昭和48年度、東北新幹線関係理蔵文化財発掘調査略報」
- 同 1979 「東北新幹線関係理蔵文化財調査報告書」Ⅲ 岩手県文化財調査報告書第35集
- 注10) 熊谷常正氏の教示による。
- 注11) 本報告では引用しなかったが、縄代史の研究に関しては下記の文献が比較的参考になるであろう。
- 荒本ヨシ 1968 縄文時代の縄代編み 「物質文化」第12号
- 同 1970 東日本縄文時代後・晩期の縄代編みについて 「物質文化」第15号
- 同 1974 縄文時代の縄代編み 「物質文化」第17号

- 注12) 石器・石材の石質鑑定と産地の推定は、主として佐藤二郎氏の教示による。
 注13) 注1)と同じ文献、および下記文献による。
 注14) 注1)と同じ文献、および下記文献による。
 江上・関野・桜井編 1958 「跡址」 東大出版会
 注15) 注1)と同じ文献および下記文献による。
 北上市 1968 「北上市史」第1巻 原始・古代(1)

(第4表) 高松遺跡出土縄文時代土器片一覽表

	A		B		C		D		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		計			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30				
片数	5	1	3	1																													111	
計	3																																	20
片数							4																											10
片数																																		131
計																																		322
片数																																		436
片数																																		338
片数																																		112
片数																																		14
計																																		1,449
片数																																		2,351
片数																																		79
計																																		3
計																																		32
計																																		114
計																																		9
計																																		2,796

その他出土遺物
 4193、平定形打製石器1、フレーク65、土器2、ミニチャップル器1(口田5、体器1、成器5)、F、出七の器1 統計 2,887

八幡遺跡

遺跡記号：HM

所在地：花巻市矢沢字10地割69他

調査期間：昭和51年10月7日～11月25日

調査対象面積：1800㎡

平面測量基準点：東京基点 459.940km (CA50)

基準高：海拔 88.60 m

1. 遺跡の位置と環境（第Ⅵ図P134、第Ⅶ図135）

八幡遺跡は花巻市矢沢地内に所在し、市の中心街より直線にして北東約5km、国鉄釜石線矢沢駅の南東0.4km程の位置にある。西1.5kmの地点を北上川が南流し、南西約1kmには標高約180mの胡四王山を望むことができる。

本遺跡は東和町に源を発し、北上川に注ぐ小河川（幸田川）によって形成された小規模な段丘上に立地する。遺跡の地目は宅地と果樹園となっており、南側は一段低く水田地帯として開け、遺跡との比高は4～4.5mを測る。なお遺跡の標高は88.2～88.3m程である。

2. 調査の方法と経過（第1図）

本遺跡は東北新幹線工事建設事業の施行に伴って昭和48年に実施した路線敷内の遺跡分布調査の結果発見されたもので、リング畑より土師器細片の表採をみている。

調査はグリッド設定にかかわる測量と雑物撤去から着手した。グリッドの設定にあたっては新幹線の中心杭459.920kmと459.960kmの二点を結ぶ直線とその延長を遺跡の中心軸に定め459.940kmの地点を遺跡の基準点（CA50）とした。このCA50を基点として1辺3mのグリッドをくみ市松状に表土を除去して遺構の探索につとめた。

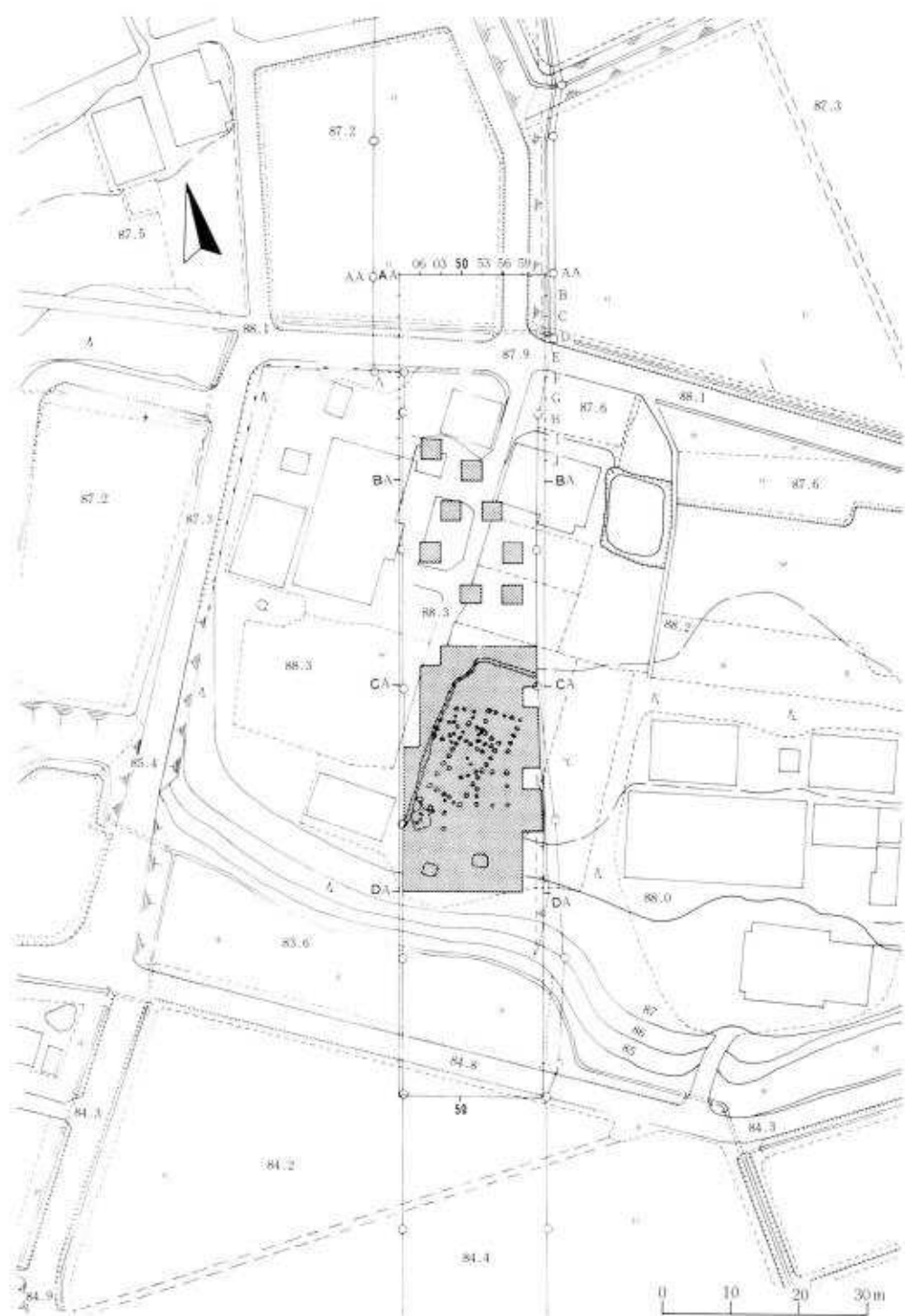
その結果、調査区域のC区に遺構が集中したため、B区南半からC区全域は結果的に全面発掘となった。

3. 調査の結果

〔1〕 遺跡の基本層位（第2図）

遺跡の基本的層位を把握するためにC150グリッドに深さ1.4m程の深掘を実施した。結果は第2図に示すとおりである。

第1層：褐色（10YR4）土で表土（耕作土）。小粒の砂を含んだ砂質シルト、層厚15～20cmを測るがB区では10～15cmと薄くなる。果樹園や宅地として利用されており、攪乱が目立つ。果樹園部分には施肥のための穴が随所に掘り込まれている。層中には若干の土器片、炭化物、焼土等を包含する。



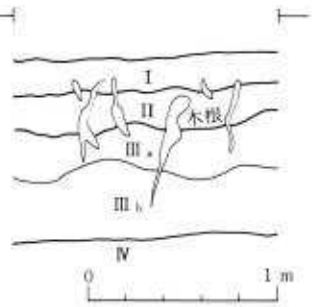
(第1図) 八幡遺跡グリッド配置図

第II層：明黄褐色（10Y R 6/）土で砂含みのシルト、層厚約20cmを測る。地山を形成し遺物の出土はみない。木根の混入が目立ち施肥のための穴がこの層までおよんでいる。

第III a 層：黄橙色（10Y R 7/）土で粘土質シルト。層厚20～25cmを測る。下に移行するにつれて粘性が増す。

第III b 層：黄橙色（10Y R 7/）土で粘土質シルト。層厚30～40cmを測る。灰黄色（2.5Y R 7/2）土が横縞状に若干走る。

第IV層：灰黄色（2.5Y R 7/2）土でシルト質粘土。きわめて粘性が強く密である。



（第2図）基本土層図

なおボーリング結果によれば、表土下約8 m程で粘土混りの礫層となり、調査区の南側段丘辺りでは礫層は深く、上部に砂層が乗ってくる。

〔2〕 発見された遺構と遺物

調査の結果、竪穴住居跡3棟、獨立柱建物跡4棟、それに浅い溝1本を検出した。

（1）竪穴住居跡

CG09住居跡（第3図）

〔遺構の確認〕 遺構の検出確認面は第II層明黄褐色の地山面である。

〔重複〕 7個のピットがみられるがP₁とP₂以外は住居跡よりは新しい。また住居跡の北西のコーナーが溝によって切られている。

〔平面形・方向〕 長軸 3.2m、短軸 2.8mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。長軸方向は南北であり、床面積は 7.8m程と思われる。

〔壁・床〕 地山を壁としており、残存壁高は10～20cmを測る。明黄褐色の地山面を直接床面としており、貼床・周溝等は認められない。

〔柱穴〕 住居跡に伴うピットは2個であるが柱穴ではない。精査を加えたが柱穴は検出できなかった。

〔カマド〕 北壁中央やや東寄りと東壁北寄りの2個所に設けられている。カマドの新旧関係は不明である。

北壁に設置されたカマドは煙道の一部が残存するだけで、カマド部も殆どが破壊され、煙出部は獨立柱建物跡の掘り方で破壊されている。燃焼部には焼土、炭化物の検出はなく使用の痕跡は認められない。燃焼部より煙道部へはゆるやかな上向き傾斜で移行し、煙道は若干の下向をたどって煙出部へと接続する。煙出部は掘り方で完全に破壊され不明である。カマドの軸方向はN-6°30'-Eである。支脚等の施設は検出されなかった。

一方東壁に設けられたカマドは使用の痕跡が明確で、燃焼部には約60×50cmの範囲で焼面が検出された。燃焼部のほぼ中央には土師器の坏を伏せて固定し、支脚として使用しており、焚口と支脚の間は特によく焼けていた。燃焼部より煙道部へはゆるやかな上向き傾斜で移行し、煙道は若干の下向をたどって煙出部へと接続する。煙道部の長さは60cmを測る。煙道部と煙出部の一部は掘立柱建物跡の掘り方で破壊されているものの割合に遺存状態は良い。煙道は全体的に加熱を受けた痕跡が観察され側壁も焼土化していた。煙出部には煙道底面より2～3cm程の落ち込みが認められた。カマドの軸方向はN-89°-Eである。

〔その他の施設〕 住居跡に伴うピットとして2個検出されたがP₁は深さ約20cmを測り、炭化物、焼土を多量に含み、土器片も包含する。貯蔵穴と考えられる。P₂は深さ11cmと浅く性格不明である。

〔出土遺物〕 (第4図)

A：土器

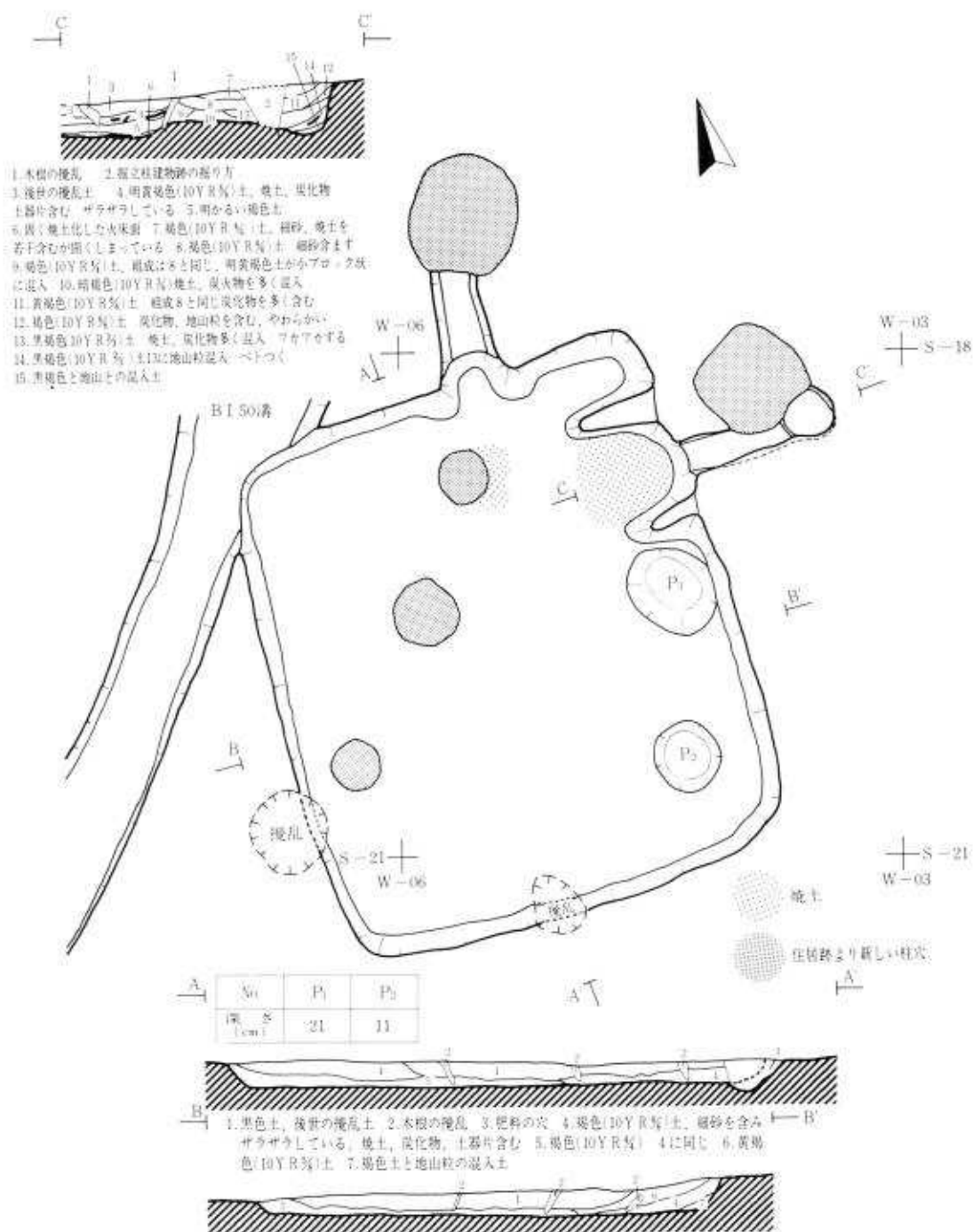
坏 坏類は焼成、調整の相異により土師器、須恵器、赤焼き土器の区別がある。赤焼き土器と称した坏は、酸化炭焼成で焼成が甘く、器面調整、内黒処理を行わない杯類を一応総称したものである。

〈土師器〉(第4図1～4) 1～4ともにロクロ使用、底部回転系切り無調整で、内面は黒色処理されている。1は体部に脹らみを持って外傾し口縁部付近がほぼ直立するもので口唇は丸くおさまる。底径に比して器高・口径ともに大きい。内面は横方向に磨かれている。外面は赤褐色～褐色を呈し、焼成はやや甘い。2は底径が大きく、やはり体部が脹らみを持つものだが、口縁部は外反し細く引き出される。内面は磨滅が著しく調整痕は不明。3は体部は僅かな脹らみを持って強く外傾し、口縁部がさらに外傾するものである。内面は口縁部から体部にかけて横方向のヘラミガキが施されている。4は底径が小さく比較的器高が高い。

〈赤焼き〉(5・6) 5は白褐色を呈した焼成の甘い土器である。カマドの支脚として使用されていたもので加熱を受けて著しく脆弱化し、器面は磨耗している。器形は体部下端で強く脹らみ、体部から口縁部まではほぼ直線的に外傾。口唇は薄く引き出されている。底部外面の切り離し痕は磨滅のため不明である。内面には黒色処理、ヘラミガキの痕跡はまったく観察できなかったが、体部下半に太いヘラ状の工具で器面をナデた痕跡が見られる。磨滅の度合いが著しく土師器とも赤焼き土器とも判断しかねたものである。6は赤褐色を呈した内外面無調整の坏である。

甕(第4図7～11) 甕類は成形時にロクロを使用したものと使用しないもののが出土しているが比率は5：2で前者が多い。土師器。

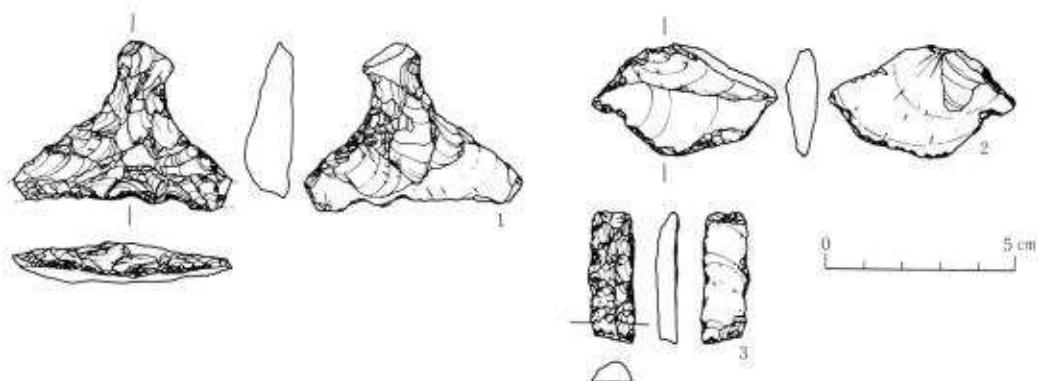
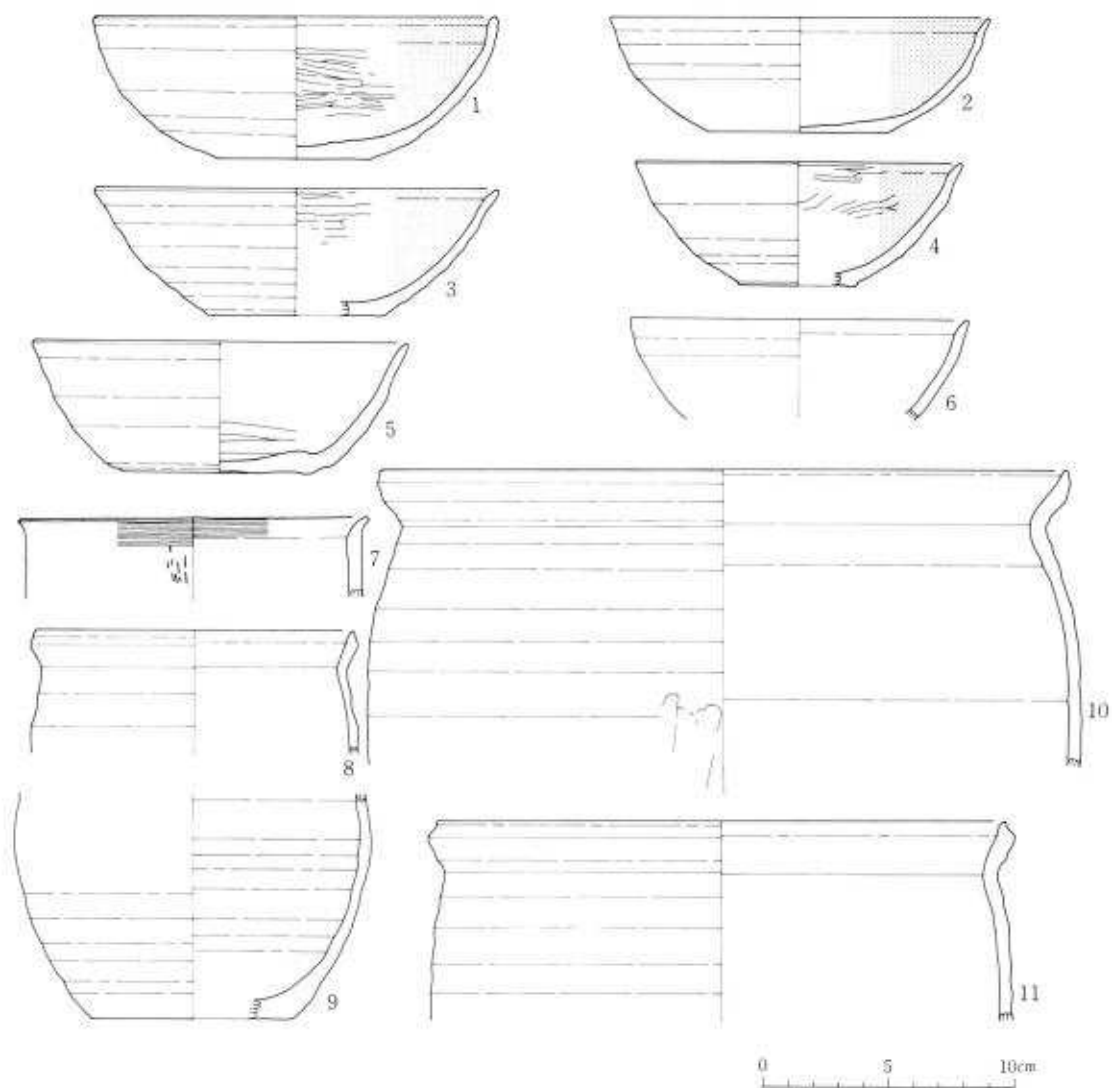
7は北側のカマド内から出土した。小形の甕でロクロ不使用。体部上半はほぼ直立し、口縁



(第3図) C G 09住居跡断面図



八幡直鉢



(第4图) C G 09住居跡出土土器・石器実測图

(第1表) C G 09住居跡図示土器観察表

実測 番号	写真 番号	出土地点	土器 区分	器種	調 整						高 径 (cm)	口縁部 径 (cm)	胴部 径 (cm)	体 部 径 (cm)	底 部 径 (cm)
					口 縁 部		体 部		底 部						
					外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面					
1	図版 5-1	東カマド	土師器	16	ロクロナデ	横方向ミガキ	ロクロナデ	横方向ミガキ	回転糸切り無調整	ヘラミガキ	5.7	16.2			16.1
2	5-2	北カマド 焼	*	*	*	(ミガキ)	*	(ミガキ)	*	(ミガキ)	4.6	15.0			7.0
3		東カマド	*	*	*	横方向ミガキ	*	横方向ミガキ	*	直射ミガキ	5.1	16			7.0
4		埋 土	*	*	*	*	*	*	*	*	4.0	13			4.6
5	5-3	東カマド	*	*	*	ロクロナデ	*	下半横方向 ミガキナデ	木 周	ロクロナデ	5.3	15.0			7.5
6		北カマド 焼	赤焼き	*	*	*	*	ロクロナデ				13.4			
7		北カマド	土師器	筒 壺	ナデ	刷毛目→ナデ	刷毛目→ナデ	ヘラナデ				14.0			
8		東カマド 焼	*	*	*	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		12.4	12.2			13.0
9		北カマド	*	*	*			*	回転糸切り 無調整	ロクロナデ					14.0
10		東カマド	*	*	*	ロクロナデ	ロクロナデ	下半ヘラケズリ	*		17.0	25.6			28.4
11		*	*	*	*	*	*	*			22.6	22.0			23.0

(数字)は推定値を示す

(第2表) C G 09住出土器破片数表

出土層位・地点	土器区分	器種	残存部位	外 面	内 面	底 面	破片数(個体数)
東カマド内	土師器	杯	口縁～体部	ロクロナデ	ヘラミガキ		1
*	*	甕	体部～底部	縦方向ケズリ	刷毛目	ヘラナデ?	1
*	須恵器	壺	体 部	平行甲斐	亀基文		1
東カマド横道部	*	*	*	*	平行沈線		1
埋 土	*	杯	口縁～底部	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り無調整	1
*	赤 焼	*	口縁～体部	*	*		1
*	須 恵 器	甕	体部下半	平行沈線	縦方向ナデ		3
*	*	*	体 部	ロクロナデ	ロクロナデ		1

注1) 図小土器は除外した
注2) 観察不可能の小破片は含まれていない。

部が外反するものである。体部外面は刷毛目の後、浅いヘラケズリしたもの。内面はヘラナデと思われるが磨滅し明瞭ではない。口縁部は内外面ともに横ナデされている。

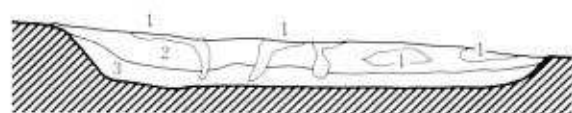
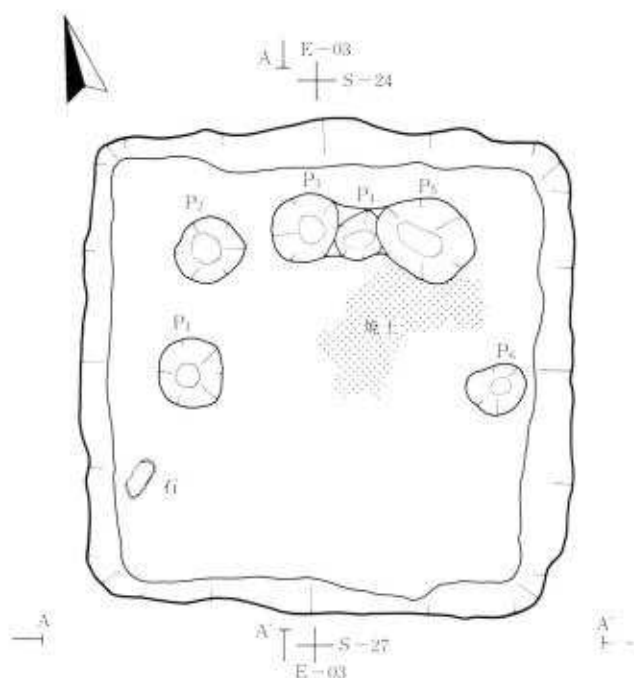
8～11はロクロ使用の甕で、8・9は最大径15cm以内と小形である。8は体部が幾分張り出し、頸部で屈曲、口縁部は外傾し上方につまみ出される。9は体部から底部の破片で、ロクロナデ後の調整は受けていない。底部回転糸切り無調整。11は8に相似した形でやや大きめである。体部下外面にはヘラケズリを受けている。10は体部が丸く張り出し、口縁部は強く外傾して緩く上方に引き出されている。体部下半の外面はヘラケズリされている。8・9・10は白褐色～灰褐色、11は赤褐色を呈し、焼成はいずれも甘い。

図示土器の他には須恵器の壺などが出土しているがすべて小片である。(第2表参照)

B: 石器

埋土中から石器類が3点出土。(第4図下)

1はツマミを有するスクレーパーである。両側端を欠損。裏面の調整剥離は左肩部と中央部にのみ行われている。刃部は末端の長辺に片面から加工されていて、刃角は直角に近い。2は横長のフレークを素材とし縁辺に僅かな二次加工を施したもの。上部に自然面が残る。スクレーパーとして使用されたものと考えられる。3は棒状の石器で、下端を欠いている。片面のみを丁寧に剥離し、断面形は台形となっている。石錐の破損品であろうか?



1. 木根による擾乱土 2. 褐色(10YR 5/2)土、細砂を含みザラザラしている。草根等による擾乱がはげしい 3. 褐色(10YR 5/2)土、焼土、炭化物をかなり含み、土器片も包含。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	0	1 m
深さ (cm)	10	7	10	9	12	9		

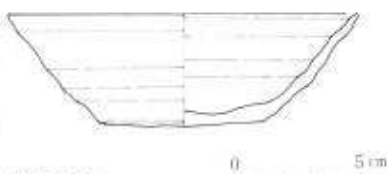
(第5図) C150住居跡平面断面図

築されなかったものと思われる。床面中央より北東隅にかけて、2～7cmの浅い落ち込みを持った焼土面が検出され、周囲には炭化物の広がりが認められた。

【その他の施設】 6個のピットのうちP₃、P₄、P₅、P₆は炭化物の広がりを除去した後に検出された。堆積土は明黄褐色の地山粒と細砂を含んだ褐色土の単層で、焼土、炭化物の混入は微量である。

【出土遺物】 (第6図) C150住居跡からの出土遺物は、床面から須恵器杯一点(第6図)と須恵器壺が1点、埋土からは第4表の様な土器片が出土した。

6図の杯は底部回転ヘラ切り無調整で、体部のロクロナデは極めてシャープに行われている。器形は体部立ち上がりよりはほぼ直線的に外傾し、口唇は薄い。灰褐色を呈し焼成は良好である。



(第6図) C150住居跡出土土器実測図

C150住居跡 (第5図、図版2)

【遺構の確認】 段丘の先端付近で幾分傾斜地となっている地点に遺構を検出した。確認面は第II層明黄褐色の地山面である。

【重複】 なし。

【平面形・方向】 一辺約2.6mの隅丸正方形を呈し、その一辺の方向はほぼ調査基準線に一致している。床面積は約6.5m²程と思われる。

【壁・床】 地山を直接壁とし、残存壁高は15～25cmを測る。地山面が南に向けて傾斜するため南壁は極めて浅い。床面は明黄褐色の地山面を直接床面とし、貼床、周溝等は認められない。

【柱穴】 住居跡内に6個のビットが検出されたが、柱穴ではない。

【カマド】 カマドは最初から構

北壁で5cmを測る。明黄褐色の地山面を床面とし、貼床、周溝等は認められない。

〔柱穴〕 住居跡内に3個のピットと、1個の落ち込みとを検出した。そのうち対角線上にあるP₁とP₂が柱穴に当たると考えられる。

〔カマド〕 確認できなかった。焼土の検出もなく、当初より構築されなかったものと思われる。

〔出土遺物〕 (第8図) C106住居跡からの出土遺物は少く、床面から第8図の土器3点が出土した他は須恵器の壺体部片が出土しただけである。

1は土師器の坏で、ロクロ使用、底部回転系切りと思われる。体部下半に僅かな脹らみを持って強く外傾する。内面はヘラミガキ、黒色処理が行われているが、器面は磨滅して不明瞭である。外面は白褐色を呈し焼成は甘い。2は須恵器の坏の体部下半から底部への破片である。底部はヘラ切り無調整。体部外面に墨書の痕跡が認められるが、文字内容は不明。3は須恵器の長頸壺の口頸部である。頸部より緩く外傾して立ち、口縁は下方へ引き出されている。暗灰褐色を呈し焼成は良好。



(第8図) C106住居跡実測図

(第5表) C106住居跡出土図示土器観察表

実測図 番号	写真 番号	出土 層位	土器 区分	器 種	胴				頸				器高 cm	口縁部 径cm	頸部 径cm	体部 径cm	底部 径cm
					口縁部		体部		底		部						
					外	内	外	内	外	内	外	内					
1	5-6	床面	土師器	坏	ロクロナデ	横方向ミガキ	ロクロナデ	横方向ミガキ	回転系切り 無調整	ミガキ	6.1	15.8				5.6	
2		〃	須恵器	*					ヘラ切り 無調整	ロクロナデ						7.6	
3	5-7	〃	*	壺	ロクロナデ	ロクロナデ						10.6	6.6				

(2) 掘立柱建物跡

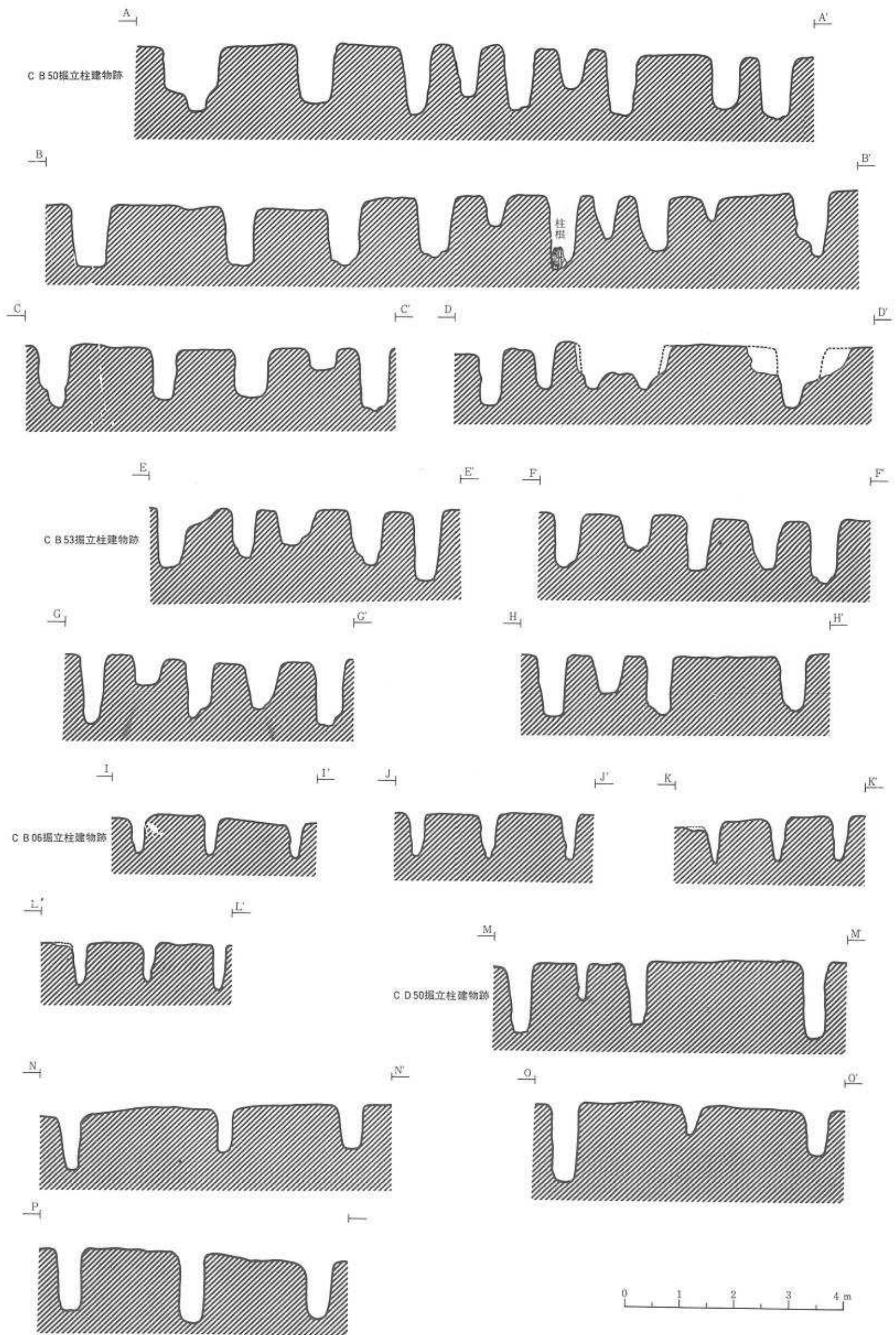
C B 50掘立柱建物跡 (第9・10図)

調査区域C区のはほぼ中央に検出された掘立柱建物跡であり、遺構確認面は第II層明黄褐色の地山面である。C B 53掘立柱建物跡、C D 50掘立柱建物跡と重複関係にあるが掘り方相互の切り合いはないので新旧の順序は明らかにできなかった。

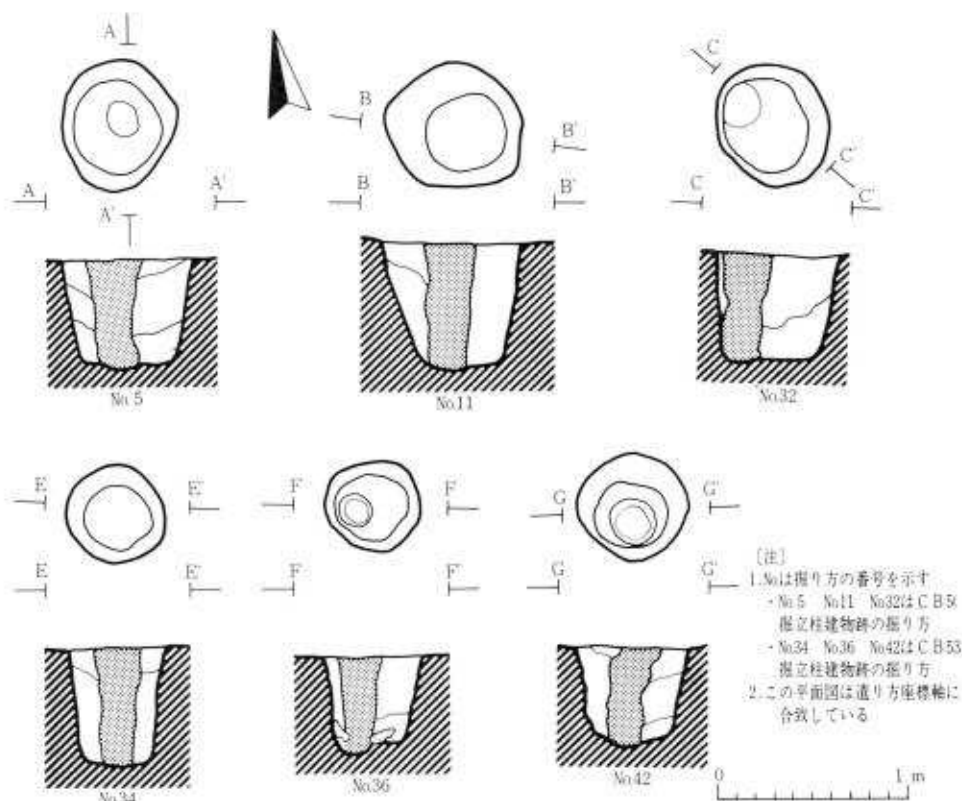
全体規模は南北約10.6m(約35尺)、東西約5.8m(約19.2尺)で南西隅に南北2.9m(約9.5尺)東西1.9m(約6.5尺)程の張り出しをもつ。構造は桁行5間半、梁行3間で一部に半間柱を有し三つの間仕切りを持つ南北棟の建物である。柱筋は一直線上に並び、各柱間の



(第9圖) 掘立柱建物跡平面圖



(第10圖) 掘立柱建物跡柱列断面圖

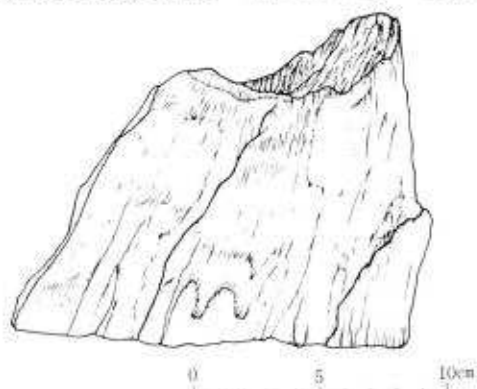


(第11図) 掘立柱建物跡掘り方埋土断面図

間尺は若干の差異はあるものの6尺3寸を基本に計画され、半間柱は3尺1寸5分と推定される。建物方向は南北であり、西側柱列を通した軸線は約N-43°30'-Eである。

掘り方は直径50~60cm内外のほぼ円形に掘られており、深さは約40~70cmを測り概して半間柱は浅い。各掘り方の殆どには柱当りが認められ、柱痕(掘え方)の径は20~30cm前後であり、1箇所柱根の存在が確認された(掘り方No. 23、第12図)。掘り方埋土は複数層に分層されるものは少なく、大部分は明黄褐色~灰褐色の地山を多量に含む混土層で一気に埋めたものと観察された。

掘り方内より出土した遺物としては、掘り方No. 33の埋土約40cmの下層より寛永通宝5枚が重なり合って出土した(第13図)。その他の出土遺物としては、土師器の坏、琥珀片、須恵器壺片、陶器碗、播磨片などが出土しているがいずれも小破片で器形の推定、観察のできる資料は出土していない(第6表参照)。



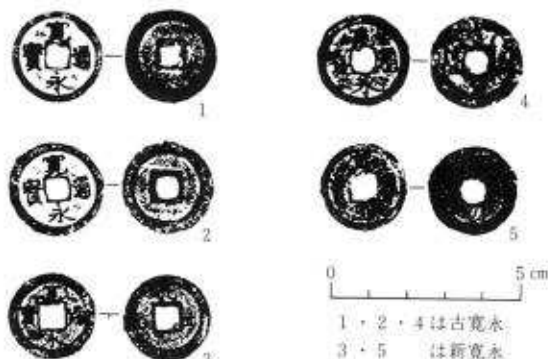
(第12図) C B 50掘立柱建物跡柱根実測図(掘り方No. 23)

C B 53掘立柱建物跡

C B 50掘立柱建物跡の北東隅に重複して検出された掘立柱建物であり、確認面は第II層明黄褐色の地山面である。C B 50掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

全体規模は南北約4.7m(約15.5尺)東西約4.5m(約15尺)である。構造は桁行2間、梁行2間で、南辺の東半分を除いていずれも半間柱をもった南北棟の建物と思われる。柱筋はいずれも一直線上に並び、各柱間の間尺は若干の差はあるが7.5尺を基本にすえ、半間柱は3.75~4.0尺と推定される。

建物方向は南北と考えられ、柱痕(据え方)の径は10~15cm内外である。掘り方埋土は複数層に分層されるものは少く、殆どは明黄褐色~灰黄色の地山を多量に含む混土層で一気に埋められたものと観察された。掘り方内よりの出土遺物は皆無。



第13図 C B 50掘立柱建物跡掘り方内出土古銭拓影

C B 06掘立柱建物跡

C B 50掘立柱建物跡の北西に近接し、B I 50溝と重複して検出された掘立柱建物跡であり、確認面は第II層明黄褐色の地山面である。B I 50溝との関係は溝がC B 06掘立柱建物跡の西側柱列を切っていることから、B I 50溝が新しいことが窺える。

全体の規模は南北約2.9m(約9.5尺)、東西約2.6m(約8.5尺)である。構造は桁行2間、梁行2間で半間柱は持たない南北棟の建物である。柱筋は一直線上に並び、各柱間の間尺は桁行は5.0尺と4.5尺、梁行は4.3尺と4.2尺となっている。建物の方向は南北であり、西側柱列を通した軸線は約N-28°30'-Eである。

掘り方は直径30~40cm前後のはほぼ円形で深さは35~45cmを測る。各掘り方には柱当たりの認められるものと認められないものがある。掘り方内よりの遺物は皆無である。

C D 50掘立柱建物跡

C B 50掘立柱建物跡の南東部と一部重複して検出された掘立柱建物跡であり、確認面は第II層明黄褐色の地山面である。C B 50掘立柱建物跡との新旧関係については不明である。

全体の規模は南北約5.3m(約17.5尺)、東西約4.7m(約15.5尺)である。構造は桁行2間、梁行2間で西側に1本の半間柱をもつ南北棟の建物跡である。柱筋は一直線上に並び、各

柱間の間尺は桁行約10.5尺と7尺（西側）、それに8尺と9.5尺（東側）、梁行は約17.7尺を測る。建物の方向は南北で西側柱列を通した軸線は約N-14°25'-Eである。

掘り方は直径35～40cm前後の円形で深さは30～50cmを測り、隅の4本は特に深い。各掘り方にはC B 06掘立柱建物と同様柱当たりの認められるものと認められないものがある。遺物は皆無。

（第6表）掘立柱建物跡掘り方規模一覧

掘り方No.	規模 (cm)	備 考	掘り方No.	規模 (cm)	備 考
1	68×58×60		43	54×48×54	
2	68×58×49		44	60×52×38	
3	70×60×47		45	110×48×57	
4	54×50×49		46	48×40×42	
5	68×60×59		47	76×60×36	
6	62×56×49		48	70×70×46	
7	72×64×60		49	30×28×38	
8	62×58×37		50	38×34×42	
9	64×62×58		51	36×32×42	
10	56×54×46		52	34×34×42	
11	76×68×68		53	34×32×42	
12	94×84×60		54	34×34×35	
13	116×80×68	土師器坏片1、須恵器壺片1出土	55	30×28×41	
14	74×68×47		56	32×26×40	
15	60×56×43		57	50×46×62	
16	46×44×40		58	38×34×33	
17	72×66×59		59	50×44×41	
18	66×60×52		60	32×30×40	
19	46×42×39		61	50×46×51	
20	72×70×59	須恵器壺片1	62	46×42×66	
21	70×66×57		63	50×46×51	
22	66×46×28		64	50×40×58	
23	74×60×71	柱根残存	65	38×28×26	
24	58×52×44		66	36×34×34	
25	76×66×52		67	36×34×56	
26	60×52×24		68	48×44×55	土師器坏片1、陶器摺鉢片1
27	44×42×29	陶器坏片1	69	40×38×18	
28	58×58×57		70	32×30×26	
29	52×52×39		71	40×36×58	
30	76×66×49		72	30×28×31	
31	44×38×48		73	40×42×15	
32	66×58×58		74	36×32×27	
33	68×56×50	寛永通宝5枚	75	28×26×26	
34	52×52×63		76	38×30×41	
35	56×54×31		77	68×30×43	
36	50×46×52		78	54×54×49	
37	74×58×43		79	64×60×57	
38	60×56×58		80	54×50×34	
39	74×54×44		81	56×54×22	
40	62×50×50		82	48×46×29	
41	56×54×34		83	58×52×53	
42	58×54×54		84	66×52×35	

(3) 溝

B I 50溝 (第1図・第9図)

調査区域のB区からC区にかけて検出されたもので、B J 56グリッドより西へ走りB I 50グリッドでやや蛇行きみに南へカーブする。途中C B 06掘立建物跡の西側柱列およびC G 09住居跡の一部を切って、C H 09グリッドで調査区域へと延びる溝である。

溝は上巾50~100cm、下巾20~80cmとかなりの不定形の幅を持ち、深さは5~10cmを測り浅い皿状の断面を呈する。埋土は単層で遺物の出土は皆無である。

(4) 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物としては各グリッドの表土中より出土した石器・フレーク、須恵器・土師器・B H 03グリッド付近の攪乱部より一括出土した陶器などがある。

A：土器 (第14図)

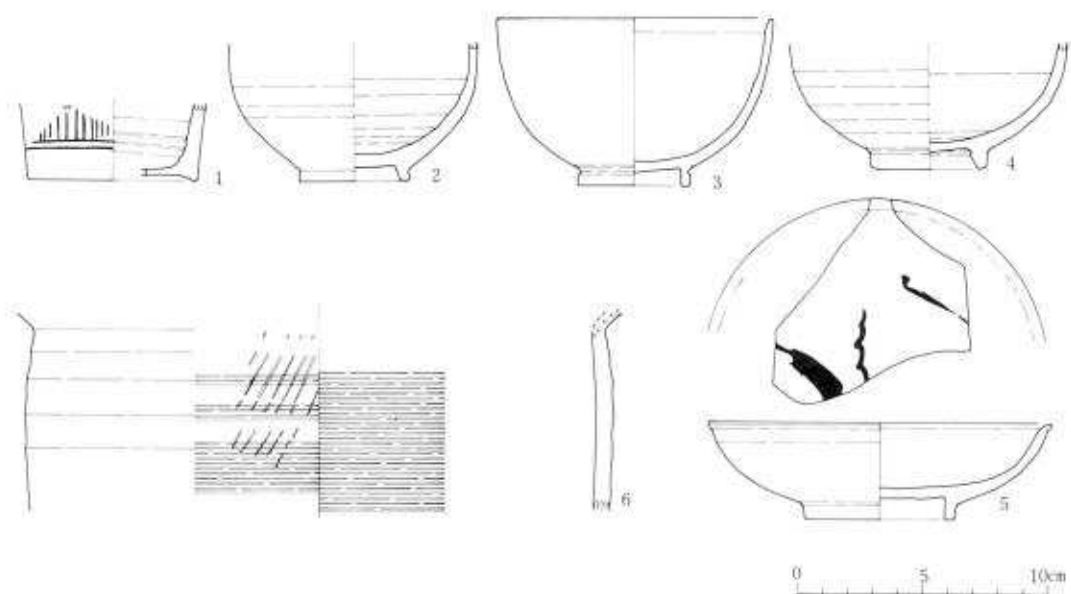
土師器 坏、甕の破片が出土しているが、小破片が多く器形の窺える資料は、14図6の1点のみである。6は甕体部上半の破片で、外面は叩きの後刷毛状工具によるロクロナデを、内面にも同様のロクロナデを施したものである。褐色を呈し、焼成は甘く軟質である。

須恵器 坏底部片が出土しているがいずれも底部回転糸切り無調整のものである。

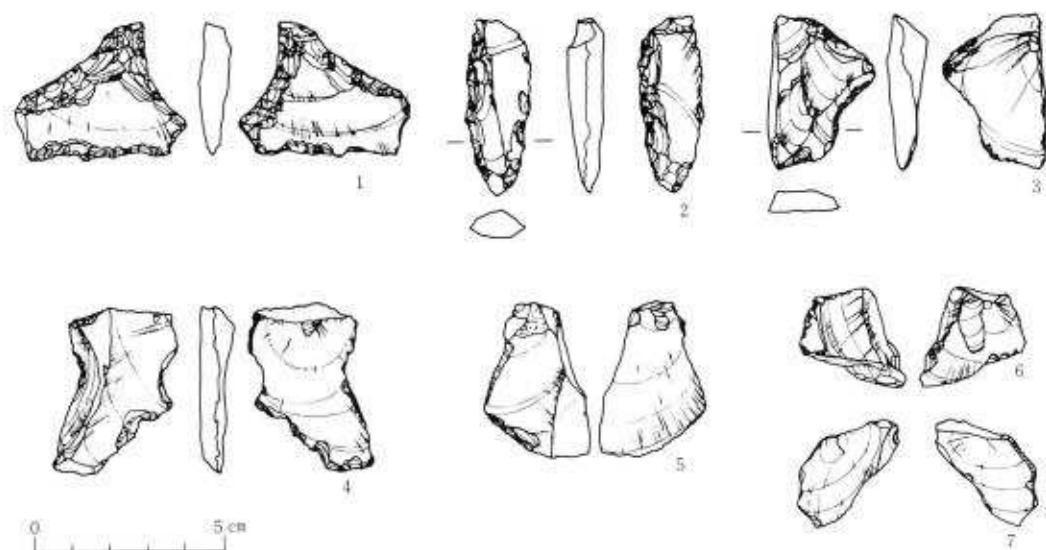
陶・磁器 1は磁器で、小鉢あるいは鉢子の底部片である。白色の地に藍色の染め付けがなされている。2~4は近似したプロポーションを呈する陶器の塊である。内外面に灰褐色あるいは灰緑色の施釉がなされている。この類の塊は他に5点程出土しているが同一窯の生産品と思われる。施釉はいずれも高台部を残した土見せとなっている。5は皿形の陶器片で、ネズミ色の施釉がなされている。見込み部分には黒褐色の絵付が行なわれている。他に内面に刷毛目を施した播鉢片も出土している。これらの出土品のうち、播鉢、塊の破片はC B 50掘立柱建物跡の掘り方内から出土した陶器片と釉、器形の点で一致しており、同時期のものと考えられる。従ってこの陶器類の年代は、C B 50建物跡の構築時を下限とすることができる。

B：石器・フレーク (第15図)

1は上部にツマミを有するスクレーパーである。両面ともに1次剥離面を大きく残し、縁辺のみを加工したもので末端の長辺に刃部が作られている。2は縦長剥片を素材として側縁部に集中して加工を行ったもの。先端部は二次加工が行なわれてはならず、先端部使用を意図したものとは考えにくい。側縁を使用したスクレーパーかと考えられる。あるいは未製品か？3は約半分を欠損、側縁と先端の長辺に細かい二次加工痕が見られる。4~7はフレークで、二次加工痕はほとんど見られない。



第14圖 遺構外出土土器実測図



第15圖 遺構外出土石器実測図

4. 考察とまとめ

今回の調査で発見された遺構は竪穴住居跡3棟、溝1本、掘立柱建物跡4棟である。各遺構とその出土遺物について若干の考察を行う。

竪穴住居跡 3棟ともにその出土遺物から平安時代の住居跡である。

〈C G 09住居跡〉 CI 06、CI 09住居跡とは住居の向きを異にする。住居に付設されたカマドも2個所に発見されているが、このうち北壁に設置されたカマドは破壊が著しいため、カマドの実態は明らかでないが、使用痕跡はあまり認められない。東壁のカマドは使用痕跡も著しく、支脚として利用した坏も残存していることから、住居の廃絶直前まで使用していたのは東壁のカマドと考えられる。住居構築当初は北壁にカマドを構築しながら、ほとんど使用せずに東壁に移し変えたものと考えた。

C G 09住居跡はカマド付近に比較的多量の出土遺物を残していたが、それらは土師器の坏、甕、赤焼き土器の坏が主体である。土師器の坏はすべて底部回転糸切り無調整のもの、甕はロクロ使用が大半である。須恵器の坏は破片で1点出土しているが、やはり底部回転糸切り無調整であった。

〈CI 06、CI 50住居跡〉この2つの住居跡は上記の住居跡とは、住居の方向、構造などの点で大きく異っている。共にカマドが検出されなかったが、特にCI 06住居跡は、炉跡と思われる焼土、炭化物等も全く検出されず、段丘縁に構築された事も考えると、どれ程の居住性をもっていたか疑問がある。

2棟共に住居に伴う出土遺物は極めて少ない。がいずれも底部へう切り無調整の須恵器を出土している点で一致している。CI 50住居跡では埋土からではあるが、ロクロ不使用の土師器甕を出土している。

発見された3棟の住居跡については、住居の方向、構造、出土遺物などの相異から、時期差があるものと考えた。相伴遺物が少なく確実な論拠とはなり得ないが、へう切りの須恵器を出土しているCI 06、CI 50住居跡が古く、C G 09住居跡が新しいという推定を行った。絶対年代は現段階では明確に規定できないが、一応前者を9世紀代のあまり下らない時期に、後者をそれ以降に位置付けた。

掘立柱建物跡 本調査区域のほぼ中央部に集中して4棟発見された。建物としては重複関係を持つが、掘り方相互の切り合いはない。

C B 50掘立柱建物跡は4棟のうちでは一番大きく、南西隅に張り出しを持ち、桁行5間半、梁行3間で半間柱を有する直屋型式の建物跡である。柱間の間尺は6尺3寸半間柱は3尺1寸

5分を基本にして設計されていた建物跡と云えよう。間仕切りは広間型3間取りの型式を基本にすえ、坪数は16.5～17坪程と推定される。

C B 53掘立柱建物跡、C B 06掘立柱建物跡、C D 50掘立柱建物跡はいずれも桁行2間、梁行2間で間仕切りをもたないやや南北に長い建物跡である。C B 53掘立柱建物跡は半間柱を有するが他の2棟には見られない。

柱は4棟とも掘り方型式で、打ち込み型式は認められない。C B 50掘立柱建物跡とC B 53掘立柱建物跡は掘り方も大きく、柱当りも明瞭に認められる。C B 50掘立柱建物跡のNo23掘り方には柱根が一部残存しており、材質はクリ材であることが判明した。

掘立柱建物跡の性格付けについては資料が乏しく困難であるが、4棟のうちC B 50掘立柱建物跡はその間仕切りの状態等により居住性が考えられ、一応庇を持たない直屋型式の民家風建物跡を想定した。一方他の3棟については規模の大小はあるにしても2間×2間の倉庫的性格の建物跡と考えた。

次に時期について若干の考察を加えてみたい。遺構の時期決定に欠かせないものの一つに出土遺物があるが、4棟の建物跡で遺物が出土したのはC B 50建物跡の掘り方だけで、他の3棟からは皆無であった。遺物としては土師器、須恵器、それに陶器の細片が若干と寛永通宝がある。土器片についてはその出土状況より時期決定の資料とはなり得ない。しかし掘り方No33出土の5枚の寛永通宝は出土状況から意識的に目的をもたせて埋設したとも考えられ、掘立柱建物跡の構築年代を決定する一つの資料と云えよう。5枚の寛永通宝のうち3枚は古寛永、2枚は新寛永である。新寛永のうち1枚は「元」の背文がある事から、寛保期(1741～1744)に製造されたものである。摂津国大坂高津鑄造のいわゆる高津銭である。このことからC B 50掘立柱建物跡の上限を一応寛保期以降と捉えた。一方他の3棟からは遺物の出土は皆無であり、年代を決定する様な資料は全くない。しかしC B 50掘立柱建物跡と重複し或いは接近している事から少なくとも2～3時期は考えられる。いずれ新幹線用地内の20m幅の限られた範囲であり、東西の用地外には今回検出された掘立柱建物跡に関連する遺構の存在も予想されるので、今後の調査と資料の増加を待ちたい。

溝 B I 50溝1本が発見された。C G 09竪穴住居、C B 06掘立柱建物跡の一部掘り方を切っていることから本調査で発見された遺構としては最も新しい遺構である。規模・性格等については不明である。

以上今回の調査の結果発見された遺構とその時期をまとめると次の通りである。

- 平安時代(恐らくは9世紀代の中頃、あるいはそれ以降)の住居跡3棟。
- 江戸時代後半の掘立柱建物跡1棟とそれに前後すると思われる掘立柱建物跡3棟。
- これらの遺構よりさらに新しいと思われる溝1本。

引用・参考文献

- 東京コンサルタント株式会社
日本国有鉄道盛岡工事事務局 (昭51) 「東北新幹線東京起点 459 K 000 461 K 000 開地質調査報告書」
- 岡田 茂 弘
桑 原 滋 郎 (昭49) 「多賀城周辺における古代埴形土器」(研究紀要1)宮城県多賀城跡研究会
- 伊藤 博 幸 (昭51) 「岩手県の古代土器生産について—須恵器とロクロ土器の素描」岩手史学研究No.61
- 沼山 源吉治
斎藤 尚 巳 (昭52) 「尻引遺跡調査報告書」北上市教育委員会
- 江上 波 夫 桜井 清 彦(昭33)「館址」東大出版会
関野 大 雄
- 盛岡市歴史文化センター (昭51) 「盛岡遺跡現地説明会資料」
- 伊藤 延 男
吉 田 昌 昌 「岩手県の民家」(文化財建造物特別調査報告)岩手県教育委員会
- 小川 吉 廣 他 (昭44) 「新寛永鑑識の手引」万国貨幣研究会

石鳥谷地区の概観

1 石鳥谷地区の地形と環境

石鳥谷町は岩手県の中央部、稗貫郡の西部にあたり、東西約49.5km、南北約17.5kmの東西に長い区画を有している。

地形的には、東部の北上山地と西部の奥羽山脈とにはさまれた北上平野のほぼ中央部に位置し、北上川とその支流による沖積面と、ほぼ平坦に広く分布する段丘面とからなる。町の中央部を東北本線および国道4号線が貫通し、やや東寄りを北上川が南流する。

東北新幹線は北上川の東側、北上山系丘陵地帯の西側を南北に縦断する。新幹線に関連する遺跡は町内において4遺跡調査されており、本分冊にかかわる3遺跡は北より幅遺跡・大曲遺跡・大明神遺跡となっている。これらの3遺跡は近接して共に同一段丘上に立地する。

北上川の左岸では、北上山地に遡流をもつ数本の河川が、山地・丘陵地からの出口付近にやや顕著な段丘を形成している。こうした比較的大きな河川の出口付近に発達する段丘は、ほとんどが平坦な低位の段丘面であり、小規模ながら比較的広範囲に分布する。そのほか支流沿いにも、小面積の低位段丘が点在する。中位段丘はそのまま河岸段丘面として断片的に分布し、山側は麓斜面などの緩傾斜地となっている場合がある。

これに対して北上川の右岸では、急峻で起伏の大きな奥羽山脈より流入する河川は、その勾配が急であり、段丘は扇状地性の台地として発達している。少なくとも新旧の異なる3段以上に分類され、特に中位・低位の段丘が広面積を占めて保存される。

以上のように北上川の左岸の段丘は小規模な河岸段丘面として残され、一般にその発達は不良であり、北上川の右岸に広く発達する段丘との対称性はあまり認められない。本分冊にかかわる3遺跡は、比較的緩い河川勾配をもつ稗貫川によって形成された段丘上に立地し、最も低位の段丘に比定される。

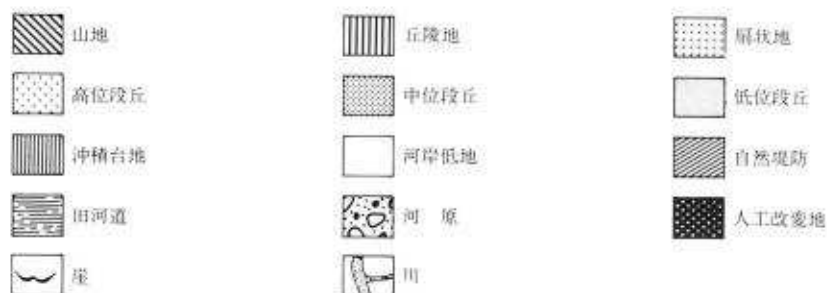
稗貫川は大迫町の内川目岳付近に源をもち、赤梅山山地と砥森山山地とを関析して西流する。北上川との合流点までの延長は、11.4kmに及ぶ。河川沿いには右岸を中心に比較的広い微高地状の沖積台地が発達している。遺跡の乗る低位段丘は鷹巣山丘陵からの出口付近に形成されており、滝田台地と呼ばれている。

面積は比較的広く、約6×3kmを計る。段丘崖における低位水田面および河川との比高は4m前後となる。

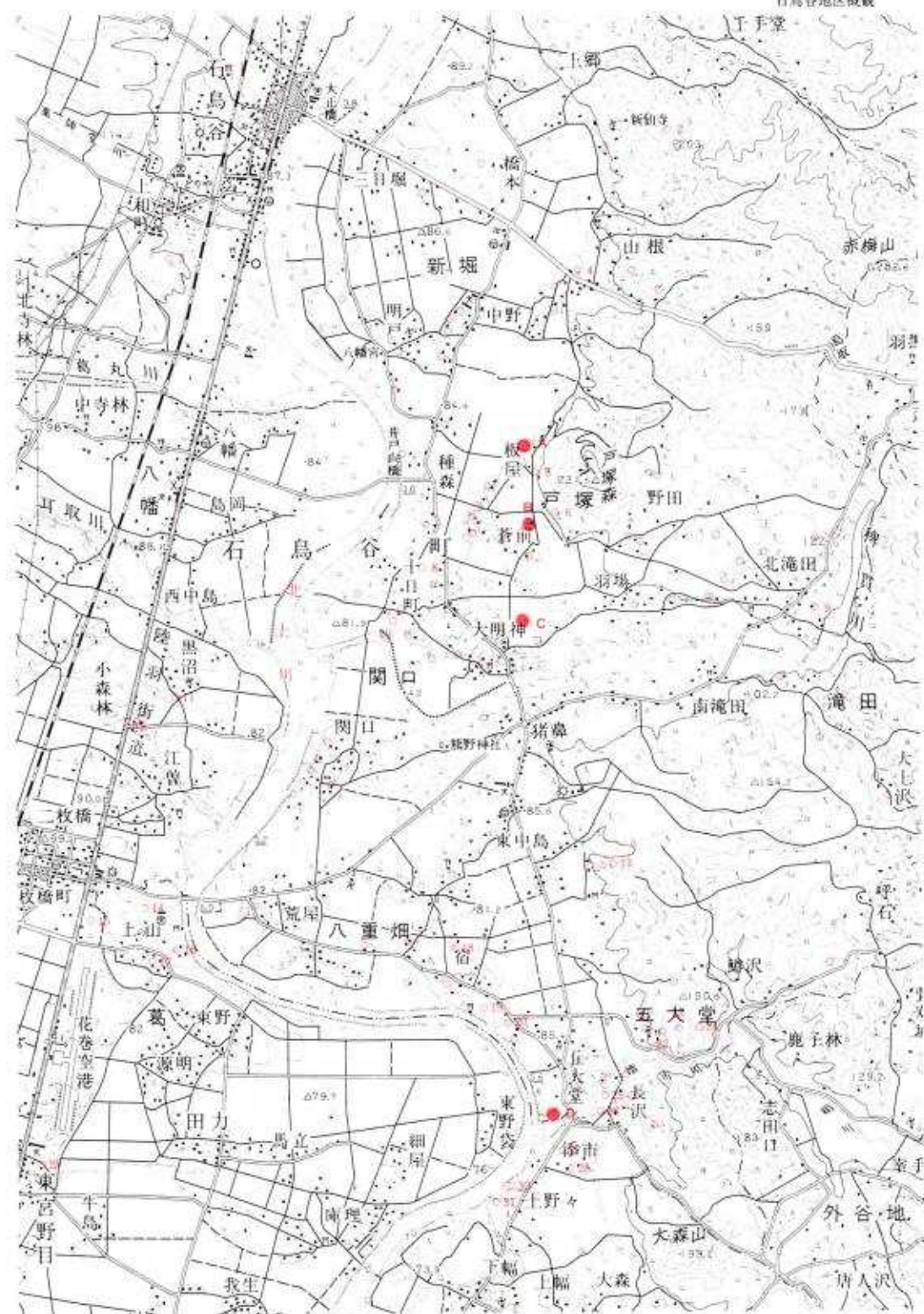
なお第Ⅷ図の地形分類概念図は岩手県企画開発室発行の北上山系開発地域土地分類基本調査『花巻』を参照した。



1. 輻遺跡 2. 大曲遺跡 3. 大明神遺跡 4. 高畑遺跡
(次年度報告)



第VIII图 石鳥谷地区地形分類概念图



- A 幅 道跡
- B 大 曲道跡
- C 大 明 神道跡
- D 高 畑道跡

(第IX図) 遺跡の位置と周辺の遺跡

(第VI表) 周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	熊野堂遺跡	平安	17	山ノ神遺跡	縄文(前期)
2	新堀館遺跡	中世	18	宿遺跡	縄文(中・晩期)
3	北向い古墳群		19	八重畑館遺跡	中世
4	侍中館遺跡	中世	20	ジャノメリ遺跡	平安
5	鳥遺跡	平安	21	光勝寺鐘桜跡	平安(?)
6	野沢川遺跡	縄文(後・晩期)	22	すみこ館遺跡	中世
7	戸塚遺跡	平安	23	光勝寺本堂跡	平安(?)
8	七ツ森遺跡	縄文	24	寺場古塚遺跡	平安
9	大川原館遺跡	縄文(前・中期)	25	長沢遺跡	縄文(晩期)
10	十日市古墳群		26	安緒屋敷遺跡	縄文(晩期)
11	江曾遺跡	縄文	27	漆市古墳	
12	江曾一里塚	江戸	28	漆市遺跡	縄文(中・後・晩期)、弥生
13	猪鼻遺跡	縄文	29	十三塚	
14	佐渡川古墳群		30	漆市館遺跡	中世
15	方八丁遺跡	平安	31	古堂遺跡	平安
16	上ノ山遺跡	縄文(前・中期)、平安			

2 周辺の遺跡

北上川左岸の石鳥谷町内に所在する周知の遺跡⁽⁵⁾には、縄文時代のものとしては、安緒屋敷遺跡・宿遺跡・大川原館遺跡・七ツ森遺跡・長沢遺跡・反町遺跡などの多くの遺跡がある。平安時代に属するものとして、寺場遺跡・戸塚遺跡・鳥遺跡・光勝寺遺跡などがある。また、館跡が数多く残っていることにも特色があり、八重畑館・すみこ館・新堀館・関口館・赤間館・笹原館・大川原館・猪鼻館などの中世以降の館跡が知られている。

量的には、縄文時代の遺跡が多くを占めており、平安時代のものはやや少ない。占地・地形環境から、立地の関係を概観すると、縄文時代の遺跡はほとんどが段丘上に立地する。平安時代の遺跡にはややばらつきがみられ、段丘上に立地するものと、河岸低地上の自然堤防や微高地状の沖積台地などに立地するものに分かれる。

なお、53年10月に石鳥谷町の左岸地域を対象にして新たに分布調査を実施しており、周知の遺跡⁽⁶⁾に数倍する遺跡を発見している。これらの遺跡も上記の立地条件から大きくはずれるものではない。

注

- 1) 岩手県企画開発室(1976) 『花巻』北上山系開発地域土地分類基本調査
- 2) 中川久夫ほか(1963) 『北上川中流沿岸の第四系および地形』『地質学雑誌』第68巻第812号
- 3) 岩手県企画調整部(1978) 『岩手県統計年鑑』
- 4) (3)に同じ
- 5) これらの遺跡はすべて未調査であり、所属時期の認定は表採資料に拠っている。
- 6) 第5図に、遺跡の位置のみを記載しており、第VI表には遺跡名を表示していない。

だい みょう じん 遺 跡
大 明 神 遺 跡

遺 跡 記 号：DM

所 在 地：石鳥谷町関口第16地割37-2他

調 査 期 間：昭和49年10月25日～11月22日

調 査 対 象 面 積：3680㎡

平 面 測 量 基 準 点：東京基点 446.050km (BA50)

基 準 高：海拔 88.50m

1. 遺跡の位置と立地

〈位置と地形と現状〉（第Ⅷ図P190、第Ⅸ図P191）

大明神遺跡は、石鳥谷町八重畑字関口地内にあり、石鳥谷町の中心街の南々東約4.75km地点付近に位置している。遺跡は、裨貫川北岸の下位河岸段丘上に立地しており、すぐ東側にはこの段丘を開析して南に開く浅い谷が走っている。また遺跡の北々東1.5km付近には、戸塚森がある。この山は海拔221.6mを測り、周囲の台地や丘陵地より一段と高く盛り上がっている。遺跡付近の高度は海拔89～90m前後で、周囲の低地より約1mほど高くなっている。

現在、遺跡所在地は畑地、果樹園、水田、原野になっているが遺跡の付近一帯からは、第二次大戦前、開田工事を行なった際に、多数の遺物が出土したと伝えられている。

〈周囲の遺跡〉（第Ⅸ図P191、第Ⅵ表P134）

裨貫川の下流域には、大明神遺跡以外にも多くの遺跡がある模様である。しかし、その多くは所在地が確認されておらず、現在までのところ、わずかに大川原館、戸塚、野沢川、幅、大曲、十日市古墳群、七ツ森などの遺跡名が上げられるに過ぎない⁽¹⁾。しかも、これらの遺跡のうち幅、大曲⁽²⁾の2遺跡を除いては未調査のため、その時期や性格については、ほとんど不明である。これらの他にも、石鳥谷町の北上川東岸部には、数多くの遺跡が点在している。遺跡は特に花巻市との境界部付近を流れる添市川の下流域に多く、その中には同じ新幹線ルートにかかる縄文時代中期末の高畑遺跡⁽³⁾も含まれている。

2. 調査の方法と経過

東北新幹線は遺跡全体のやや西寄り部分を南北方向に走っている。今回の調査は、この東北新幹線の建設予定地にかかる長さ275m、巾15mの節囲について実施した。

〈方法〉

調査は序文2で述べた方法に準じて行なった。なお、調査区内の平面測量の基準原点として新幹線ルート中軸線上の東京起点466.050km地点上にB A50を設定した。そして、この点を基準にして先の中軸線に平行直角になる形で、調査区全体を3m×3m単位の方眼網に区分し、地割りを行なった。

なお、高度測量に関わる基準レベルについては、海拔88.50mに統一するように心がけた。

〈経過〉

調査は、昭和49年10月25日から同年11月22日まで行なった。10月25日から10月27日までは、調査区南端部のG～H区付近の表土剥ぎと、雑物撤去作業を行なった。この作業は人手の都合がつかなかったので、パワーシャベルとブルドーザーを使用して行なった。

10月29日から10月31日までは、調査区域全体の基準測量を行なった。その作業と一部併行する形で10月29日から11月15日までは、調査区の北端部から南に向かって粗掘りを行なった。

その結果、調査区のやや北寄りの区域で、平安時代の住居跡1棟と弥生時代の遺物集中包含区域1ヶ所が発見された。

平安時代の住居跡の調査は、前記粗掘り作業と併行する形で、11月6日から11月13日まで行なった。弥生時代の遺物包含層の調査は、11月14日に開始し、11月21日まで行なった。以上の経過をたどって、11月22日に調査の全予定を終了した。

3. 調査の結果

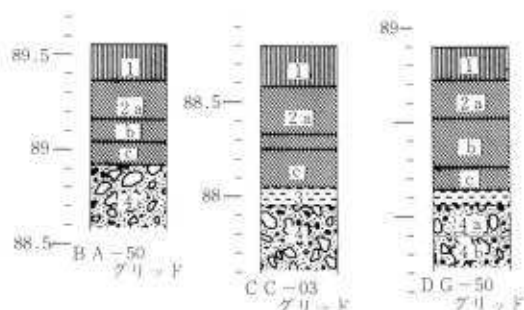
(1) 基本層序

大明神遺跡の調査では、調査区内の土層堆積の状況を知るために、南北に計3ヶ所の土層観察用トレンチを設けた。その成果は第1図、および第1表に示す通りである。これによって次の事が解った。

調査区の南部と北部では、地表面で0.6～1m前後の比高差が見られ、北部区域の方が幾分高くなっている。しかし、その基本的な土層構成は、中間に介在する一部の層を除いて、大体同じである。すなわち遺跡付近では、最上層に厚さ20cm前後の黒褐色耕土層が乗り、その下に暗

(第1表) 大明神遺跡土層注記

層番号	土色	色記号	土性	
1	黒褐色	Hue 7.5Y R 5/	暗褐色土(クロボク質)	
2	a	暗褐色	" 5/	"
	b	黒褐色	" 5/	"
	c	"	" 5/	"
3	a	褐色	" 5/	暗褐色土
	b	黄褐色	Hue 10 Y R 5/	砂礫まじり粘土
4	"	"	砂礫	
層番号	層厚	備考		
1	18～25cm	表土、耕土		
2	a	20～26	遺物包含層	
	b	6～25	" やや固いしまり	
	c	6～20		
3	a	8～10		
	b	15±		
4	20±e	基礎礫層		



(第1図) 大明神遺跡土層柱状模式図



(第2図) 大明神遺跡グリッド配置図

褐色～黒褐色のクロボク質埴土層が、50～60cm前後の厚さで続く。この層は土色や土のしまり具合から、さらにa、b、cの3層に細分される。そのうち上部の2層中に縄文時代以降平安時代までの遺物が含まれている。これらの層の下には北部の場合、すぐに礫層が続き、南部の場合には、中間部に粘土層や漸移層が挟まっている。以上の各層の下には礫層が続いている。

発見された遺構の切り込み面は、先の2a、2b層のうち2a層の下部付近にあるらしい。この2層の部分は場合によっては、人為的な擾乱が著しく、かなり複雑な堆積状況を示している。

〔2〕発見された遺構と遺物

今回の調査では、調査区の北側部分に弥生時代の遺物集中包含区域が1ヶ所、平安時代の住居跡が1棟がそれぞれ発見された。次にこれらの遺構の説明を行なう。

〈弥生時代遺物包含区域〉

〔位置〕 この遺物包含区域は、調査区中央部北寄りのC H06、03、50、C-I06、03、50、C-J06、03、50、D A06、03、50の各グリッド付近に広がっている。

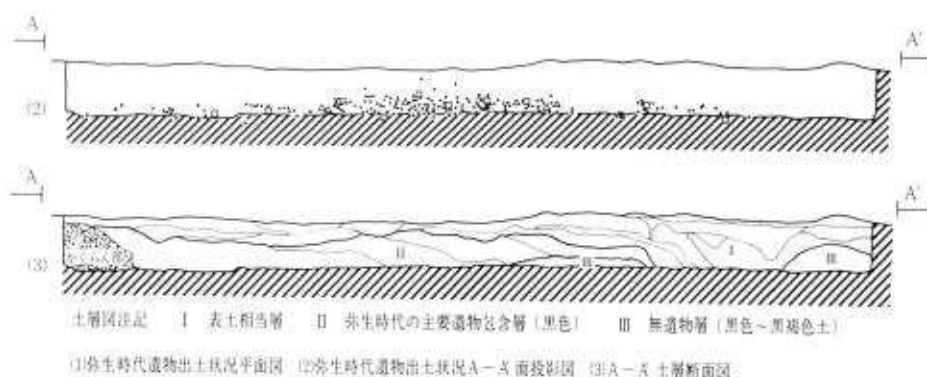
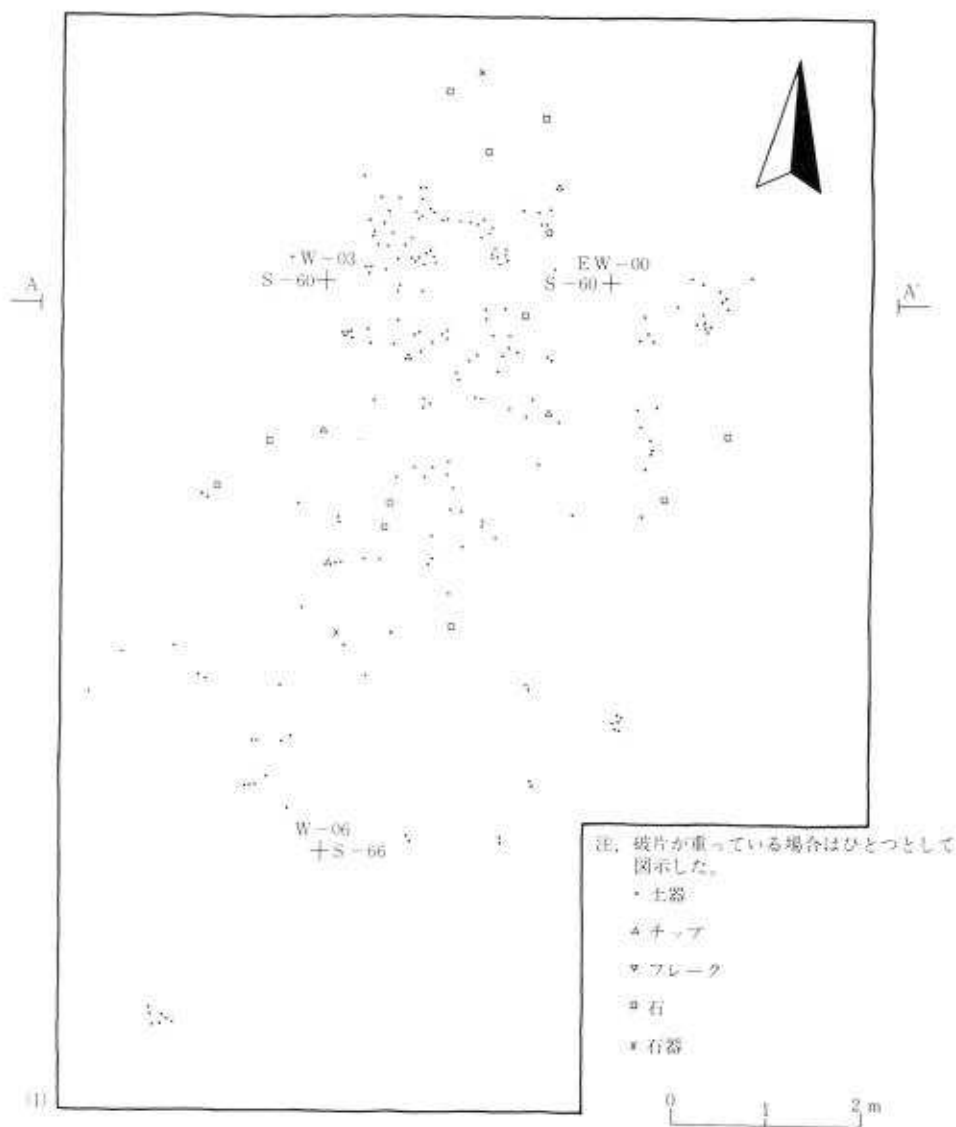
〔規模〕 遺物包含区域範囲は、周辺部の擾乱が著しく、十分に確認できなかったが、少なくとも南北12m、東西9m前後の広がりを持つものと思われる。

〔埋土状況〕 全体の土層の状況は、遺物包含区域全体の調査が実施できなかったので不明である。ただし、調査された部分の土層についてみると、遺物包含層は基本層序で示した2層に対応する層であるが、その堆積状況は土層観察トレンチなどに見られる状況とは著しく異なっている。ここでは、第3図にも示すように、2層の部分が土色や土のしまり、それに混入物の僅かの違いによって、多くの薄層に細分される。しかし、いずれの層も土色は黒褐色～暗褐色の範囲に含まれ、土性はクロボク質埴土の範囲に入るものと考えられる。

各分層毎の広がり、土層の差異が微妙であるため、平面的には確認できなかった。したがって、土層堆積の様相についてはよく解らない。ただ、地形の原状から判断すると、これらの土層は浅い凹地、ないしは掘り込みの遺構内を埋める堆積土層のように思われる。しかし、その堆積作用が人手によって積極的になされたものか、やや自然な流入の形でなされたものなのか不明である。

〔遺物出土状況〕 遺物は第3図-1、2でも解るように、IIで表示された各黒色系土層中に多く見られる。そのうちわけを見ると、少数の石器、石材類を除いて、ほとんどが土器の破片で占められている。これらの土器破片は、大部分が接合の困難な細片である。

層中の遺物出土状況を見ると、遺物の出土レベルには多少の幅があるものの、地表下0.4～0.6m付近に集中している。さらに、その広がりを平面的に見ると、大部分の遺物は先に述べた



(第3図) 弥生時代遺物包含区域II層下部における遺物出土状況図ならびにA-A'土層断面図

グリッドの付近一帯に散布している。そのなかには、摩滅の著しいものも多く見られる。しかも土器片の散布状況には、意図的な配置が見られない。

以上の傾向は、各層の遺物について認められ、これらの包含層が全体として遺物廃棄、ないし廃棄遺物の二次的流入によって、形成されたものであることを示唆している。

【出土遺物】 包含層中の出土遺物は、全部で942点である。その内わけを示すと、第7-1表のようになる。この表でも解るように、層中の遺物は大半が土器類で占められている。

A、土器類 (第4図1~19、第5図4、13、第2、6表、写真5、6-1~4)

土器類は1例を除いて全て破片である。その総点数は892点であるが、大部分は胎土中に砂などの混入物が多く含まれる粗製土器類の破片で、胎土のしまりの良い精製土器は比較的少ない。遺物整理が充分進行していないので、詳細は不明であるが、器形としては深鉢、浅鉢、壺、甕、それに台付きの浅鉢などの存在が認められる。蓋状の土器は見られないようである。これらの土器は、いずれも時期的には広い意味での谷起島式土器などに比定される土器類である。

・口辺部、胴部破片

土器類の破片は、前述した通り、接合の困難なものが多い。そのため、各器形の様子は余りよく解らない。ここでは口辺部や胴部の土器片を胎土や文様、形態上の特徴から以下に述べる3種類に大別し、その中で各々細分しながら、説明を加えていきたい。

1群 (第4図1~19、第5図4、7~13、第2表、写真7-5~8)

いわゆる精製土器の範疇に含まれる土器類である。しかし、発見された土器片は余り保存状態が良くなくて、全体的に風化が進んでいる。

この類の中には、文様、形態上いくつかの異なるグループが含まれており、さらに細分が可能である。

1類 壺に分類できる破片である。第4図1、3はその口辺部の拓印である。図からも解るように、この種の土器は平鉢を有し、口辺部には2~3条の沈線がめぐっている。また口辺部内面の口唇に沿った部分には、沈線1条がめぐっている例が多い。

2類 浅鉢ないし台付の鉢型土器と思われる破片である。第4図2、4、8、9、10、11、12、14、15、16、17、18はその口辺部資料である。同じ図の13、19は胴部資料である。また第5図4は台付土器の全形、13は台付土器の体部下半の破片である。これらの土器類は沈線ないし、細粒の単節斜縄文を主体とした土器である。

a: そのうち、2、4、10は口辺部に平行沈線があり、その下部に沈線による変形工字文類似の文様区画のあるものである。この文様は縄文晩期大洞A'式の文様に類似するが、一般に線が細くなる傾向が見られ、コブ状の小突起が認められない。地は無文である。胴部から口辺部にかけての器壁の立ち上がりは、2、4、10のように若干内湾気味に外傾する例が多

い。口辺部は、4、10のような平縁のもの、2のような波状口縁になるものの2種が見られる。そして多くの場合、口辺部上端付近の内面に沈線が1条めぐっている。さらに台付土器の場合には、第5図13のように変形工字文類似の文様帯の下に沈線が1条めぐり、その下部に右上がりの単節斜縄文の施される例が知られている。

b：9のように平縁で器壁が直線的に外傾する個体である。この個体ではさらに無文地の口辺部に平行沈線が2～4条めぐり、胴体下部にも沈線が1条めぐっている。また口縁部内面には、沈線1条がめぐっている。

c：8のように緩い波状口縁を持ち、口縁部上端に沈線が1条めぐり、器壁が直線的に外傾する個体である。この種の個体はさらに、胴体部上半に巾広な三角形の沈線区画された縄文帯を有する。そして縄文帯の辺縁部には沈線に沿って、点列が1条刺突されている。縄文は原体を横回転させた、右上がりの単節斜縄文である。

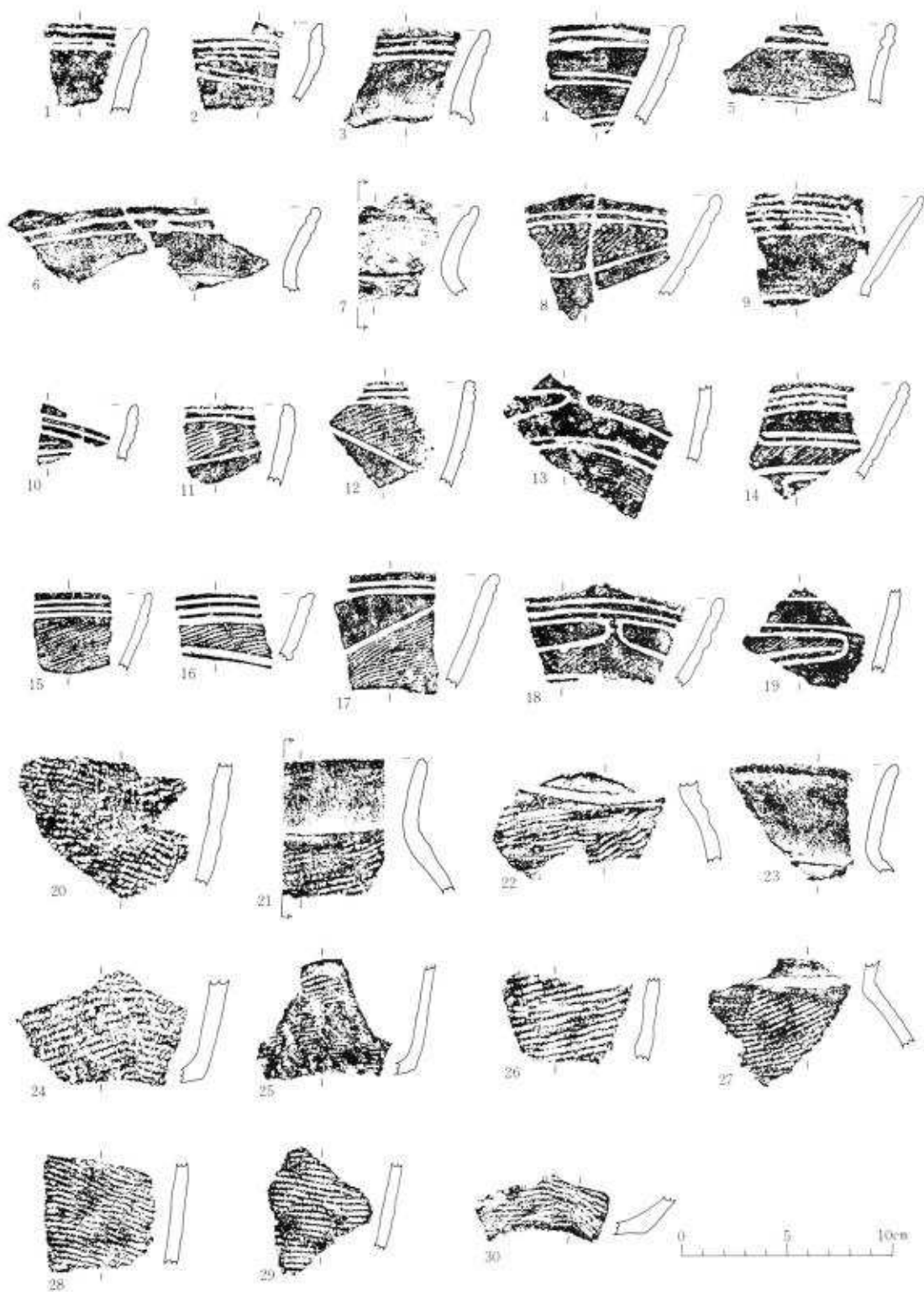
d：11、12、16、17などの様に口辺部は平縁で、器壁が直線的に外傾し、口辺部の上端に平行な沈線が2～3条めぐる個体である。その胴体部には沈線による巾広な鋸歯状の入り組み区画が行なわれており、その一方の区画には、縄文が施されている。さらに口辺部の内面上端には、多くの場合沈線が1～2条めぐっている。今回の調査では、この種の土器で全形の知られる破片は出土していないが、他の遺跡の資料などとの比較から、この器種の存在が推定された。

e：13、14、18、19の様に平縁ないし波状の口辺を有し、器壁が直線的に外傾する個体である。この種の土器もやはり口辺部上端に、2条前後の平行沈線がめぐり、胴体上部には沈線によって変形工字文風の文様区画が行なわれている。この区画は文様区分上、内帯、外帯の2つの部分に分けられるが、そのうち一方には、必ず縄文が施されている。したがって、この種の土器では縄文をどちらの文様帯に施すかという事で2種に分けられるらしい。しかし、この点に関しては、今回の調査資料では十分な検討ができなかった。

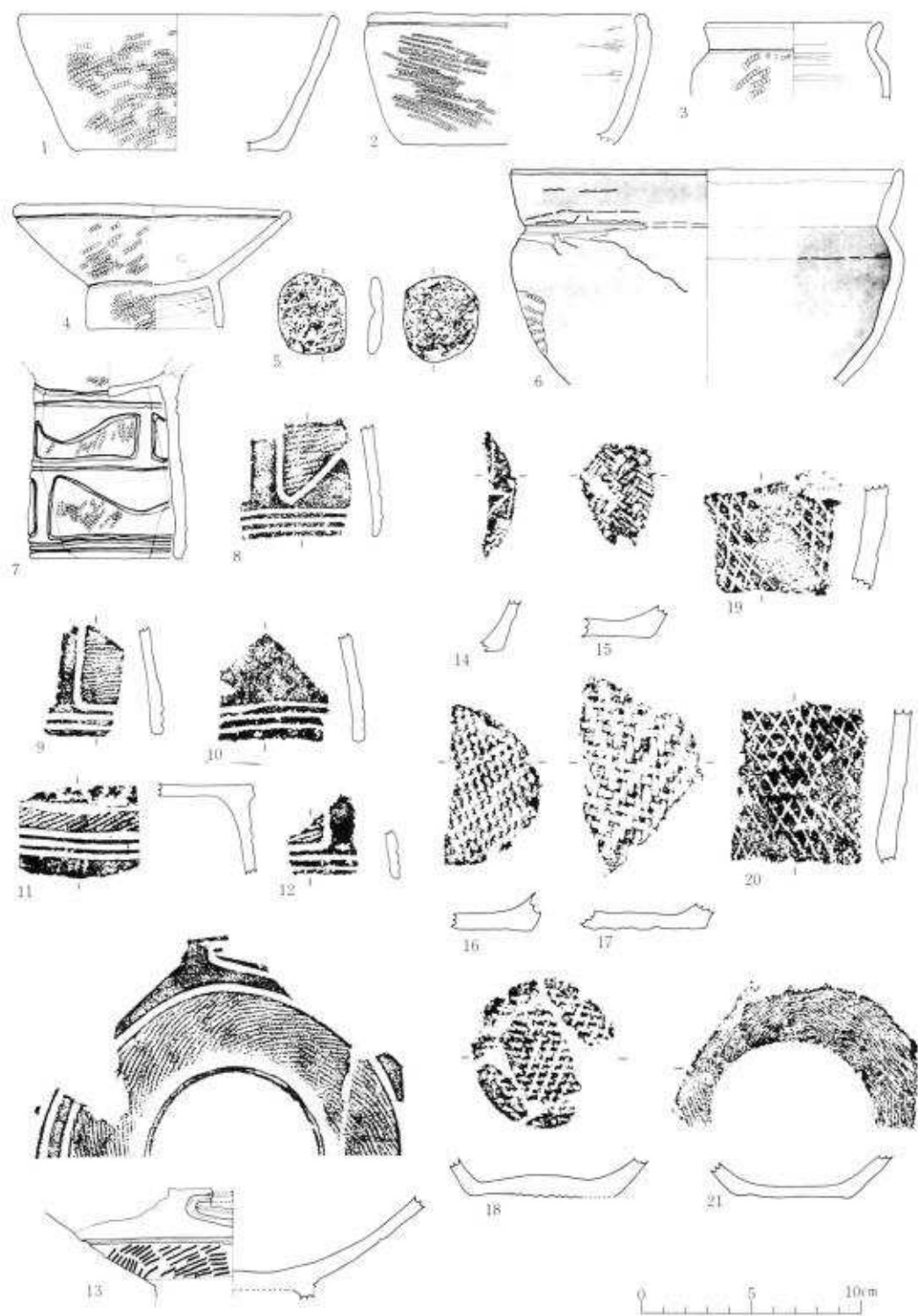
f：第5図4の様に平縁で口辺部と脚部上端に沈線が1条ずつめぐり、器壁の外側全体に単節の右上がり斜縄文の施された台付土器である。口辺部内面上端に沈線が1条めぐり、器壁の内側全体にヘラミガキの痕跡が認められる。この種の器種として、確実なものは本例のみである。

II群 (第4図、20～30、第5図1～3、6 第2表、写真7-5～7)

粗製土器の範疇に含まれる土器類で出土した土器片の大多数を占めている。これらの土器類の器形としては、深鉢や広口壺、ないし甕類が予想されるが、ほかに第5図1～3に見られる様な小型の浅鉢や広口壺などの器種が、少数混っている。これらの土器類は普通胴体部全体に横ないし、やや右上がりの単節斜縄文が施されている。その縄文は多くの場合、R<土盛り(



(第4図) 弥生時代遺物包含区域出土土器拓本(1)



(第5図) 弥生時代遺物包含区域出土土器拓本(2)および実測図

S字) 原体の斜め回転によって押圧されたものである。節の粒径は、小型の器種を除いて一般に精製土器のそれより粗である。

II群の土器片もI群の場合と同様、全形の知られる破片はほとんどない。第4図21、22、23は口辺部および胴体部20、26、28、29は胴部24、25、30は胴下端部から底部にかけての破片である。また、第5図1～3、6には比較的形状の良く知られる資料を図示した。2類の土器は比較的形状の知られる破片を中心に次のように分類された。

1類 第4図21、22、23、27に見られるような広口の壺、ないし甕、あるいは深鉢に分類される土器である。この種の土器は、一般に胴上半部に最大径を有する。口径は、胴部最大径と同大ないし、それよりやや小さいくらいの場合が多い。修復可能な破片が少ないため、胴上部の詳細な全体形状は不明であるが、破片の観察によると口辺部は、頭部からやや緩く外傾する。外傾の仕方や口辺の巾は破片によって、幾つかの差異が認められる。

口辺部の破片には、平縁のものが圧倒的に多く、波状口縁のものは1～2点しか見られない。平縁のものの中には、口唇部の上端に浅くて、細い沈線の走る例も見られる。

一般に口辺部は無文で、頭部を境としてその下の部分には、先に述べた様な単節斜縄文ないし、横縄文が施されている。頭部には、1条の沈線や段の見られる場合が比較的多い。この種の土器片には第5図6の様に器面に炭化物がこびりついた例が比較的多いので、煮沸具としての用途が考えられる。

2類 第5図1、2に見られるような胴体部全体に単節斜縄文の施された小型の浅鉢類である。この種の土器は器面が直線的ないしは、やや内湾気味に外傾し、口辺部は平縁で時には、その上端の内外に沈線が1条ずつめぐっており、数は多くない。

3類 第5図3に見られるような小型広口甕で、2-1類の広口甕を全体的に極端に縮めたプロポーショナルを有するものである。

III群

その他、1、2類に分類した以外に無文の鉢型土器と思われる破片や、その他、形状の不明な土器細片も幾つか見られる。これらは数量的にも少ないため、一応ここでは3類として分類し、報告するに留めたい。

・脚部・底部破片 (第5図4、7～12、14～18、21、第2表、写真7-1～4、8)

(脚部) 第5図4、7～12は台付土器の脚部の例である。脚部破片は、全部で26点出土している。これらの脚部は4を除いては、口辺部、胴部の項で1-2類a～eに分類された器種に付着するものである。

これらの脚部は第5図7にも見られるように、器壁が直線的に直立ないし、やや内傾する形で上の主体部に取りつくものと思われる。破片の中には、第5図10のように内湾気味の器壁を

有する例もあるが、破片が小さくてはっきりした事は解らない。

脚部の底辺と上端には、平行沈線が2～3条めぐり脚の身部には、沈線凹形文様が1～2段施されている。そして、凹形の内側に右上がりの単節斜縄文が施されている。その逆の場合もあるらしいが、本遺跡では確認されていない。

(底部) 底部破片は全部で36点出土している。大部分は第5図21の様な無文であるが、粗製土器類の底には網代や木の葉圧痕の付いた破片も、少数見られる。第5図14～8、21はそのであるが、14に木の葉圧痕が見られる他は、全て網代圧痕のある破片である。

15の詳細は不明であるが、2条を一束とした経条体と、2条を一束とした緯条体の組み合わせからなる原体の圧痕のように見える。その場合、原体としては綾織りないし、つづら織りのようなものが考えられる。

16、17、18は綾織り状の原体の圧痕である。16、18と17は条体の中に違いが見られるだけでなく、編み方にも差が見られる。すなわち、16、18では横方向が1本潜り、2本越えて縦方向が2本潜り、1本越え、1本送りの形を取るのに対し、17では横方向が3本潜り、1本越え、縦方向が2本潜り2本越え、1本送りの形になっている。さらに17では送り方向が左右逆になっていて、矢羽根状模様を作り出している。16、18の編み方は縄文晩期花巻市高松遺跡でも見られ、一般に東北地方の縄文時代の後晩期に、ごく普通に見られる形式であるとされている。17の編み方は、関西方面の縄文時代の網代に多用されているらしい⁽¹⁶⁾。

(第2-1表) 縄文時代及び弥生時代の土器類の観察表(その1)

図 番号	写 真 番 号	出土区域	器 種	破片部位	色 調	胎 土	口 辺 形 状	文 様 構 成
4-1	7-5	C103 2層	壺	口 辺 部	橙	やや粗	平縁、やや外反	外周平行沈線三条、内周沈線一条
2	"	C150	不 明	"	"	やや密	内寄、外傾	沈線文、内面沈線一条
3	"	CJ03	壺	"	灰褐色	やや粗	平縁、外傾	沈線三条、内面沈線一条
4	"	DA03	不 明	"	に ぶ い 褐色	密	平縁、外傾	沈線区画、内面沈線一条、ヘラミ ガキ
5	"	"	深 鉢	"	黒褐色	やや粗	平縁、外反	口辺部沈線二条、頂部沈線一条、 内面沈線二条
6	"	"	不 明	"	褐色	粗	波状口辺	沈線二条、頂部沈線一条、内面沈 線二条
7	"	"	壺	"	暗 赤褐色	やや密	波状口辺、 やや外反	沈線二条、内面横沈線一条
8	7-5	"	不 明	"	に ぶ い 橙 色	密 精良	波状口辺、外傾	沈線区画、右上がり単節斜縄文帯十 点列文+無文帯、内面横沈線一条
9	"	DC03 2層	"	"	"	やや粗	平縁、外傾	平行沈線、内面沈線一条

図 番	版 号	写 真 号	出土区域	器 種	破片部位	色 調	胎 土	口 辺 形 状	文 様 構 成
4-10	7-5	DA06	不明	不明	口辺部	灰褐色	密	やや内青、外傾	沈線文+縄文、内面沈線一条
11	"	DA50	"	"	"	褐色	やや粗	平縁	沈線区画、右上がり単節縄文、内面沈線一条+無文帯
12	7-6	CJ50	"	"	"	にぶい褐色	やや密	外傾	11と同じ
13	"	DA50	"	胴部	"	褐色	やや密 砂多し	"	沈線区画右上がり単節縄文帯横位 単節縄文帯+無文帯
14	"	C103 2層	"	口辺部	"	橙色	やや密	平縁、外傾	沈線区画+右上がり単節縄文帯+ 無文帯、内面沈線二条
15	"	DD06	"	"	"	にぶい褐色	"	"	平行沈線三条+右上がり単節縄文、 内面沈線一条
16	"	DB06	"	"	"	にぶい 橙色	密	"	沈線+やや右上がり単節縄文、内 面横沈線一条、口唇部ヘラミガキ、 朱塗痕有
17	"	DG03	"	"	"	赤褐色	密	"	沈線区画、やや右上がり単節縄文、 内面沈線一条
18	"	CJ03	"	"	"	にぶい 黄橙色	やや密	8と同じ	13と同じ
19	"	DA50	"	胴部	"	にぶい 橙色	やや密	"	沈線区画、右上がり単節縄文帯+ 無文帯
20	"	CJ50	深鉢?	"	"	橙色	粗	"	横位縄文、S字原体、内面横ヘラ ケズリ
21	"	C150	壺	口辺部	"	にぶい 橙色	"	平縁、外傾	口辺部無文、肩部沈線一条、胴部 やや右上がり単節縄文
22	7-7	不明	"	胴部上面	"	"	"	"	頸部沈線一条、緩い石土り単節縄 文、内面指横ナテ痕
23	"	CJ03	深鉢	口辺部	"	"	"	平縁、外傾	無文横ナテ痕、頸部沈線一条、胴 部縄文
24	"	不明	"	胴下部- 底部	"	にぶい 褐色	粗 砂多し	"	横位単節縄文、S字原体、底部ヘ ラケズリ
25	"	DA03	鉢?	胴下部	"	にぶい 橙色	やや粗	"	外傾右上がり縄文
26	"	CJ50 DC50	鉢?	胴部	"	橙色	"	"	右上がり縄文
27	"	CJ03	鉢	胴上部	"	褐色の 灰	やや密	"	くびれに沈線、右上がり縄文
28	"	CJ50 DC50	"	胴部	"	"	やや粗	"	右下がり単節縄文、S字原体
29	"	DA03 DA06	鉢?	"	"	"	"	"	平行縄文
30	"	CB06	深鉢?	底 部	"	明石 褐色	密	"	底辺部横位単節縄文、S字原体、 中横ヘラミガキ